



神戸大学大学院 国際文化学研究科

Graduate School of Intercultural Studies, Kobe University

グローバル社会のフロンランナーを育成する

研究科への招待

コース紹介

国際交流

充実した研究・教育サポート体制

Invitation

Courses

2016-2017

神戸から始まる 新しい国際文化研究

神戸大学大学院国際文化学研究科は、2007 年に総合人間科学研究科を改組して設立された研究科です。

冷戦体制の崩壊後、グローバル化の進展に伴って、人と文化のハイブリッド化がますます進んでいます。まさにグローバルに展開する社会の変化をどう捉え、その意味をどう読み解くか。現象の変化と同時にそれを捉える枠組み自体が大きく問われています。

私たちの研究科は、現代世界の変容と持続、両者の織りなす多様な諸相を、「文化」という視点から探求することを教育・研究の課題としています。国際文化学とは、単一のディスプリンを指すものではありません。多様な文化のあり方や文化相互の関連性を共通のテーマとして、さ

まざまディスプリンから学際的にアプローチしていく研究分野です。研究科を構成する 15 のコースに示されているように、複眼的視点をいかに確保していくか、そのこと自体を自覚的に推進してきました。

全国の国立大学で最初の国際文化学を標榜する大学院として成立した私たちの研究科は、「文化」という視点を中心に、そしてそうした切り口の有効性をも批判的に検証しつつ、先端的な研究領域と分析手法を切り開いていくことを目指しています。門戸は開かれています。新しい知の枠組みをどのように構築していくのか。

知的好奇心あふれる若いみなさんとの協同作業を私たちは心から切望しています。

日本学術振興会の研究拠点形成事業「日欧亜におけるコミュニティの再生を目指す移住・多文化・福祉政策の研究拠点形成」を実施します。

このたび国際文化学研究科が中心となって提案した「日欧亜におけるコミュニティの再生を目指す移住・多文化・福祉政策の研究拠点形成」が、日本学術振興会の研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）に採択されました。本研究科は国際文化学研究推進センターを中核として、平成 28 年度から 5 年間、海外 8 大学、国内 4 大学 1 研究所ならびに神戸大学内の他の研究科と連携しながら本事業を遂行し、移住・多文化・福祉政策に関する世界水準の研究拠点を構築します。

また、ヨーロッパ、アジア、及び国内の拠点研究機関に所属する大学院学生およびポストク研究者にとっての研究発表・共同討議の場である《次世代セミナー》を定期的で開催し、この分野における第一線の研究者の育成を目指します。

国際文化学研究科長

大月 一弘



研究科の理念と目標 Our mission and aims

国際文化学研究科は、異文化共存を見据えた文化研究の先端領域を開発し、人類文化を把握するための新たなパラダイムを構築することをその理念としています。

そしてそれを実現するために、以下の5つの研究目標を設けています。

- (1) 文化を複合体と捉え、異文化間の関係性を視座として文化研究を行う。
- (2) 複合体としての文化を、衝突、融合、交渉などの異文化間の相互作用という視座から、動的に研究する。
- (3) グローバル化する現代世界の文化変容を多角的に研究する。
- (4) 言語や情報に関わる先端コミュニケーション研究の開発を行なう。
- (5) 中心／周縁、文明／未開、先進／後進などの一元的で単眼的なパラダイムから、多元的で複眼的なパラダイムへのシフトを実現し、現代世界の文化動態に則した研究方法を開拓する。

アドミッション・ポリシー Admission Policy

国際文化学研究科では、高い異文化理解能力と自在なコミュニケーション能力を有し、豊かな学識と創造的な研究能力を備えた人材を育成することを目指しています。

上記の教育研究上の目標をふまえ、本研究科が求めるのは次のような学生です。

前期課程 Master's Program	<ul style="list-style-type: none">・文化を複合体として捉え、異文化間の関係性を多角的に探究することに強い意欲を持ち、それを達成する基礎的な能力を有する学生・言語情報コミュニケーションの動態を深く理解し、現代のグローバル社会の諸課題に取り組むことに強い意欲を持ち、それを達成する基礎的な能力を有する学生・高い専門性の上に立った学際的研究を行うことに強い意欲を持ち、それを達成する基礎的な能力を有する学生
後期課程 Doctoral Program	<ul style="list-style-type: none">・複合体としての文化の構造と動態を究明し、文化研究の先端的な領域を主体的に開拓することに強い意欲を持ち、それを達成する基礎的な能力を有する学生・言語情報コミュニケーションの諸問題を探求し、グローバル化する現代世界を多角的に研究することに強い意欲を持ち、それを達成する基礎的な能力を有する学生・高度な専門性の上に立った領域横断的な研究を行うことに強い意欲を持ち、それを達成する基礎的な能力を有する学生

ディプロマ・ポリシー Diploma Policy

国際文化学研究科は、高い異文化理解能力と自在なコミュニケーション能力を有し、豊かな学識と創造的な研究能力を備えた人材を育成することを目指しています。

この人材育成目標、及び全学で定めた学位授与に関する4つの目標をふまえ、本研究科では、教育課程を通じて授与する学位に関して、以下に示した2つの方針に従って当該学位を授与します。

前期課程 Master's Program	<p>本研究科に原則として2年間に在学し、修了に必要な所定の単位を修得し、修士論文または修了研究レポートの審査に合格する。</p> <p>本研究科学生が、修了までに達成を目指す目標は次のとおりである。</p> <ul style="list-style-type: none">・文化を複合体として捉え、異文化間の関係性を多角的に探究することができる。・言語情報コミュニケーションの動態を深く理解し、現代のグローバル社会の諸課題に取り組むことができる。・高い専門性の上に立った学際的研究を行うことができる。
後期課程 Doctoral Program	<p>本研究科に原則として3年間に在学し、修了に必要な所定の単位を修得し、博士論文の審査に合格する。</p> <p>本研究科学生が、修了までに達成を目指す目標は次のとおりである。</p> <ul style="list-style-type: none">・複合体としての文化の構造と動態を究明し、文化研究の先端的な領域を主体的に開拓することができる。・言語情報コミュニケーションの諸問題を探求し、グローバル化する現代世界を多角的に研究することができる。・高度な専門性の上に立った領域横断的な研究を行うことができる。

目次

国際文化学研究科への招待

アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシー	1
研究科の構成・研究科の育成する人材	2
博士前期課程・博士後期課程	3

15の多様な専門コース

日本学	4-5
アジア・太平洋文化論	6-7
ヨーロッパ・アメリカ文化論	8-9
文化人類学	10-11
比較文明・比較文化論	12-13
国際関係・比較政治論	14-15
モダンティ論	16-17
先端社会論	18-19
芸術文化論	20-21
言語コミュニケーション	22-23
感性コミュニケーション	24-25
情報コミュニケーション	26-27
外国語教育システム論	28-29
外国語教育コンテンツ論	30-31
先端コミュニケーション論	32
日本語教師養成サブコース	33
研究生制度	33

国際交流

留学案内	34-35
国際文化学研究推進センター	36

充実した研究・教育サポート体制

研究サポート	37
就職と進学	38-39
全学の研究支援施設・学生寮・奨学金	40
研究会・研究誌の紹介	41
論文題目	42-43
教員一覧	44-45

Invitation to the Graduate School of Intercultural Studies

15 Specialized Courses	50-57
------------------------	-------

国際文化学研究科への招待

INVITATION TO THE GRADUATE SCHOOL OF INTERCULTURAL STUDIES

◆ 研究科の構成 世界とかわり、世界で生きるための 15 の専門コース

専攻と領域

現代社会の文化のあり方を比較考察し、文化間の対立・紛争といった現代的な課題に取り組むには、個別地域の文化及び異文化間の相互関係を考察すると同時に、グローバル化する世界の文化の動向それ自体を考察する能力を培うことが不可欠です。

そのため、国際文化学研究科では、個別地域文化研究を踏まえ、異文化間の相互作用のあり方や特質を多角的に解明する「文化関連専攻」と、グローバル化による文化の現代的位相を解明する「グローバル文化専攻」の2専攻を置いています。

「文化関連専攻」には、各地域固有の文化特性や文化の変容を学際的に研究する「地域文化系領域」、異文化の接触・対立・交流の実態を多角的に探求する「異文化コミュニケーション系領域」を置き、(1) 個別地域文化の理解、(2) 異文化間の関係性・相互作用の理解、(3) 異文化

コミュニケーション能力の育成を目指します。

「グローバル文化専攻」には、グローバル化に伴う西洋近代原理の揺らぎの中にある、現代の社会的・文化的状況をトータルに研究する「現代文化システム系領域」、言語・非言語的コミュニケーション活動と多様な情報メディアの利用に関わる諸問題を探求する「言語情報コミュニケーション系領域」、外国語教育に関する先進的研究と当該分野の卓越した実践者の養成を目標とする「外国語教育系領域」、さらに、後期課程では、国際電気通信基礎技術研究所（ATR）との連携の下に、連携講座「先端コミュニケーション論」を置いています。そして、これらの領域を通して、(1) グローバル化による文化変容の解明と新たな公共文化の構築、(2) 先端的なグローバルコミュニケーションの開発、(3) グローバル化時代の外国語教育システムの開発を目指します。

専攻	領域	コース
文化関連 個別地域文化研究を踏まえ、異文化間の相互作用のあり方や特質を多角的に解明する	地域文化系 各地域固有の文化特性や文化の変容を学際的に研究する	日本学 アジア・太平洋文化論 ヨーロッパ・アメリカ文化論
	異文化コミュニケーション系 異文化の接触・対立・交流の実態を多角的に探求する	文化人類学 比較文明・比較文化論 国際関係・比較政治論
グローバル文化 グローバル化による文化の現代的位相を解明する	現代文化システム系 グローバル化に伴う西洋近代原理の揺らぎの中にある、現代の社会的・文化的状況をトータルに研究する	モダニティ論 先端社会論 芸術文化論
	言語情報コミュニケーション系 言語・非言語的コミュニケーション活動と多様な情報メディアの利用に関わる諸問題を探求する	言語コミュニケーション 感性コミュニケーション 情報コミュニケーション
	外国語教育系 外国語教育に関する先進的研究と当該分野の卓越した実践者の養成を目標とする	外国語教育システム論 外国語教育コンテンツ論
	連携講座（博士後期課程に設置）	先端コミュニケーション論

◆ 研究科の育成する人材 世界へ広がるキャリアパス

博士前期課程

文化関連専攻

—専門職として—

- ・国連、JICA 等国際機関の専門職
- ・日本文化の紹介・交流などを企画する各種団体職員・公務員
- ・博物館・美術館の文化プランナー
- ・高度な専門知識を備えた中学校・高等学校教員（英語系）
- ・地方自治体・企業における文化交流事業の企画立案者
- ・外資系・合併企業の研修担当者
- ・文化活動・異文化理解を先導する地域 NPO リーダー

—実践対応力をもったビジネスプロとして—

- ・外資系・合併企業社員
- ・商社等企業社員
- ・日本企業の海外進出要員

グローバル文化専攻

—専門職として—

- ・音楽・美術等の芸術に通じた文化政策専門職員、アートマネジャー
- ・ジェンダー・公共性等、変容する現代文化の諸問題に取り組むジャーナリスト、公務員
- ・高度な専門知識を備えた中学校・高等学校教員（英語系）
- ・語学教育系企業の社員・教員
- ・言語教育教材等の編集者
- ・留学生センター研究員・専門職員・アドバイザー
- ・日本語教員
- ・通訳・翻訳家
- ・言語系・IT 系企業研究所職員

—実践対応力をもったビジネスプロとして—

- ・ソフトウェア技術者
- ・システムエンジニア

博士後期課程

世界の「国際文化学研究」を推進する先進的研究者

—専門職として—

- ・国際機関 / 研究所研究員
- ・国公立 / 企業系研究所等研究員
- ・大学・短期大学・高等専門学校教員

取得できる学位

博士前期課程 修士（学術）

博士後期課程 博士（学術）

取得できる資格（博士前期課程）

中学校教諭専修免許状（英語）

高等学校教諭専修免許状（英語）

学会員資格（* 博士後期課程も可）

◆ 博士前期課程 — 夢に応じた2つの「学び」の形 —

国際社会のキーパーソンを育てる<キャリアアップ型>、時代をリードする新進研究者を育てる<研究者養成型>
— 入口から出口まで、目的に応じた多様なスタイル —

	キャリアアップ型	研究者養成型
入試 (一般入試、社会人特別入試及び外国籍学生特別入試)	1.基礎科目 外国語、日本古典文、情報、日本語（外国籍学生特別入試のみ）から選択。ただしコースごとに選択可能な科目を定めているので、詳細は募集要項を参照のこと。 2.専門科目 3.口述試験	
カリキュラム	<ul style="list-style-type: none"> ●キャリアアップのための高度な外国語能力・情報処理能力・プレゼンテーション能力を育成する演習科目 ●一方通行でないインタラクティブな少人数制「特殊講義」を中心に履修 ●所定の単位の修得と修了研究レポートの提出で修士号が取得可能 	<ul style="list-style-type: none"> ●指導教員による充実した個人指導（チュートリアル） ●研究者としての基礎学力を培う「高度専門演習」を中心に履修 ●後期課程の「特別演習」履修も可能 ●修士論文、または複数業績を組み合わせた「修士フォリオ」の提出
進路像	修士号を取得し、専門職として国際的に活躍する	後期課程入試を経て、後期課程に進学を希望する学生に対応。研究者や高度専門家としての道を歩む

2つの教育プログラム

博士前期課程にはキャリアアップ型プログラムと研究者養成型プログラムがあります。一般入試及び社会人特別入試志願者については、入学願書提出に際して、どちらかひとつを選択します。外国籍学生特別入試志願者については、入学後に、いずれかを選択します。

キャリアアップ型プログラム

前期課程修了後、就職を希望する学生に対応した教育プログラムです。幅広い専門的知識と実践的な応用能力の修得によって、キャリアの高度化を目指します。

特殊講義を中心とした所定単位の修得と、キャリアデザインに即した修了研究レポートの提出によって、修士号が取得できます。

研究者養成型プログラム

前期課程修了後、後期課程入試を経て、後期課程への進学を希望する学生に対応した教育プログラムです。

研究者や高度専門家の養成を目指したカリキュラムが提供されています。高度専門演習を中心とした所定単位の修得と修士論文（または修士フォリオ）の提出が修了要件になります。

その他

日本語教師養成サブコース（→P.35）、ダブルディグリー・プログラム（→P.34）があります。

アカデミック・スキル演習

各分野で研究を進めるうえで必要な方法論・技術などのアカデミック・スキルを効率的に修得することを学習目標とします。

- ・IT スキル実習
- ・アカデミック・コミュニケーション（英語）
- ・アカデミック・ライティング（英語）
- ・アカデミック・ライティング（日本語）
- ・社会研究方法論
- ・フィールド調査
- ・統計・計量分析法

修士フォリオ

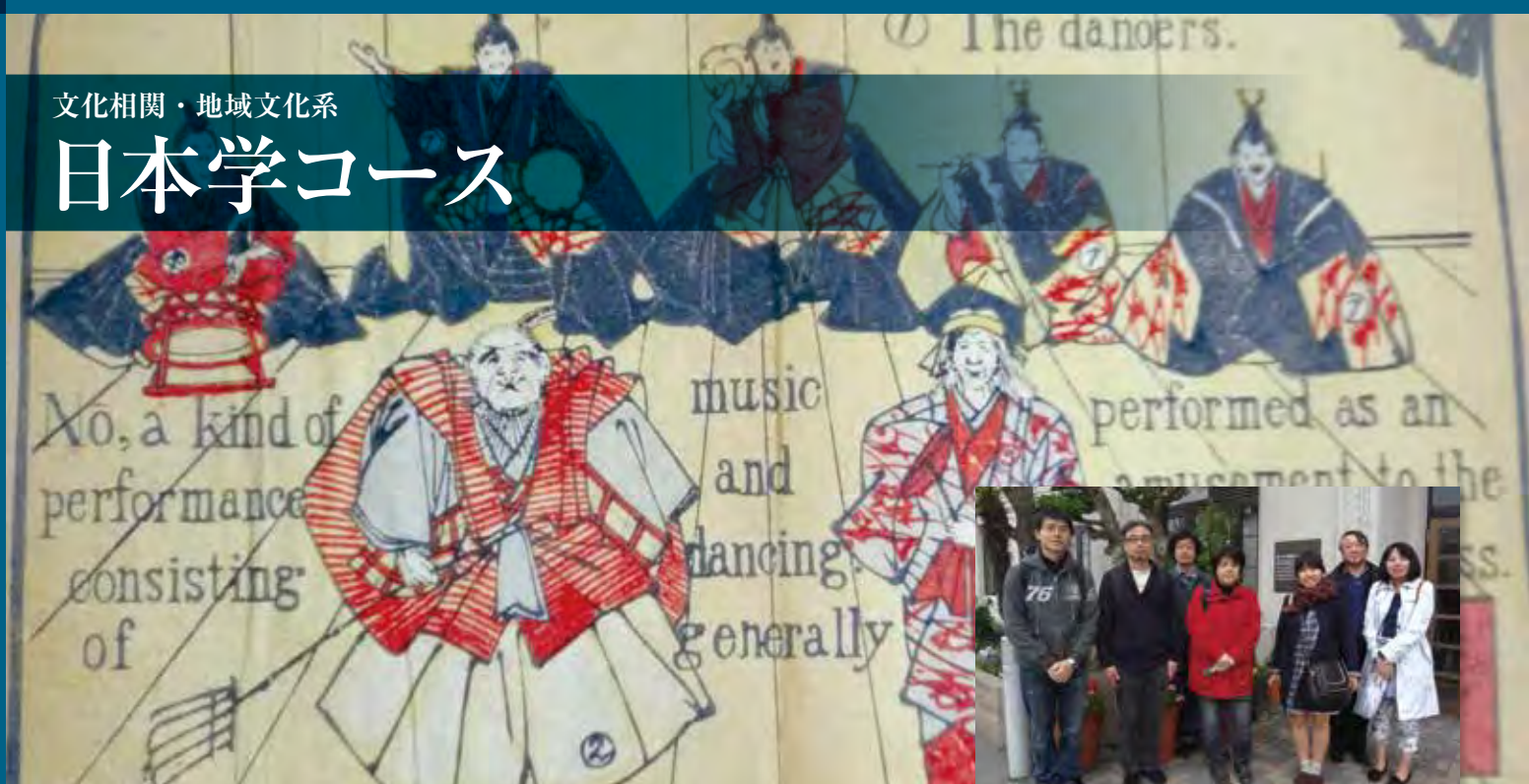
修士フォリオとは、修士論文に代えて提出できる、一つのテーマのもとでゆるやかに関連する複数の研究成果から構成されるものです。単一の論文という形式にとらわれず、従来は修士論文として認められなかった多様な研究成果作品・調査報告などがフォリオの一部として認められます。職業や職場との関連をふまえた実践的な研究が行いやすくなり、また複数回にわけて提出するため、計画的な執筆や調査が可能になります。

◆ 博士後期課程 — 自立した研究者を育てる「学び」のスタイル —

専門分野を深く究める<コースワーク型>
— 3年間で博士号を取得するための多様で柔軟なサポート —

	コースワーク型
研究テーマ	コースの研究分野に即したテーマ
カリキュラム	個人研究
研究指導体制	指導教員が中心となりコース全教員がサポート
博士号取得のプロセス	<1年次> コースの共同演習で構想を発表、学術論文の投稿、博士基礎論文の提出 <2年次> 学術論文の投稿、学会発表、博士予備論文の提出 <3年次> 毎月1回、部分草稿をコースの共同演習に提出、全教員から指導とサポートを受ける。博士論文の提出
期待される成果	個人の自由な発想と独創性を最大限に生かした学術的研究成果

日本学コース



日本学コースでは、世界の多様な文化の中で日本文化を相対化しつつ、日本という地域における人間の営みを、文化の面から明らかにします。文学・芸術・宗教・思想などの文化や社会に関する古代から現代にいたるきわめて広範囲の諸問題に取り組み、共に研究し学んでいこうと考えています。

日本の文化や社会を深く理解するためには、古文書解読や資料調査を求められることも多いのですが、そのための専門的な能力を高める機会も提供しています。通俗的な日本論に惑わされることなく、高度の専門的技量と学問的能力をもって日本の文化や社会を論じられる人材を育てることを目指しています。

進路実績 (前期課程) 関西学院大学職員、船井電機、アップオン、NEXCO中日本、コウキ商事、兵庫県立高校教諭、初芝学園中学・高校教諭ほか。
(後期課程) 学芸員(芸北民俗芸能保存伝承館、高知県立歴史民俗資料館、茶道資料館、平和祈念展示資料館)、兵庫県庁職員、高校教諭(群馬県立高校、私立灘中学・高校教員)、神戸大学百年史資料室、上海外国語大学日本文化経済学院准教授、関西学院大学言語教育センター朝鮮語講師、大学非常勤講師(立命館大学、京都精華大学ほか)、吉林大学外国語学部日本語学科講師、など。

在籍学生数 (前期課程) 4名
(後期課程) 5名

論文テーマ例 (前期課程) 「職員会議の変化と1980年代」「神戸市の男女共同参画事業と少子化」「三島流兵法書にみる村上水軍の「軍楽」」「但馬城崎「温泉時縁起」の研究」「18世紀初頭の華道の思想」「『今昔物語集』の楊貴妃説話の典拠をめぐって」「対外宣伝雑誌における日本芸能のイメージ」ほか。
(後期課程) 「『日本霊異記』の冥界説話から見る冥界観の変貌」「囃子田の演技の実践に関する民俗誌的研究」「ドキュメンタリー映画における音」「米軍占領下沖縄における文化政策とラジオ」「移動する領主をめぐる説話の諸相」「近代藩儒の研究」ほか。
廣田吉崇さんの博論に基づく著書『近現代における茶の湯家元の研究』(慧文社、2013)は「林屋辰三郎芸能奨励賞」を受賞しました。

所属教員の紹介

板倉 史明 准教授 日本文化表象論特殊講義ほか

日本映画・映画学。映画学の方法論をベースにして、国際的かつ歴史的な視点から日本映画を研究しています。

長 志珠絵 教授 日本社会変容論特殊講義ほか

近現代日本の文化史、ジェンダー史。最近のテーマは戦争の記憶論、米軍占領下日本の文化研究。

昆野 伸幸 准教授 日本言語文化論特殊講義ほか

日本思想史。1920年代から40年代にかけてのナショナリズムについて、歴史意識や宗教といった視点から研究しています。

寺内 直子 教授 日本芸能文化論特殊講義ほか

日本伝統音楽・芸能論。日本列島の文化を、身体を用いて表現する音や芸能などに注目し、アジア、世界の様々な文化との関連の中で動的にとらえます。

新任教員(2016年10月着任予定)

所属学生からのメッセージ

大城由希江さん

(博士後期課程 3 年生)

琉球大学大学院教育学研究科修士課程修了

研究テーマは「米軍統治下沖縄のラジオ・メディアと地域 / 住民」

私は博士課程において、米軍統治下沖縄のラジオ・メディアについて研究しています。第二次世界大戦を経て沖縄を統治した米軍は、長期的領有のための体制を整えていきますが、その一つにメディアの管理による情報の規制と統制がありました。実際、米軍によって設置されたラジオ放送局では、米軍の政策を宣伝することで占領統治への住民の支持を高めることを目的とした番組が流されました。政治的思惑のもとで設置されたラジオ放送は、一方で、戦後の壊滅的な生活環境に置かれた住民にとっては数少ない娯楽物として受け止められ、かつ音楽や演劇などの文化復興とも密接な関係にありました。このように戦後沖縄のなかで政治的・文化的に大きな位置を占めたラジオ・メディアへの注目から、これまでの政治史や運動史研究として積み重ねられてきた沖縄研究に、メディア研究の視点から言及したいと考えています。

大学院での講義は少人数の演習形式のものがほとんどで、自らの研究テーマについて報告する機会が多いことが特長です。日々の講義や定期的に行われるコース指導を通して、プレゼンテーションや質疑応答に関する能力の向上も含め、専門性を高めることが可能です。さまざまな専門領域を持つ教授陣から多面的に学ぶことができるのが、本コースの特色だと思います。また、とくに孤独になりがちな研究生生活ですが、日本学はコースの集団指導など、院生へのサポート体制が整えられていることも魅力の一つです。



ナショナル・アーカイヴ（米国）での調査



ジョージ・ワシントン大学沖縄文庫

修了学生からのメッセージ

浅井 雅さん

(2015 年度博士後期課程修了)

研究テーマは「近世藩儒の研究」。

私は現在、近世日本（特に18世紀）の儒者について研究しています。近世日本社会は武力によって成立し、中国や朝鮮のような科挙も存在しなかったため、その成立当初の武家社会において、学問は文弱として退けられていました。このような状況の中で、儒学は支配層である武士よりはむしろ上層庶民によって自発的に学ばれていました。ところが、18世紀になると、武家社会において儒学およびその担い手である儒者に一定の役割が与えられるようになり、上層庶民の好学者が藩儒として取り立てられるような例も増えてきます。このようにして取り立てられた藩儒たちは、上層庶民の世界とも一定の関わりを保ちながら、武家社会の中でも学問・教育などを職掌とする特殊技能者として独自の役割を果たしました。したがって、彼らは、近世武家社会における知の社会的あり方、文化の構造を具体的に明らかにする上での重要な手がかりとなります。

ところで、私は博士前期課程に入学する前には社会人で、しかも大学時代には他の分野を専攻していました。そうした理由から、入学以前は、「私でも、研究を進めていくことができるだろうか」と不安をかかえていました。

日本学コースには、私の研究分野である思想史の先生のほかにも、様々な専門分野の先生方がいらっやいます。その先生方から、博士前期課程・後期課程とご指導いただくにつれ、自然と日本の文化・社会に理解を深めることができました。また、そこで学ぶ学生の研究対象が様々であることに加え、他コースの学生との活発な意見交換を行うこともでき、ますます広い視野で研究に取り組むことができています。

廣田 吉崇さん

(2011 年度博士後期課程修了)

現在、兵庫県職員。

研究テーマは「近現代における茶の湯家元の研究」

(博士論文公刊著書で第8回林屋辰三郎藝能史研究奨励賞（藝能史研究会主催）を受賞）

私は、50歳前後の5年間、地方公務員としての仕事をしながら社会人院生を経験しました。研究テーマは本来業務と直接関係ありませんが、そもそも大学院入学を思い立ったのは、国際交流を担当していたとき、日本文化を外国人にいかに説明するのかという問題に直面したためです。このことを勉強するために、国際文化学研究科はまことにふさわしい場といえます。家元や茶の湯を研究する確立した方法論があるわけではありません。どのように研究を進めるべきかを模索しながら、日本学のみならず、幅広く他の学問領域の先生方にも親身にご指導をいただくことができました。

在職しながら通学することは、職場の理解および大学院の先生方のご配慮があつてのことですが、年次有給休暇等の利用により十分可能でした。ただし、時間を要するのは通学だけではなく、発表や論文作成のために日々の細切れの時間をも活用しました。

博士号を授与されても、職場でのキャリアアップに必ずしも結びつかないのは、残念ながら現実です。それはともかく、仕にして学べば、老いて衰えず、老いて学べば、死して朽ちずは理想であるとしても、また楽しからずやであることはまちがいないことです。

Q&A

文学研究科の教育・研究内容との違いは何ですか？

国際的な視野から教育・研究を行っています。また、文学研究科では扱われることの少ない学際的、横断的研究分野や研究テーマを積極的に取り上げています。

仕事をしながら教育課程を修了することができますか？

これまで在職中の院生に対しては、5、6時限目を開講するなどの対策を取ってきました。事前にコース教員と相談されることをお勧めします。なお、博士前期課程の学生の場合、長期履修制度を申請すれば、2年分の学費で最長4年まで修了年限を延ばせる場合があります。

アジア・太平洋文化論コース



現代のアジア・太平洋地域は、経済や国際交流等の面で激しい変動を経験しながら急速に発展しています。その意味では今まさに地球上でも最もホットな地域の一つであると言えるわけですが、それらの表面的な発展の流れを追うのみではこの地域の持つ特質は理解できません。東アジアにせよ、東南アジアや太平洋地域にせよ、各地域が古くから保持してきた複雑きわまりない多彩な伝統というものが、その伝統がグローバル化の波をかぶりつつ変容してきた結果が、現在の姿なのです。したがって、この地域の特質を深く理解しようと思えば、社会構造、宗教、歴史、経済状況等々の諸方面から掘り下げた専門的な研究が不可欠となります。本コースでは、それらの専門的な研究視点、研究方法を多様な教授陣が様々な専門領域の授業で伝授し、指導する体制を整えています。

就職実績 (前期課程) アジア・太平洋地域関連で活動している諸企業、諸団体等への就職が予想されます。平成26年修了者の就職先例: 八重洲出版。
(後期課程) 日本での大学・短大・高専・各種研究所、企業などへの就職の他、留学生の場合には出身国での大学や企業における専門職への就職等も期待されます。平成25年修了者の就職先例: 中国・内モン古工業大学人文学院専任講師。中国・北京外国語大学外国語学院専任講師。

在籍学生数 (前期課程) 9名
(後期課程) 9名

論文テーマ例

- 日本人夫を持つタイ人妻の研究
- インドネシアにおける大学生の恋愛と性をめぐる葛藤
- 国際交流活動と進路選択—東南アジア青年の船を事例に—
- アイヌ文化の表象と実践—白老町における文化活動を事例として
- 初期日豪関係の展開と日本イメージに関する歴史学的研究
- 明代(14-17世紀)の雲南麗江ナシ族・木氏土司
- 蒙古青年結盟党(1938-1941年)から蒙古青年革命党(1944-1945年)へ—日本支配期から戦後にかけての内モンゴルにおける民族主義政党—
- 清代内モンゴルにおける農地所有とその契約に関する研究—帰化城トゥム旗を中心に—(第12回アジア太平洋研究賞受賞博士論文)

所属教員の紹介

伊藤 友美 准教授 東南アジア社会文化論特殊講義ほか
東南アジア地域研究、タイ研究、仏教と女性研究などの分野を主として研究しています。

王 柯 教授 中国社会文化論特殊講義ほか
近現代中国思想史、日中関係などの分野を主として研究しています。

窪田 幸子 教授 オセアニア社会文化論特殊講義ほか
オセアニア地域の文化人類学などの分野を主として研究しています。

貞好 康志 教授 東南アジア国家統合論特殊講義ほか
インドネシア現代史、華僑華人研究などの分野を主として研究しています。

萩原 守 教授 モンゴル社会文化論特殊講義ほか
東洋史学、特に清代から近現代におけるモンゴルと中国の歴史などの分野を主として研究しています。

谷川 真一 准教授 中国社会経済論特殊講義ほか
現代中国の政治・社会運動、政治体制などの分野を主として研究しています。

所属学生からのメッセージ

汪 慧さん

(博士前期課程 2 年・研究者養成型プログラム)

中国・湘潭大学外国語学部日本語学科卒業。研究テーマは「陶磁器がつなぐ日中友好都市間の経済文化交流」。



私は、岐阜県瑞浪市と湖南省醴陵市の事例に焦点を当て、陶磁器がつなぐ日中友好都市交流について研究しております。友好都市交流とは一体何でしょうか。その目的と実態はどんなものであり、どのような歴史的・社会的文脈の中で、どう理解すればいいのかを常に念頭に置いて考察を行っています。アジア・太平洋文化論コースの魅力は、まさに授業や発表会などを通じて、学生が自ら問題意識を形成させ、それに向けて、論理的にアプローチする課題解決力を育成することです。また、本コースでは様々な分野や地域の研究をされている先生方がおられます。日々の授業によって、多様な学問的観点や研究方法を習得できるだけでなく、人生の視野も広がられます。アジア・太平洋文化論コースは自分を成長させられる貴重な場です。ここで得た知識や経験はこの先の人生の力になると信じています。

アローハン（阿如汗）さん

(博士後期課程 2 年)

神戸大学大学院国際文化学専攻博士前期課程修了。研究テーマは、「清末から中華民国初期の内モンゴルにおける近代学校教育の展開と知識人の育成」。



私は、中国の内モンゴル自治区から来たモンゴル人留学生です。1903 年、グンサンノルブ（貢桑諾爾布）というモンゴル王侯が、大阪で開催された第五回内国勧業博覧会へ招待されました。それをきっかけに、彼は日本から陸軍軍人（伊藤柳太郎）や女子教員（河原操子）を次々と招いて、新式教育を試みました。私の研究では、このように始まった近代的な学校教育が内モンゴルにおいて具体的にどのように展開し、それが内モンゴルの近代史にいかなる影響を及ぼしたのかという問題を解明することが目標になります。アジア・太平洋文化論コースには、モンゴルや中国を研究する先生方がおられます。また、

隣の日本学コースにおられる日本史の先生にお世話になったりして、私のような学生には最高の研究環境であると常に思っています。おかげさまで、私は、日本学術振興会特別研究員 DC2 に採用されることとなり、史料調査や研究に経済上の心配なく取り組むことができるようになりました。

修了学生からのメッセージ

片山 信英さん

(2015 年度博士前期課程修了)

大阪外国語大学（現・大阪大学）外国語学部インドネシア語科卒業、神戸大学法学部第二課程卒業。研究テーマは、「コミュニティ学習センターを活用したインドネシアのノンフォーマル教育の展開について」



ジャカルタの小学校にて子供たちと

私は神戸市役所に勤務する社会人大学院生として、仕事を終えた後、夜間の授業に通っていました。標準修業年限の2年では単位取得もままならないのではと心配していましたが、夏季等に開催される集中講義や長期履修制度を利用することによって、3年間で必要な単位を取得し、修士論文を作成することができました。

仕事との両立など時間的な制約の多い社会人にとって学習環境は重要な要素です。夜間も開講していること、集中講義があること、長期履修制度があることなど、本コースは社会人にも門戸が開かれています。長期履修制度とは、職業をもつ社会人や育児・介護等の事情を有する大学院生は、授業料の負担をほとんど増やさずに2年間の在学期間を最大4年間まで延長許可してもらえる制度です。

入学して驚いたことは、院生室に一人ひとり学習机が与えられることやアジアからの外国人留学生が多いことです。様々なバックグラウンドをもった学生の皆さんと授業でのディスカッションだけでなく、公私にわたる交流を通じて、これまで気づかなかった考え方に触れるなど、日々大きな刺激を受けることができました。

入学して驚いたことは、院生室に一人ひとり学習机が与えられることやアジアからの外国人留学生が多いことです。様々なバックグラウンドをもった学生の皆さんと授業でのディスカッションだけでなく、公私にわたる交流を通じて、これまで気づかなかった考え方に触れるなど、日々大きな刺激を受けることができました。

李 豊さん

(2014 年度博士後期課程修了)

北京师范大学外国語学院日本言語文学専攻（北京师范大学外国語学院日本言語文学系）卒業。神戸大学国際文化学専攻博士前期課程修了。神戸大学国際文化学専攻博士後期課程修了。

研究テーマは「1950 年代の日中貿易と日中関係一日中貿易促進団体の活動を中心に」。

現在、北京外国語大学日本語学部講師



神戸の夜景は非常に美しいが、六甲山と摩耶山とは眺めが違います。景色は見る角度でその美しさが変わります。こう思うたび、「学問は様々な視点から物事を考えるのが大事だ」という先生の言葉が胸に響きます。数ある戦後日中関係に関する研究の中で、日本の民間人の役割という視点から考

察する研究者はほとんどいません。そこで1950年代の日本の対中間貿易団体の研究をはじめたのです。

多様な視点だけでなく広い視野も院生時代に培った宝物です。国際文化学専攻での六年間、多くの先生の授業と指導を受け様々な国や地域の情報を得るとともに、発表や議論などを通じて多様な研究テーマをもつ学生たちとも交流できました。こうして私は中国や日本を超えてアジア太平洋地域から全世界にまで視野を広げ、また歴史学、文化人類学、政治学などの横断的な知識を身につけました。

現在、自分も大学教員として毎日学問と授業を楽しんでいるが、国際文化学専攻での六年間の大切さが以前より深く感じられます。楽しく有意義な院生生活を送らせてくれた先生、学生、事務の方々本当に感謝しています。

Q&A

留学生や社会人入学の院生もいますか？

本コースでは日本人と留学生の両方がいつも多数在学しており、上記の通り、社会人入学・長期履修生の院生もいます。

ヨーロッパ・アメリカ文化論コース



ヨーロッパ・アメリカ文化論コースでは、近代以降、世界の政治・経済・文化などで中心的な役割を果たしてきたヨーロッパとアメリカの社会と文化について、多様な角度から総合的に教育・研究します。これらの地域で発展した文化は世界へと広まりましたが、現在、批判的に再検討されていることは周知の通りです。それに加えて、最近では、欧米の中にありながら近代成立の過程で周縁にあった社会と文化に関する研究も進展してきています。このコースでは、以上のような成果を踏まえて、現代の我々の生活と意識に深く根付いているように見える欧米的な思考や価値観を再検討し、その21世紀における意義を探っていきます。歴史・言語・宗教・思想・文学・芸術・社会制度など、幅広い分野にわたって具体的な考察を積み重ねることで、いまだ知られざるヨーロッパやアメリカの深奥に迫りたいと思います。

所属教員の紹介

青島 陽子 講師 スラヴ社会文化論特殊講義ほか

ロシア・東欧の近代史を専門としています。とくに、前近代に多民族・多宗教が共存した当地域において、社会の近代化に付随して、ナショナリズムや「民族」の衝突がどう生じたのかに関心をもっています。

石塚 裕子 教授 イギリス市民文化論特殊講義ほか

ヴィクトリア朝のイギリス文化・社会と文学を中心に研究しています。文学ではディケンズやギaskell、ギッシングなどの小説作品に興味があり、またたとえば、社会問題、王室、余暇、教育、ジェンダー、絵画など当時の一般大衆の関心となった文化・社会を多角的に検討します。

井上 弘貴 准教授 アメリカ多民族社会形成論特殊講義ほか

政治学をベースにしながら、19世紀末から20世紀のアメリカ合衆国における知識人たちやデモクラシーの歴史を中心に、アメリカ研究をしています。

小澤 卓也 准教授 ラテン・アメリカ文化交流論特殊講義ほか

ラテンアメリカ、とりわけ中央アメリカの近現代史が専門です。最近はグローバルな歴史的視点に立ちながら、中米社会を大きく規定している民族問題や輸出作物生産文化の研究を進めています。

進路実績 (前期課程) 大成建設、ニトリ、浜松市役所、クボタ、東洋学園教諭、富永貿易、有限会社「かずさいいこ」、エクスコムグローバル株式会社、中国航空工業集団、神戸大学大学院後期課程進学、他

(後期課程) 神戸大学非常勤講師、神戸松蔭女子学院大学非常勤講師、大和大学非常勤講師、同志社大学非常勤講師、大阪市立大学非常勤講師、神戸大学大学院国際文化科学研究科異文化研究交流センター (IRec) 協力研究員

在籍学生数 (前期課程) 8名
(後期課程) 2名

論文テーマ例 グリム兄弟『ドイツ伝説集』、ウィリアム・モリス研究、『ハリー・ポッター』に見るヴィクトリア文化の受容、現代フランスのファッション、チェコロマ文学・バロック研究、アメリカイタリヤ移民、フロンテの自然観、I Love Lucyにおける視覚的ギャグの分析、ポルトガルにおけるミランダ語の成立、戦間期アメリカ合衆国における平和主義、孤立主義、ポピュリズム、英国庭園研究、他

坂本 千代 教授 フランス文化表象論特殊講義ほか

専門はフランス文化学、特にフランスの女性作家とその作品に興味があります。19世紀の女性作家ジョルジュ・サンドやマリー・ダグー、ロマン主義、ジャンヌ・ダルク等について研究しています。授業ではもっと幅広く、ヨーロッパの女性の歴史や表象の問題を取り上げたいと考えています。

西谷 拓哉 教授 アメリカ言語映像文化論特殊講義ほか

文学と映画を中心として、アメリカ合衆国の多様な文化状況や表現の独自性などについて研究しています。専門は19世紀中葉のアメリカン・ルネサンス期の文学ですが、小説の映画化という観点から両者のナラティブとしての特徴を比較することにも関心を持っています。

野谷 啓二 教授 イギリス宗教文化論特殊講義ほか

イギリスとアメリカの文化・文学とキリスト教の関係について研究しています。宗教が文化の形成にどのように関わっているか、個人と文化のアイデンティティ構成要素としての宗教に関心があります。

所属学生からのメッセージ



趙 泉峰さん

(博士前期課程 2 年・キャリアアップ型プログラム)
杭州師範大学卒業。研究テーマは「『ハリーポッター』におけるキリスト教の価値観」。

世界中で大人気の小説『ハリーポッター』をみなさんは読んだことがありますか。もし誰かが「『ハリーポッター』は悪魔の作品だ」と言ったら、多分きつと笑うでしょう。しかしアメリカでは、『ハリーポッター』は反キリスト教的で邪悪な小説であると非難するひとたちがいます。この本を図書館に置かないようにと裁判に訴える動きさえ起きています。その一方で、この『ハリーポッター』はキリスト教の精神にあふれた良い作品だと主張するひとたちもいます。では、どちらの主張が正しいのでしょうか。『ハリーポッター』のなかにキリスト教の精神ははたして存在するのでしょうか。私はそうした疑問を抱いて、近代西洋文化における宗教の役割を手がかりに、この文化のなかから生まれた『ハリーポッター』にどのようなキリスト教の価値観が反映されているかを研究しています。

ヨーロッパ・アメリカ文化論コースでは、西洋という共通点に基づいて、さまざまな専門分野を持つ先生方との議論を通じて、高度な専門的知識と幅広い視点を得ることができます。留学生として私は、毎日このような知的探検を楽しんでいます。



平野 惟さん

(博士後期課程 2 年)
同志社大学文学部文化史学科卒業。神戸大学大学院国際文化学研究所博士前期課程修了。研究テーマ「英国の手遣い人形劇パンチ&ジュディ」。

幕が開くや我が子を窓から投げ捨て、妻を殴り殺す男の話を、親も子供も喝采しつつ楽しんでいる。イギリス文化のそういう鷹揚なところが好きです。僕の研究している Punch & Judy は平たく言えば「人形劇」ですが、いつも演劇がおもちゃの歴史を勉強しているのでもありません。世界の大体は世界の大体に繋がっているもので、先月はパンチについて声震わせつつ学会で喋り、今月はディケンズの小説について同程度の真剣さで論文を書くということにもなります。歴史だろうが文学だろうが、好きなら好きにやればよいという、本コースにもそういう鷹揚なところがあります。睡眠不足と空腹感と、将来への不安もつきまとう生活ではありますが、そこは各々、鷹揚に。

修了学生からのメッセージ



矢野 陽子さん

(2012 年度博士前期課程修了)
同志社大学文学部英文学科卒業。神戸大学国際文化学研究所博士前期課程修了。
研究テーマは「シャーロット・ブロンテと自然」。
現在、富永貿易株式会社(食品メーカー・商社)勤務。

19 世紀イングランドの作家 C・ブロンテについて、都市ロンドンでの経験を取りあげつつ、彼女の自然観に焦点をあてて作品の考察を行いました。本研究科の魅力は、多様な専門分野を持つ先生方の指導のもと研究を進められることです。宗教、政治、思想等、様々な切り口から助言をいただくことで自分の研究を多角的・客観的にとらえながら、方向性を定めていくことができます。またコースを横断して履修可能な授業では、専門分野と異なる学問の視点を学ぶことが刺激にもなり、時に自分の研究と結びつき新たな可能性の発見につながることもあります。

多様な研究テーマをもつ学生が集まることも本研究科の大きな魅力です。授業や学生研究室での研究領域を超えた意見交換はいつも楽しく、新しい関心事を見つける機会が身の周りにあふれていました。本学での研究と学生生活を通じ自分の視野を広げられたことは、修了後の今でも自信になっています。



上野 陽平さん

(2012 年度博士前期課程修了)
滋賀大学経済学部卒業。神戸大学国際文化学研究所博士前期課程修了。
研究テーマは「アメリカのイタリア移民」。
現在、エクスコムグローバル株式会社勤務。

私は大学時代に経済学部にも所属していましたが、その当時からアメリカの文化や歴史に興味がありアメリカがどのようにして現在のような大国になったか深く学びたい思い、神戸大学国際文化学研究所ヨーロッパ・アメリカ文化論コースに入学しました。当コースのキャリア・アップ型プログラムにおいて、自身の研究テーマに関することから就職後も役に立つスキルまで授業で教えていただき、修士号を取得後現在は企業に就職しています。大学院ならではの少人数制による議論や発表中心の授業や先生方によるフィードバックは卒業後も必要な力をつけさせてくれました。また私は大学の交換留学制度も利用しており、研究対象としていたアメリカで歴史の授業を受けながら移民研究もすることができました。留学しながら研究をするのはとても大変でしたが、このような経験をさせていただいて本当に感謝しております。短い時間の中でも神戸大学国際文化学研究所ヨーロッパ・アメリカ文化論コースでは充実した 2 年を過ごすことができました。

Q&A

社会人ですが、仕事をしながらの入学は可能でしょうか？

規定年限で修了を目指す場合、博士前期課程では少なくとも 1 年次においては週に 1～2 回以上の登校が必要ですが、「長期履修制度」を利用すれば最長 4 年まで修了年限を伸ばせますので、登校日と学期毎の履修単位をかなり少なくすることができます。また、博士後期課程の場合は、指導教員との相談により柔軟な受講が可能場合もあります。

外国語の知識はどの程度必要ですか？

英語の文献が読める程度の知識は必要です。どこかの地域に関することを専門的に研究する場合は、当該地域の言語(フランス語、ドイツ語、ロシア語、等々)の知識を持っている必要があります。前期(修士)課程の「キャリアアップ型プログラム」では、それほど高度な外国語力がなくても大丈夫でしょう。

専門の先生がいない地域や領域のことを研究テーマにすることはできますか？

教員は数が多く、また幅広い地域や領域をフォローしていますので、かなり柔軟に対応することができます。受験を考えている場合は、いずれかの教員と連絡を取って、具体的なテーマについて相談してください。

文化相関・異文化コミュニケーション系

文化人類学コース



本コースでは、多様なテーマと地域を研究対象にする文化人類学の専門スタッフが、充実した教育研究カリキュラムを提供しています。今日の文化の諸問題は、グローバル化に伴うさまざまな文化と価値観の対立、分裂、統合と融和、生成と消滅といったダイナミズムを特徴としています。本コースでは、地に足のついた研究調査（フィールドワーク）から世界を見渡す広くしなやかな視点をもつことで、深い異文化理解をもとに多様な文化が対話可能となるような方法をともに考えていきます。文化をめぐる複雑な問題に積極的にとりくみ、国際的に活躍する専門家、研究者をめざす学生、文化人類学の高度な研究を志す留学生も歓迎します。

就職実績（前期課程）奈良県立大学（専任講師）、京都産業大学（助教）、多摩美術大学（助手）、広東貿易職業技術学校（講師）、中日新聞社、イオン、旭化成、東京三菱銀行、モバゲー、活水女子大学、韓国法務省、バンダイ、大阪府高校教員、青年海外協力隊（コスタリカ派遣）、アビームコンサルティング、東京国際貿易、三菱総研DCS、関西福祉科学大学、神戸松蔭女子学院大学（非常勤講師）、（株）富士ソフト
（後期課程）神戸大学（准教授）、大阪観光大学（教授）、島根大学（准教授）、武蔵大学（准教授）、東京医科大学（専任講師）、外務省（専門調査員）、立命館大学衣笠総合研究機構（専門研究員）、帝塚山大学（非常勤講師）、浙江大学（専任講師）、大妻女子大学（専任講師）、滋賀大学（特任准教授）

在籍学生数（前期課程）19名
（後期課程）5名

論文テーマ例（前期課程）
カーゴカルト、少数民族言語の標準語化、観光、ポスト・ソヴィエト時代、ポストコロニアル、マルティカルチュラル・オリエンタリズム、中国の女性の地位、悪石島のボゼ、ローカル・ハワイアン、プリミティブ・アート、在日ベール人、映像人類学、クラ交易、バングラデシュのフェアトレード、国民文化と教育、在日コリアン、国際結婚、在日ベトナム人、奄美出身者同郷団体、文化遺産、伝統の創造、多文化共生、朝鮮族、映像、アイデンティティ・ポリティクス、ポピュラー音楽の表象、ジャマイカのペンテコステ教会、在米カリビアン、カーニバル、在米コリアン・アイデンティティ、ラスタファリ運動、ジャマイカのエチオピア正統教会、キリスト教と文化の文脈化、日系アルゼンチン人、ドミニカ共和国野球移民、スポーツ移民とトランスナショナリティ、在米華人、エスニック・コミュニティとメディア、マルティレイシャル、在日ブラジル人、移民の子弟教育、メキシコ女性と住民参加型開発、カナダ先住民、ディアスポラ・アイデンティティ、日系ハワイ人、帰米二世、ヒスパニック、カリフォルニア州バイリンガリズム、限界集落
（後期課程）
文化の真正性、ヴァヌアツ・アネイチウム、歴史人類学、難民、カレンニー、ホームステイ、在日ベトナム人、ケアと家族、朝鮮族村落変容、朝鮮族移民の女性化、華僑・華人、ベトナム観光、オーストラリア・アボリジニ、「問題飲酒」、先住民と非先住民、カリブ海地域、ジェンダー、男性性、ダンスホール文化、ダンスホール・ゴスペル、ポピュラー音楽、カリブソ、ソカ、ナショナル・アイデンティティ、人種と民族ポリティクス、混血の表象、当事者性、「オモニ」—韓国社会における「母性」とケア、マイノリティ

所属教員の紹介

梅屋 潔 教授 民族学特殊講義ほか

社会人類学、東アフリカ民族誌、妖術・邪術研究、日本の民俗宗教、開発の人類学などの分野を主として研究しています。

岡田 浩樹 教授 民族誌論特殊講義ほか

朝鮮半島、日本を中心とした東アジア諸社会およびベトナム、植民地主義および近代化過程における家族、宗教の再編成、マイノリティと多文化主義、宇宙人類学などの分野を主として研究しています。

齋藤 剛 准教授 文化人類学特殊講義ほか

社会人類学、中東民族誌学、人類学的イスラーム研究、モロッコ、グローバル化と宗教・民族などの分野を主として研究しています。

柴田 佳子 教授 現代人類学特殊講義ほか

文化人類学、カリブ海地域研究、ディアスポラ、クレオール、人種・民族、グローカル化、教育などの分野を主として研究しています。

新任教員（2016年10月着任予定）

所属学生からのメッセージ



御宮司 健太さん

(博士前期課程 2 年 研究者養成型プログラム)
奈良県立大学地域創造学部卒
研究テーマは「北インドにおけるイスラームの宗教行事・ムハラム」

私が研究しているのはイスラーム暦 1 月に毎年開催されるムハラムという宗教儀礼です。この儀礼の主な担い手はシーア派ムスリムですが、インドにおいてはスンニ派ムスリムやヒンドゥー教徒など様々な人々が関与し、その土地の共同的な祭りといった性格をもっていました。しかし植民地支配やイスラーム復興の影響を受けて、この儀礼は公的空間において宗派や宗教の差異が明るみになる場、あるいは差異を明らかにする場に変化しました。またこの儀礼は刃物での自傷行為をとまうために、近代という時代のなかで迷信的なものとして、あるいは宗教的に非合法なものとして批判を受けています。儀礼はまさに苦境に立たされていると言えます。それに関わらず実際に生きる人々にとっては、自分という存在を確認する強力な装置として儀礼は現在もなお重要な意味を担っています。

本コースに入学するまで私は文化人類学を一般教養の科目として受講しただけで専門的に学んではいませんでした。しかし本コースには、様々な分野と地域を専門にする先生方が在籍しており、フィールドワーク論や民族誌論といった方法論の講義もあるので、文化人類学を幅広く学ぶことができます。また専門的な論文指導に関しても指導教員以外の意見を受けることもでき自分の論文を見つめ直す良い機会になるでしょう。留学生が多いこともひとつの特徴で、院生室のなかで受けるカルチャー・ショックもあるかもしれませんが、様々なバックグラウンドの仲間から自分の研究を批判してもらうことは得難い経験になると思います。文化人類学を学び、研究する環境がここにはあります。



鈴木 亜望さん

(博士後期課程 3 年)
神戸大学国際文化学部卒業。研究テーマは「バングラデシュにおけるフェアトレードの文化人類学的研究」。

私のフィールドは南アジアに位置するバングラデシュです。ここでは国内外の NGO が数多く活動しています。その NGO のもとで手工芸品を生産している女性たちが私の調査対象です。女性たちがスカーフにビーズの装飾を手作業でしています。女性たちは時には話をしながら作業を進めています。この工場で染色、縫製、装飾、プレス、プリントが施されたシルクのスカーフはある NGO を通じて海外に送られ、フェアトレード商品として販売されます。フェアトレードの生産者たちの生活はどのようなものか、「名前は?」、「どこから来た?」、「兄弟姉妹は何人?」、「結婚しているのか?」このような質問から始まり、仕事を覚えてもらいながら話をします。また、知り合いになるとベンガル人はよく家に招待してくれます。甘い紅茶とビスケットを出してくれ、食事の時間と重なれば山盛りのご飯とカレーを食べさせてくれ、しまいに泊まっていきたいと言ってくれます。彼らにとっては本当に普通の生活を私自身も体験し、新たな発想を得ることの繰り返しです。そして、快く仕事場や家をのぞき見させてくれるフィールドの人たちに、何かしら還元できるような成果を残したいという研究意欲へとつながります。

学内では読書会や研究会(神戸人類学研究会)を開催し、互いに刺激を与えあい、またサポートしあって研究に励んでいます。加えて本コースが刊行する査読つき学術誌『神戸文化人類学研究』への論文投稿や編集も行っています。これを通して、お互いの研究の進捗状況をオープンにしてコメントやアドバイスを積極的に交換し、共に研鑽を積み重ねることができる環境づくりに努めています。

修了学生からのメッセージ



姜 小友莉さん

(2014 年博士前期課程修了)
大阪学院大学国際・英語学部卒業
研究テーマは「自己主張としての国籍—in 日コリアンを事例として」。
現在、NPO 法人「[WING 路をはこぶ] 職員」

私は、在日コリアンを研究対象として「在日コリアンが国籍を現在どのように認識しているか」、「過去の在日コリアン社会における国籍の認識とそれはどのように変化したか」ということを研究していました。1 年目は必修科目の授業を受講しながら、指導教員のゼミで自分の研究テーマの発表を継続的に行っていました。そこでは毎回指摘を頂き、その指摘をもとに「なぜ」、「どのように」などと自問することによって自分のテーマが少しずつ形になっていきました。授業は少人数制で行われるため、先生や学生とも距離が近く、深い議論をすることができます。文化人類学コースの特徴として、先生方がそれぞれ別のフィールドに特化しており、アジアを中心とする世界各国から多様な背景をもった学生が集まっていることがあげられます。これまで自分がもたなかった視点からアドバイスを受ける事ができ、自分の研究テーマに関連することだけに限らず、幅広い知識を得ることができます。2 年目以降は修士論文の執筆にみっちり時間を使いました。一つのテーマを多角的な視点からじっくりと考察した経験は、私の人生において大きな強みになったと感じています。

澤野 美智子さん

(2013 年度博士後期課程修了)
神戸大学文学部人文学科卒、韓国ソウル大学校社会科学大学院人類学科修士課程修了。
博士論文タイトル:「(オモエ)を通して見る韓国の家族—乳がん患者の事例から」。
現在、神戸大学大学院国際文化学研究所国際文化学推進センター協力研究員、国立民族学博物館外来研究員、韓国ソウル大学校比較文化研究所研究員、神戸大学ほか非常勤講師。

私の研究テーマは、韓国の家族です。特に、乳がん患者さんたちが病気に対処するなかで家族とどのような相互行為を行っているのか、ということに注目して博士論文を書きました。現在はさらに、代替療法的な食餌療法、ケア、ジェンダーなどの問題へと広げて研究を進めています。

博士課程では、研究者としての心構えから論理的な文章の書き方、博士論文のアドバイスにとどまらず、将来就職したとき学生を教えるためのスキルに至るまで、長期的な展望を見据えたご指導をいただきました。指導教員以外の先生方に教えるを請いに行くことも積極的に奨励される雰囲気ですので、ひとつの問題に対して様々な角度からご意見をいただくことができ、考えを深めることができました。

また、院生たちで行う研究会や読書会も、研究情報を交換したり学問的知見を深めたりするにとどまらず、研究上の悩みを共有したり互いにアドバイスをしあったりするうえでも非常に有意義でした。志願者の皆さんも、このような恵まれた環境を活かし、充実した大学院生活を送ってください。

Q&A

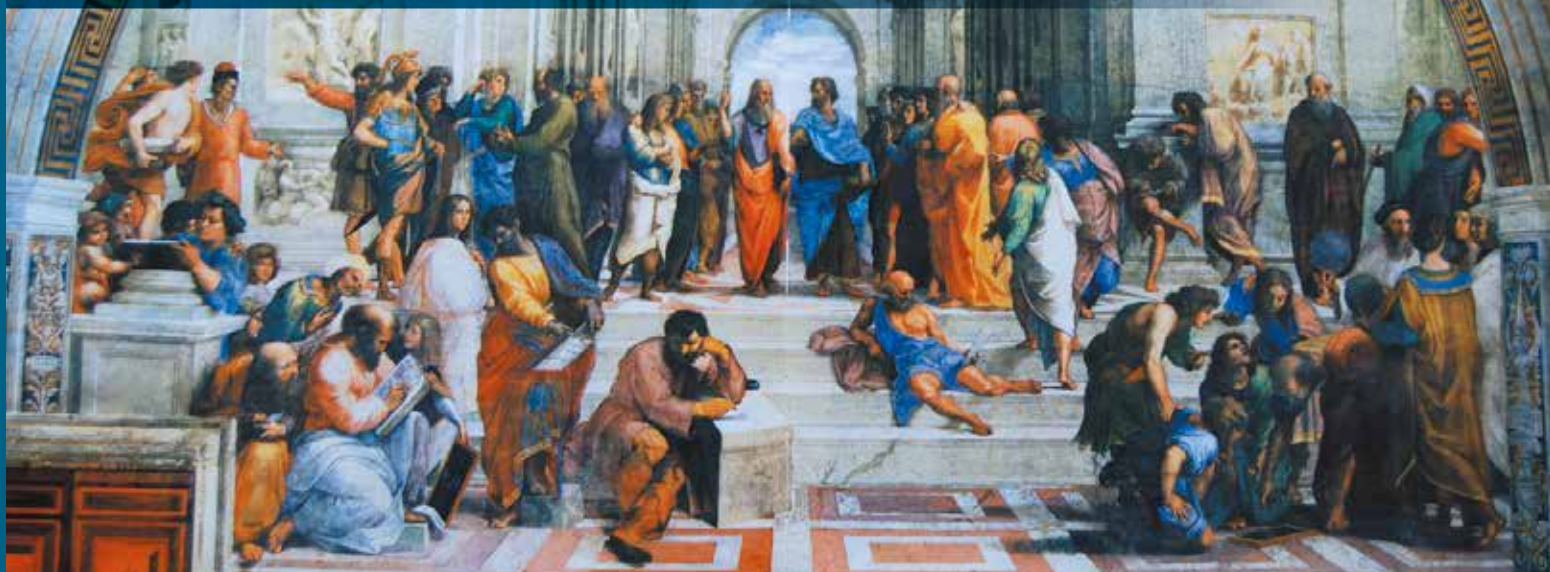
学部では文化人類学を専攻していませんが、大丈夫でしょうか。

必ずしも学部で文化人類学の専門コースにいる必要はありません。ただし、文化人類学についての基本的知識を身につけておくとい良いでしょう。最近は手頃な入門書、概説書がふえていますので、まずはそれらを参考にし、所属する大学の文化人類学関係の講義・演習を受講することをお勧めします。大切なことは、明確なテーマを持ち、これを文化人類学の視点から考える姿勢です。

指導教員以外に研究上あるいは論文の指導を受けたり、論文テーマが変わって指導教員の変更をすることはできますか?

教員全員の共同指導体制をとっており、指導教員以外からも指導を受けることができます。また、研究テーマを変更する必要が生じた場合には、所定の手続きを経て指導教員をコース内で変更することも可能です。

比較文明・比較文化論コース



本コースでは文明・文化が地理や言語などの様々な境界を越える諸相について、主に科学技術文明と言語文化を考察の対象として、その発信・受信行為がもたらす変容のダイナミズムを歴史的に比較研究します。とりわけ、グローバリゼーションが進展する中で明らかになっている、文明・文化における優位と劣位という非対称性を念頭に、一方的な受容とされる現象の背後に抵抗、偏見、創造などの側面があることに注目し、その交流や変容における双方向性について、最新の研究を題材に理解を深めることを目指しています。

進路実績 長崎市職員(学芸員)、三菱東京UFJ銀行、パナソニック電工、ニシキ商会、ニトリ、GMOクラウド、兵庫県立大学客員教授他。

在籍学生数 (前期課程) 3名
(後期課程) 0名

論文テーマ例 魯迅「故郷」と日本の国語教科書、日本における『聊斎志異』の翻訳と翻案—「竹青」を中心に、村上文学の越境—短編小説の日中対訳をめぐって、ラフカディオ・ハーン『骨董』と『北斎漫画』—挿絵という、もうひとつの文化表象を読む、生野銀山お雇い外国人ジャン・フランソワ・コワニエと日仏交流、西川如見の文献に見る宇宙観・自然観、そのほか、明治期来日外国人、古典テキストとイメージ、神話からみる庭園・自然観、環境問題、科学史、科学社会論に関するものなど。

所属教員の紹介

北村 結花 准教授 伝統文化翻訳論特殊講義ほか

近代における日本古典文学の受容について『源氏物語』を中心に研究しています。古文をはじめ、さまざまな文献を丁寧に読むことを基本にしたいと思っています。

塚原 東吾 教授 科学技術社会論特殊講義ほか

科学史および科学技術社会論を研究しています。

遠田 勝 教授 日米文化交流論特殊講義ほか

明治時代の日米文化交流を中心とした、比較文学・比較文化の研究を専門にしています。ラフカディオ・ハーン、お雇い外国人、夏目漱石、井伏鱒二などについて論文を書いています。

山澤 孝至 准教授 古代越境文化論特殊講義ほか

古代ギリシア・ローマ文化論。ただし、考古学ではないので、遺跡を発掘してそれが大々的に報道されるといったことはありません。地味な文献学ですが、古代人の書き残したもののから、まだまだ多くのことが読み取れると思っています。

所属学生からのメッセージ



小村 志保美さん

(博士前期課程 2 年・キャリアアップコース)
研究テーマは「英語圏における英訳俳句の受容」

私は俳句の英訳について研究を深めたいと考え、本コースへの入学を決めました。日本語で詠まれた俳句が英訳され、それらがどの様に解釈・受容されているのかについて研究しています。17 音に凝縮された日本独特の文化や季節感を忠実に再現して英訳するのか、そもそも再現されるべきなのかなど興味はつきませんが、本コースの様々な講義を通して、翻訳そのものだけを見るのではなく、その時代背景やそれぞれの文化の伝播過程を知ることの重要性に気づきました。また、オリジナルな資料を読み解くことや一つの疑問を深く掘り下げて考察することなど、研究に必要な力をつけることも指導していただきました。

このように、本コースの魅力は分野の境界を越えて学べるようカリキュラムが組まれていることです。翻訳の研究において文学的側面からだけでなく、科学文明や古代歴史などの側面からもアプローチすることができます。一見関わりがないように思われるこれらの分野が、「翻訳」というテーマを通して点が線となってつながることにより、私の研究に多角的な視点と深みを与えてくれています。

そして、昨年度より日本語教員養成サブコースが設置されたことにより、自分のテーマを研究しながら日本語教師への道が開けたことも魅力の一つになっています。



張 悦さん

(博士前期課程 2 年・キャリアアップコース)
研究テーマは「武者小路実篤の新しい村が近現代中国のユートピア思想に与えた影響」

私は、異国情緒が溢れる神戸の町に来てからもうすぐ三年目になります。神戸大学大学院国際文化学研究所を志望したのは、静かな自然に囲まれ、便利な図書館システムを有することだけでなく、留学生も多国から集まっており、異文化への理解を深めようと考えている人には、最適の環境だと思ったからです。

特に、本コースでは、日米文化交流や古典文学翻訳からギリシャ文明まで、幅広い視点で文明・文化の変容現象を研究できる点が、大変魅力だと思います。私の研究テーマは明治末期に来日し、近現代日本文化・文学と深く関わっている中国人作家周作人と「新しい村」という理想的共同体の実現を目指した白樺派代表者である武者小路実篤との個人交際から、日中ユートピア活動の関係と比較です。

おかげさまで、私は今年度の 4 月からロータリー米山記念奨学会の奨学生になりました。今はよりよい研究環境の中で、研究成果を上げるために日々努力を重ねて、励んで行きたいと思っています。もし、あなたも、異文化理解を深めたい、文明・文化の越境やその中の具体的な人物と作品についての比較研究をしたいとしたら、私たちと一緒に異文化交流のタイムトラベルしませんか。

修了学生からのメッセージ



北村 沙緒里さん

(2012 年度博士前期課程修了)
広島市立大学国際学部卒業。神戸大学国際文化学研究所博士前期課程修了。
研究テーマは「小泉八雲を中心とした明治期の来日外国人の比較文学研究」。
現在、長崎市職員（学芸員）。

私が大学院への進学を志望したきっかけは、学部時代の研究テーマをもっとしっかりと勉強したいという単純な理由からでした。私は本コースで、明治期の来日外国人の著作に見られる「日本」像についての比較研究がテーマでした。修了研究レポートでは、小泉八雲の文学作品を扱い、テキストと挿絵の表象について論じました。私の場合、入試当初の研究計画の内容は博士前期課程の二年間で大きく変わりました。しかし、それも限られた研究期間の中で、恵まれた指導体制と充実した資料環境（図書館など）によって得られた結果だと思います。本コースの特徴は、大きく科学技術文明と言語文化の二つの研究分野に分かれます。異なる分野の境界を越えて、学生生活の中で仲間と研究について語り合えるのは自身の研究への刺激になります。また、コースにとられない横断可能な履修システムによって、芸術、思想、文学など、あらゆる視点から自身の研究を深めていくことが可能です。入学時の研究計画を進めていくことも本分ですが、授業を通して得られる研究の新たな視点、見直し、深化は、自分次第でいくらでも研究に反映できると思います。充実した研究生活を支える環境が整っています。



白井 智子さん

(2014 年度博士後期課程修了)
クレルモン＝フェラン第 2 大学人文社会学研究所修士課程修了。
研究テーマは「生野銀山に雇われた外国人ジャン・フランソワ・コワニエと日仏交流」。
現在、神戸大学大学院国際文化学研究所科学術研究員、兵庫県立大学客員教授。

私は、本大学院入学以前、フランス語教育と日本語教育に携わる傍ら、兵庫とフランスとの交流史を色々な時代・人物に焦点を当てて調査・研究をしていました。しかし、これらの研究は題材が多様で一貫性を欠いていたため、ご専門の先生方からご指導いただきながら、これまでの調査結果を練り直し、さらに研究を深めて博士論文として一つに纏め上げたいと考え、大学院入学を決めました。

本コースを選んだ理由は、私が探求していた文化交流や比較文化、科学技術史が専門の先生方がいらしたことに加え、様々な国や時代における文明や文化、歴史に精通された先生方が結集して、多方面から研究指導に当たっていただいたからでした。また、国際文化学研究所は、所属コースに関係なく、他コースの授業も履修可能なため、より一層学際的研究ができ、その上、本大学は複数のフランスの大学と協定を結んでおり、院生でも留学できる機会を得られることも私にとって大きな魅力でした。

在籍中、指導教授を始め、日仏両国で諸先生方からきめ細かなご指導を頂戴し、様々な観点から多角的に研究を進め、大きな成果を挙げることができました。恵まれた環境の中で充実した研究生活を送ることができ、私にとって掛替えのない素晴らしい 3 年間でした。

Q&A

理系じゃなくても大丈夫？

複雑多様な社会を理解する上で、科学的な物事の見方を身につけることはとても有意義だと思うのですが、大学時代は文系でした。本コースでの研究には理系の学問的基礎が必要なののでしょうか？

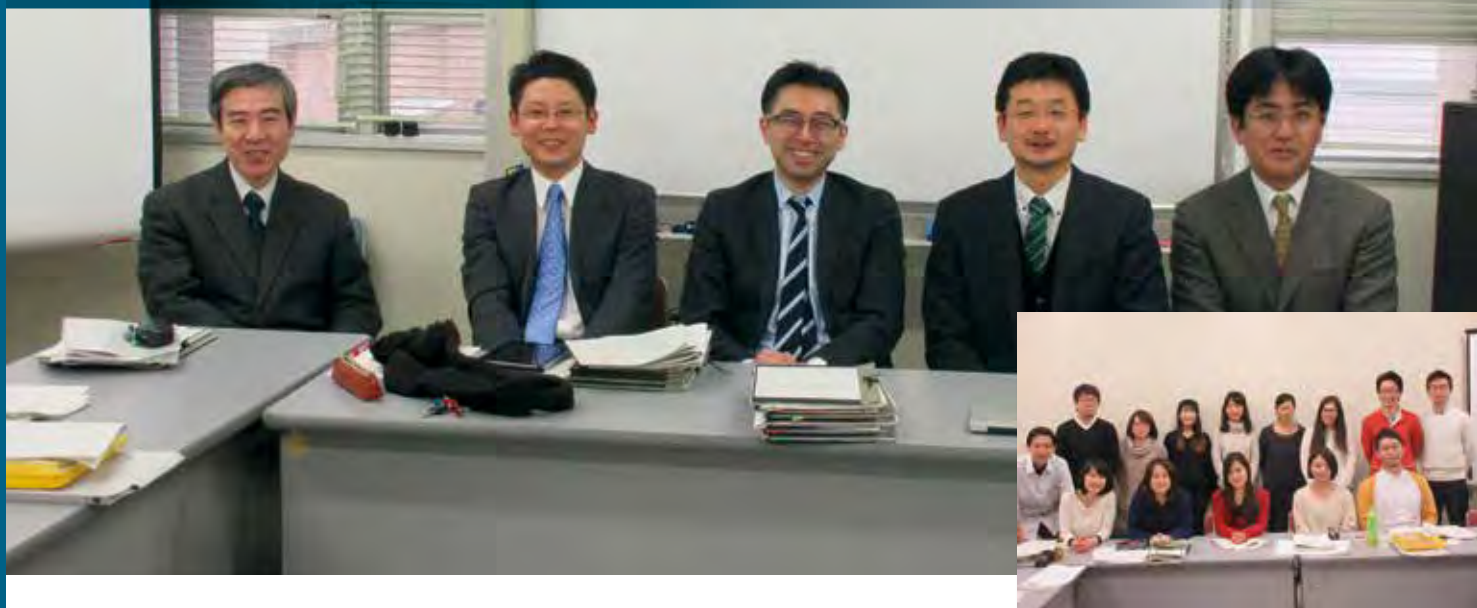
私たちのコースでは、科学史や科学技術社会論も勉強できますが、これは科学的・社会的意義や科学の歴史、東西の科学思想の交流等を研究する科目で、必ずしも、高度な自然科学についての知識や、理系の専門性を要求するものではありません。文系の方でもまったく大丈夫です。

西洋古典と日本の古典を同時に研究？

これからの国際社会では世界各地の文明や文化の比較や相互影響についての知識は不可欠だと思うのですが、これほど幅広い国内外の古典や複数の文化などを並行して研究できるか不安です。

私たちのコースでは古典のみならず近・現代の文化や文学の研究もおこなえます。重要なのは、むしろ複数の文化や文明を比較するという研究姿勢で、研究テーマが定まれば、それを掘り下げたり、広げたりするための豊富なリソースが用意されています。すべての分野と科目への関心・学習が均等に要求されるわけではなく、みなさんが研究テーマを選択したとき、そうした幅広い視野から多様なアドバイスと柔軟なサポートを受けられるのだと考えてください。

国際関係・比較政治論コース



本コースでは、社会科学をベースに世界各地域の政治現象を捉えることを目指しています。たとえば、国際社会の変容を踏まえながら、国内の政治と社会の関係が変化する様態を浮き彫りにする高度な研究が、院生によって進められています。また、従来の政治学や国際関係論では十分に取上げられてこなかった分野横断的なテーマについて、積極的に現地調査を行いながら取り組む院生もいます。5名の教員は、国際政治学の主要なアプローチを全てカバーするバランス良い構成となっており、院生による新しい研究意欲に対応していく体制となっています。

特筆したい点として、論文作成の基本に関して新年度毎にオリエンテーションを行っています。また論文作成指導では、前期課程と後期課程の院生が全員、毎週出席するグループ演習を実施しています。この場の知的迫力は、ぜひ体験して頂きたいものです。教員と院生の全員が協力して徹底した検討を加え、オープンな場で鍛え合っています。この過程で、参加者には、向上心、自発性や集団での作法が身に付きます。また国際政治学の基礎から応用までを修得し、また社会に出て通用する思考力や討論力が体得されます。

本コースでは、院生がどんな研究テーマを選択しても、新しい多文化共生のあり方を大切に視線に身に付けて頂きたいと思っています。教育政策、移民問題、民主化、ナショナリズムの動態、安全保障問題、福祉制度などについて、政治と文化の関連に注目するアプローチを用いて研究が積み上げられてきたのも本コースの特徴です。また前期課程では歴史学を修めた方が、後期課程で政治学を身に付けたい、といった学際的な院生の志向に対応してきました。キャリアアップの方にも、研究者志望の方にも、きっと自分を向上させるきっかけを見つけてもらえるはずと信じています。

わたしたちと共に、新しい国際社会のあり方を見出そうではありませんか！

就職実績 (前期課程) 関西経済連合会、大阪府、神戸大学職員、京都大学職員、テス・エンジニアリング、JNC、アフラック、税理士法人トーマツ大阪事務所、タブチ、関西電力
(後期課程) アジア経済研究所、広島大学大学院国際協力研究科、日本経済研究所、安全保障貿易情報センター

在籍学生数 (前期課程) 12名
(後期課程) 5名

論文テーマ例 The Futenma Relocation Problem in the U.S.-Japan Military Alliance、米国連邦議会下院議員の投票行動の分析、ボローニャプロセスの理論研究に関する考察:総合的再検証の試み、「万人のための教育」に向けて:バングラデシュNGO、「BRAC」による学校外教育プログラム、スウェーデンにおける移民政策の変容と移民の周辺化? 1990年代以降のワークフェア強化による集住化と格差拡大、トルコのクルド問題における国際的要因

所属教員の紹介

坂井 一成 教授 国際政治社会論特殊講義ほか

ヨーロッパ統合の進展と課題、民族問題と紛争予防、現代フランス政治・外交などの分野を主として研究しています。

阪野 智一 教授 比較政治社会論特殊講義ほか

ヨーロッパ統合と国内政治経済、福祉国家の再編過程、現代イギリス政治、政党政治研究などの分野を主として研究しています。

中村 覚 准教授 比較地域社会論特殊講義ほか

国際政治学の諸理論を見直し、第三世界諸国における紛争予防、多文化主義、テロ対策等に適するアプローチやモデルを探索しています。中東・ムスリム地域の安全保障、国際関係、国家形成を研究しています。

安岡 正晴 准教授 比較地域政治論特殊講義ほか

比較公共政策、現代アメリカ政治（特に連邦制と都市問題）などの分野を主として研究しています。

近藤 正基 准教授 多文化政治社会論特殊講義ほか

比較福祉国家、比較政治、現代ドイツ政治などの分野を主として研究しています。

所属学生からのメッセージ



岩崎 千玲さん

(博士前期課程 1 年)

神戸大学国際文化学部卒業

研究テーマは「現代日本におけるジェンダー・家族政策」

私が学部生だった頃は、とても幅広いことに興味があり、気の向くままに勉強していました。ひとつのことに究めようという決心したのが3年生も終わりに近いころでした。スタートも遅く、もちろん焦りもありましたが、「これから自分は学問をするのだ」とわくわくする気持ちでいっぱいでした。

私の研究テーマは、ジェンダーや家族に関する政策が、現代日本ではどのように発展してきたのかについてです。この研究は、比較政治学が主な領域ではありますが、ジェンダー論や家族社会学についての知識も必要で、領域横断的な内容です。また、この研究をより深めるためには、日本以外の事例を確認する必要があります。この国際文化学研究科では、多彩な学問領域の授業も受講できるうえに、さまざまな国や地域に関する研究も盛んであるため、とても素晴らしい環境で研究に取り組むことができます。

授業に限らず、それ以外の時間もまた充実しています。この研究科に集まってくる大学院生は意欲的で、いろいろなバックグラウンドをもった人びとです。院生室では、自分の研究の合間にさまざまなテーマについて議論したり、読んだ論文について教えあったりしています。自分の研究が思うようにすすまず、苦しいこともあります。仲間たちの存在が励みになって、もっとがんばることができます。

この研究科に素敵な仲間が増えることをみんなで楽しみにしています。



原田 豪さん

(博士後期課程 2 年)

大阪大学文学部西洋史学科卒業、グローニンゲン大学・デウスト大学ユーロカルチャー MA プログラム修了

研究テーマ：「欧州統合における欧州社会政策の発展過程」

自分の研究テーマは、欧州統合がどのような制度によって推進されたか、その制度的制約が欧州レベルでの社会政策発展にどのような影響を与えたかです。本来は、南米での地域統合が出发点でしたが、地域統合を共通点にヨーロッパでの留学を経て、欧州連合の研究へとシフトしました。

学部での西洋史、欧州での留学という経験からすると、問題になりやすいのはアクセスできる文献だと思います。この点について、神戸大学は社会科学系の蓄積が多く、大学内の蔵書がこの大学を選ぶ利点の一つになります。また、国際関係論という一つの分野のみならず、社会科学全般を考慮した学際的研究を行う際にも、蔵書の豊富さが非常に助けとなります。

この学際的という面は、国際関係・比較政治論コースの強みでもあります。毎週行われる集団演習では、指導教員だけではなく、他の先生や学生全員からの指摘を受けることができます。単一の視点だけではなく、様々な視野での考察を唆されることで自身の問題認識という根本的な点の見直しから、論じ方という構成方法についての上述まで、様々な成果を得ることが可能です。また、他の学生の報告・質疑応答を通じて、多種多様な見識に触れる機会が得られます。研究の発展性という点において非常に有益な環境が提供されています。

大学全体が国際交流に熱心であるという点も、研究に様々な機会を与えてくれます。外国から招聘された先生の授業などで、現地での問題認識を確認したりできますし、学外機関との連携から外国人学生との意見交換や、外国での発表の機会を得ることが可能です。

研究を発展させるための「機会」を様々な形で提供しているというのが、このコースが研究者を目指す方々にとって一番魅力的な点であると思います。また、年度ごとに研究成果の報告を求められる点から、機会の提供だけでなく活用も要求されるという点でも、研究に適した環境だと思います。

修了学生からのメッセージ



Gabriella Buonpane さん

(2015 年度博士前期課程修了)

ナポリ東洋大学卒業、ナポリ東洋大学大学とのダブルディグリー学生

As a double degree student, I studied about the U.S. - Japan security relations at Kobe University for one year. In particular, my research theme is about the Futenma relocation problem and how it affects the bilateral military alliance.

In the International Relations and Comparative Politics course, I had the chance to attend many interesting and stimulating classes which helped me deepen my understanding towards foreign affairs. The professors in this course are all highly skilled and passionate. They help the students gain a global vision of the topics discussed in class and in their researches.

An interesting characteristic of this course is the possibility to attend the collective Guidance Seminar every week whereby students can receive feedback on their research works from both colleagues and professors. This was very helpful to me. This seminar is useful to understand the strong and weak points of one's research and allows students to practice oral presentations and question and answer system.

In addition, for Masters and Doctoral students, they have the opportunity to study in a Research Room filled with a private desk, printers, copy machines and many other facilities that are useful to every student and researcher.

All these elements made studying in this course an amazing experience.



石黒 大岳さん

(2010 年度博士後期課程修了)

九州大学文学部卒業。九州大学人文科学部修士課程修了。神戸大学国際文化学研究科博士後期課程修了。

神戸大学・大阪国際大学非常勤講師、九州大学人文科学研究院助教を経て、現在、日本貿易振興機構アジア経済研究所地域研究センター研究員。

私は、クウェートでの留学をきっかけに中東湾岸諸国における民主化や議会政治の展開に関する研究を志し、学位取得のため、湾岸諸国を専門とする数少ない研究者の一人である中村覚先生に指導教員となって頂くべく神戸大学国際文化学研究科に入学しました。それ以前は歴史学を専攻していましたが、本研究科で政治学の方法論や論じ方を身に付けていきました。

学位論文を完成させる作業は指導教員との一対一でのやりとりが中心になりますが、毎週実施される集団指導演習で鍛えられた効用は大きかったと思います。集団演習での報告は、内容についての批評をもとに議論を深め、博士論文の完成に向けて着実に歩を進めるだけでなく、学会報告等に向けた実践的な訓練になりました。他の学生の報告からも得るものが多く、演習後の院生室で意見交換しながら学んだことは、分野を超えた耳学問の強みで、国際政治学の授業を担当した時や他分野の研究者との共同研究を進める際に随分と役立っています。

3年間で博士論文を完成させるのは相当ハードな作業ですが、そのための制度や指導体制は整えられているので、研究に打ち込み甲斐のあるコースだと思います。

Q&A

学部では政治学や国際関係論を専攻していたわけではないのですが、大丈夫でしょうか。

必ずしも学部で専攻している必要はありませんが、研究をより実りあるものとするために、入学までに予め基本的知識を身につけておくのと良いでしょう。そこで入学試験に合格した方には、政治学の基本に関する「入学前リーディングリスト」を案内し

ています。またコース教員の坂井教授、安岡准教授は各々のホームページで、事前にどのような勉強しておくのが望ましいか、入学志望者向けガイダンスのページを設けて参考文献などを挙げて紹介していますので、まずはそれらを参考にしてみてください。

モダニティ論コース



国民国家という政治原理であれ市場という経済原理であれ、あるいは小説という文学形式であれ遠近法という絵画技法であれ、西欧近代に由来するこれらの社会的・文化的な装置は、現代世界の基本的な枠組みをかたちづくってきました。ところが現在、この西欧近代の原理（モダニティ）は、グローバル化の進展とともに根底から揺らいでいます。こうしたなかで求められているのは、あらためて「モダニティ」の意味を問いなおし、激動する世界のゆくえを的確に読み解くことだといえるでしょう。本コースでは、近現代の社会思想・経済思想・政治思想・文化言説・表象文化を丁寧に分析することをつうじて、アクチュアルな課題に 대응する足腰の強い思考力を養成することをめざしています。

所属教員の紹介

石田 圭子 准教授 文化言説系譜論特殊講義ほか

美学・表象文化論。近代以降の芸術と政治の関わり、芸術における他者とのコミュニケーションなどをテーマにしています。

著書：『美学から政治へ モダニズムの詩人とファシズム』（慶応大学出版会）など。

市田 良彦 教授 近代経済思想系譜論特殊講義ほか

社会思想史。アルチュセール、フーコー、ドゥルーズなどのフランス現代思想を中心に、今日における政治・経済・文化の哲学的分節を考察しています。

著書：『アルチュセール ある連結の哲学』（平凡社）など。

上野 成利 教授 近代政治思想系譜論特殊講義ほか

政治思想・社会思想史。ホルクハイマー、アドルノらフランクフルト学派にかんする思想史研究を基軸としながら、「暴力」「自由」「公共性」等の鍵概念の社会哲学的な分析に取り組んでいます。

著書：『思考のフロンティア 暴力』（岩波書店）など。

就職実績（前期課程）西宮市役所、神戸大学（職員）、日本山村硝子、高知新聞社（記者）、共同通信社（記者）、イオン、がんこフードサービス、オーケー株式会社、金蘭中学校・高等学校（教員）、JNC、兵庫県高校教員（英語）、宝塚市役所 他
（後期課程）トルコ・チャナッカレオンセキズマルト大学日本語教育学専任講師

在籍学生数（前期課程）3名
（後期課程）5名

論文テーマ例（前期課程）ミシェル・フーコーとエルキュリーヌ・バルバン、ピーター・バーガーの「日常」概念と宗教、アルフレッド・シュッツにおける「レリヴァンス」概念、批判理論における＜女性的なもの/母性的なもの＞をめぐる、H・アーレントにおける赦しの概念について、理解社会学の展開—ウーバー・シュッツ・エスノメソドロジー、他
（後期課程）エルンスト・ユンガー、技術、ニクラス・ルーマン、社会システム論、ハーバート・スペンサー、日本社会の近代化、D.H. ロレンス、エコクリティシズム、他

鷹 茂 教授 近代社会思想系譜論特殊講義ほか

社会学説史・社会思想史。ジンメル、ウェーバー、テンニースなどの社会理論に関する思想史研究を基盤としながら、近代思想における社会、歴史、文化、生などの諸概念の錯綜の意味について分析しています。

著書：『ジンメルにおける人間の科学』（木鐸社）など。

松家 理恵 教授 表象文化系譜論特殊講義ほか

イギリス文学・思想。18世紀からロマン主義のイギリス文学・思想を中心に、近代の自然観や共感的想像力について現代における意味を考察しています。

著書：『キーツとアガローネーション・キーツの詩とギリシア・ローマ神話』（英宝社）など。

所属学生からのメッセージ



モダニティ論コース修士論文中間報告会での発表

竹内 勇輔さん

(博士前期課程 2 年生)
神戸大学国際文化学部卒。
研究テーマ：ルイ・アルチュセールの哲学観

外国の思想家の哲学観を学ぶということが、いったい何の役に立つのかと訝しがられるかもしれません。ところがこの「役に立つ」とはということかを真剣に考えることは必ずしも無駄なことではなく、この問題にこそ自分自身との関係において哲学を通じて学ぶべきことがあると思います。「役に立つ」という観点からいえば、自らの考えを根拠立てて説得的に展開することは大学の中でも外でも役に立つ能力であるといえるでしょう。そしてそのためには本を読むという作業が欠かせません。アルチュセールのこの「読むとはということか」を哲学的に考え抜いた人でした。モダニティ論コースは私にとって、「読む」ことの高度な実践の場となっています。

畠中 茉莉子さん

(博士後期課程 3 年生)
2012 年神戸大学国際文化学研究科博士前期課程修了。
研究テーマ：ニクラス・ルーマンの社会理論と宗教

私は、戦後ドイツを代表する社会学者ニクラス・ルーマンの社会理論について、とくに西欧社会の近代化を考える際に重要な宗教との関連を軸に研究を行っています。私だけに限らず、モダニティ論コースに属する学生は一つ分野に捉われることのない多彩な観点を持つことを必要とするテーマに従事することがしばしばありますが、このコースはまさにそれを可能とする環境を提供してくれます。それに加えて、このコースの大きな特徴は、厳密なテキスト読解を原則とした指導がなされるという点にもあります。こうした方針のもとで確かな基礎的技術を身に付けることは、将来研究者を目指す人にとってのみならず、社会に出た後にも通用する重要な能力といえます。



EU 文化研修プログラム、ルーヴァン・カトリック大学での発表（モダニティ論コース院生 3 名）

修了学生からのメッセージ

海野 梢萌さん

岡山大学文学部卒業、2009 年度国際文化学研究科博士前期課程修了、共同通信社記者を経て、シンガポールでメディア関連の会社に勤務。
研究テーマ：ミシェル・フーコーの闘争とは何か。

学部時代には思想史上の一つとしてしか学習できなかったミシェル・フーコーの思想を、専門としてより洗練・発展させたいと考え、本コースを志望しました。本コースの一番の魅力は自主性と独創性が尊重されることです。私の場合も例外ではなく、研究テーマ以外にも国際問題など様々な授業も受講し、学習計画を自分で設定することができました。ご指導いただいた先生方からは、知識のインプットという研究の初歩から、日々の発表や討論を通じて「他の誰でもなく、自身の考えを基に題目を論じる」という、アウトプットまでの道筋を示していただきました。また、この研究科の特色である様々なバックグラウンドを持った院生や研究生と議論を交わせたのは、大きな刺激となりました。

修了までの2年間は、私にとってかけがえのない時間であり、現在も大いに役立っています。ある事象を前にしたとき、場当たり的に反応するのではなく、独自の論点を探し当てる手法は訓練なしには身につけません。本コースを通じ、私はその手法の一つを得たように思います。特に、フーコーは文学にとどまらず、現代の人文社会科学内で最も多く引用される学者のうちの一人です。法曹関係者や人権活動家らは例外なく彼の名前を知っているため、専門が説明しやすく、より深い話ができるのも大きな魅力です。テキストと向かい合い議論する環境と、多様な専門家による知的刺激が、皆さんを迎えてくれることでしょう。



川本 健二さん

大阪芸術大学芸術学部写真学科卒業。2011 年度神戸大学総合人間科学研究科博士前期課程修了、神戸大学国際文化学研究科博士後期課程修了。
研究テーマ：写真を中心としたメディア文化。また、日本語教育でもメディアを活用した言語教育の在り方とそこでの「文化」の扱い方について研究している。現在、トルコ・チャナッカレオンセキズマルト大学日本語教育学科の助教授を務める傍ら、写真史についての調査や写真家活動も行っている。

モダニティ論講座は、社会学、思想、哲学、政治学、美学などの既存の学問領域にとらわれない講座です。私の場合は「写真」という切り口でしたが、この講座の大きな枠組みの中で自分のテーマに引き合えたおかげで、写真の芸術作品論に終始せず、写真イメージの「技術と生産」の研究として、また撮影者に注目した「主体」の研究として、独自の展開ができたと思っています。

もちろん、現在の就職事情を考えれば、大学院でこのような思想的テーマを選ぶことはリスクがあると言わざるをえません。しかしグローバル化が進む中で、この講座が行う「文化」「社会」などへの根本的な問いかけは、どのような分野であっても、ますます必要なものとなっていることは確かです。現在、トルコでの写真の調査や、他分野である言語教育やその研究プロジェクトなどにも参加していますが、ここでもモダニティ論が扱う議論がいかに重要なものであるかを実感しています。

社会的、思想的な課題に向き合いたい方はもちろんですが、特定の文化的現象を学際的に捉え直したい方にとっても、この講座での経験は実り多きものになると思います。

Q&A

研究テーマを絞り込むのではなく、広く「モダニティ」全般について学ぶことは可能でしょうか？

可能です。むしろ近現代の思想的諸問題について広く学べることが、モダニティ論コースの強みともいえます。とりわけ前期課程のキャリアアップ型プログラム履修生の場合には、社会思想・経済思想・政治思想から文化言説・表象文化にいたる科目群を広く履修しながら、幅広い分野について知見を深めることが望ましいでしょう。研究者養成型プログラム履修生の場合には、もちろん適切にテーマを絞り込まなければ修士論文を執筆することは不可能ですが、従来型の大学院では扱いにくい学際的な主題を正面から取り上げることができる点が本コースの最大の特長といえます。

フランス思想やドイツ思想を研究したいのですが、仏語や独語の知識はどれくらい必要でしょうか？

前期課程「研究者養成型」プログラム志望者でフランス思想やドイツ思想を研究対象とする人の場合には、仏語や独語の読解力がある程度そなえていることが望ましいといえます。独仏語で受験できればそれに越したことはありません。とはいえ入試そのものは英語で受験することが可能です。受験に臨んでまずは英語の読解力に磨きかけ、前期課程のあいだに仏語や独語の読解力を鍛えてゆけばよいでしょう。むしろ英米思想の研究志望者の場合には、独仏語の代わりに英語のテキスト読解にいっそう注力してください（なおキャリアアップ型プログラム履修生の場合には独仏語をかならずしも必要としないと考えてもらって差し支えありません）。

先端社会論コース



現代社会では、人間・自然・社会の相互関係が大きく揺らぎ、ますます複雑化してきています。「先端社会論」コースは、この現代社会の先端的な問題群を、人文・社会科学を交差する学際的アプローチによって、領域横断的に検討することを課題としています。例えば、男女の性差を社会的に構成されたものととらえるジェンダー論の視点から、家族や個人や国家をめぐる考え方の変化を分析すること。人間の生死をめぐる規範の揺らぎを理解すること。貧困、移住、人権侵害、体制転換などのグローバルな課題の公正な解決法を構想すること。メディア・テクノロジーの革新が促進する消費社会の情報化と多文化社会が要請する新たな社会観や人間観を模索すること。「先端社会論」コースは、こうした錯綜する諸問題を理論的に解きほぐし、それらに現実的に対処していくためのトレーニングの場です。

所属教員の紹介

青山 薫 教授 ジェンダー社会文化論特殊講義ほか

社会学、ジェンダーとセクシュアリティ。グローバル化、多文化主義、社会的排除と包摂、親密権、表象の問題などにも関心。移住、ケア/性労働、同性婚、性同一性「障害」など、公私にわたる変化を引き起こす事象について、理論・方法論・実証研究を結びつけて追求しています。

小笠原 博毅 教授 メディア社会文化論特殊講義ほか

社会学、カルチュラル・スタディーズ。とくにメディアとスポーツをフィールドとして多文化資本主義と人種差別の文化との関係を、実証的、理論的、かつ思想的に検証し考察しています。

山崎 康仕 教授 生命規範形成論特殊講義ほか

法と倫理・道徳との境界領域の問題を研究対象としています。とくに代理出産やヒト胚、脳死状態の取扱いをめぐる問題など生命倫理関係の問題において、倫理や道徳が法制度化されていく際に生じる諸問題を研究しています。

進路実績 (前期課程) 兵庫県庁、富士通BSC、(株)三菱倉庫、(株)コベルコシステムなど
(後期課程) 花園大学文学部創造表現学科准教授、京大グローバルCOE研究員など

在籍学生数 (前期課程) 9名
(後期課程) 2名

論文テーマ例 (前期課程)
● 日米印三国におけるインフォームド・コンセントの比較・検討
● The Politics of 'Koizumi Theatre': On the Reconstruction of Japanese Nation-State at the Neo-Liberal Moment
● 代理出産の「資格」
● 日本における外国人技能実習制度の現在—中国人技能実習生の調査を踏まえて
● Representation of Romanies in Tony Gatlif's films
● ニュー・クワイア・シネマが抱える消費と可視性のジレンマ
● Can "Street Dance" Speak(by Dancing)? A Study of the Policing of Street Dance Scenes in Taiwan
(後期課程)
● Occupation and Sexuality: GHQ's Policy-Making on Prostitution
● 関係性としてのフェミニズム—イメージ、個人、方法論の相互作用から
● 道徳的個人主義の展開と「心」の変化
● 「つくられる共同体」の社会学的研究

西澤 晃彦 教授 現代社会理論特殊講義ほか

社会学、都市社会学、社会問題論。社会的排除と貧困を主たるテーマとして、自己アイデンティティの構築・社会的世界の形成・都市空間の構成と社会的排除の関連について研究を行ってきました。

櫻井 徹 教授 現代法規範論特殊講義ほか

法哲学、「グローバル・ジャスティス」、つまり、移民・難民問題、経済格差、テロ、人権侵害といったグローバルな課題を前に、国境という境界線がいかなる意味をもつのかというテーマを研究していますが、最近では特に、移民や二重国籍が急増する中、国籍(シティズンシップ)をいかに再定式化するかという問題に取り組んでいます。

所属学生からのメッセージ

フィリップ・ヒューズさん

(博士前期課程 2 年)
イギリス・リバプールジョームアズ大学経営学部卒業。
研究テーマは、「Gayness and Identity」。

神戸大学国際文化学研究所に入学したきっかけは、現代における社会問題とその背景にある事情を学ぶことも、現在の日本と私の出身地であるイギリスなど他国との関係を歴史的にさかのぼって学ぶこともでき、広い学際的視野で研究ができると考えたからです。実際に、研究科には、研究に励むことができる環境が整っており、追求したいことが追求できる自由さがあります。自分自身の研究テーマは、世界でも日本企業でも課題となっている性的少数者 (LGBT) への社会の対応についてですが、とくに私が所属する先端社会論コースは、このような先進的課題を研究するのに最適のコースだと思います。

研究科全体が、多様性を尊重することを重要視しており、異なる国、文化、常識が常に身近にある環境となっています。その中で生活することは、自分自身にとって大変貴重な経験になります。また、大学院で研究を行う上で、毎週必ず何らかの演習や講義が行われ、指導教員のアドバイスを受けることができるようになっています。その中で研究することは、学問的人間的に成長し続けることであると感じています。

修了学生からのメッセージ

青木 晶子さん

(2013 年度博士前期課程修了)
北九州市立大学法学部卒業。神戸大学国際文化学研究所博士前期課程修了。
研究テーマは「ハーバーマスにおける討議倫理学から討議理論への展開」。
現在、(株) NTT ビジネスアソシエ西日本に勤務。

私は、学部時代に興味をもったテーマについてさらに深く学びたいと思い、大学院に進学しました。大学院では、一年目は授業に出席することで複数の分野について深く学び、また、研究に必要なスキルを身に付けました。二年目以降は、授業を通じて得た知識やスキルをもとに、自らの研究を進めていきました。私がこのような大学院生活から得たのは、次のような力と経験です。第一に、「自ら考える力」と「自らの考えを伝える力」です。大学院では、自分で問いを立て、それに対する自分なりの答えを導き出すことや、自分の考えを論理的に伝えることが求められます。私は在学中、その難しさを日々実感していました。第二に、「様々な価値観をもった人と出会うという経験」です。先端社会論コースでは、多様な経歴をもった先生方や学生とともに学ぶことができます。私はこの経験から、自分にとっての「当たり前」を疑う習慣が身についたと思います。

私は、大学院での学びを通じて自分の視野を広げてから就職したいと思い、キャリアアップ型プログラムを選択しました。同様の考えを持った学生は多くいましたが、皆、社会との関わりかたを真剣に考えながら就職活動をし、納得のいく場で働き始めています。このことから、前期課程修了後に就職を目指す方にとっても、この研究科は有益な環境であると思います。

Q&A

コース名の「先端社会論」という言葉はあまり聞いたことがなく、なじみがないのですが？

そうですね。「先端社会」とってどんな社会なの？と思われちゃうかもしれませんね。でも、「先端社会論」コースは、「先端社会を論じる」コースではなく、「先端的な社会問題を論じる」コース、っていう意味なんです。もう少し詳しくいうと、「現代社会の先端的な問題群に学際的に取り組む」コースです。

ああ。そうだったんですか。だけど、「先端的な問題群」とって、たとえばどんな問題ですか？

科学技術の進歩とか情報化、それにグローバル化とか、現代社会に特有な性格によって引き起こされている新しい問題群、っていうたらいいかしらね。たとえば代理母問題とか、地球の温暖化みたいな環境問題とか。身近なところでは、男女の性差の意味合いがゆれ動いていることとか。

そういう問題だったら、ずっと気になっていたことにカブってくるかなあ。でも、さきほど「学際的に取り組む」というお話でしたけれど、専門分野としてはどうなるのでしょうか？

専門分野という言い方をすると、今現在のコーススタッフは、社会学、カルチュラル・スタディーズ、ジェンダー論、法学、哲学、倫理学っていうことになるかしら。けれども、

横山 純さん

(博士後期課程 3 年)
神戸大学国際文化学研究所博士前期課程修了後、株式会社ユニクロに入社。株式会社ユニクロを退職し、神戸大学国際文化学研究所博士後期課程入学。
研究テーマは「1980 年代のロンドンのサウンドシステム、海賊ラジオ文化」。

大学院進学は、今の時代、周りから「よくやるよなあ」と思われるような事かもしれませんが。ほくもそう言われてきました。そう言われて、なぜ進学を選んだのかと振り返ると、それは「興味関心に忠実に、自分で進路を設定し、進める」事が出来るからだだと思います。この研究科には、多種多様なフィールドを専門にする、あなたと同じ様に、自分の興味関心に忠実に生きようとしている「わがままな」人たちがいます。ほくにとって何よりも、この研究科に所属する大きな励みになっています。ここで、何があろうと数年間は、わがままに興味関心に忠実に、がむしゃらに生きる。というのも、こんな時代だからこそアリだと思います。

田 恩伊 (チョン ウニ) さん

(2011 年度博士後期課程修了)
神戸大学大学院国際文化学研究所博士前期・後期課程修了後、京都大学 Global COE Program 研究員に就任。神戸大学国際文化学研究推進センター協力研究員、追手門学院大学社会学部非常勤講師。博士論文のタイトルは「『つづられる共同体』の社会学的研究——共同体運動の現代的意味と新たな展開」。現在の研究テーマは「現代の共同体をめぐる公共政策の新たな取り組みについて——日本と韓国の公共政策から」。

大学で研究者としての訓練を受けて「研究者たちの社会」に出てみると（入ってみるという表現が正しいのかもしれませんが）、自分の専門領域だけではなく、それと関連する様々な領域の知的訓練がどれだけ貴重で役に立つものかがよく分かってきます。というのは、緻密にミクロな世界を探りながらも全体としての社会を考えていきたいと願っている私自身の研究姿勢からすると、理論と実践両方からなる深い専門的知識はもちろん、社会的市民活動・交流への参加など、時には国籍を越境する実践的行動力を必要とする場合があるからです。

この先端社会論コースに設けられている社会学、哲学、法学、文化研究などの幅広い研究領域には、こうした研究活動に直結する高度な知的訓練装置が用意されています。もちろん、研究科のこうした装置を自分のものにできるかどうかは、あなた自身の努力と心構えによりますが！ この研究科は、多くの領域を融合させ現代社会をよりユニークな視点から探究したい人にとって、堅実な専門性を培ってくれる場だと思います。

「学際的に取り組む」とってということは、そうした従来の分野が単独では扱いきれない問題に取り組む、ってことです。あまり専門分野は気にしなくてもいいんじゃないかしらね。

それにしても、学部時代の専門とはだいぶズレているんですが、だいじょうぶでしようか？

この研究科には、そういう人のためにキャリアアップ型プログラムがありますし、入試問題に合格点が取れるだけの基礎学力があれば、あとは入学後の熱意と努力だと思いますよ。

すみません。私も質問していいですか。私はドクターまで進学したいという希望を持っているのですが、先端社会論コースの研究者養成型プログラムの入試はかなり難関なのでは？

ドクター進学を考えているのなら、前期課程の入試よりもむしろ後期課程の入試に注意してください。募集人数を見てもわかりますように、前期課程に入学しても後期課程に進学できるとは限りませんから。研究者養成型プログラムを選択するのでしたら、前期課程・後期課程の 5 年間で博士論文を完成させるつもりで、そのために必要な基礎学力をしっかり身につけておいてください。

芸術文化論コース



芸術文化論コースは、芸術文化コンテンツ系と芸術文化環境系から構成され、造形美術（絵画）、文学、舞台芸術（音楽、オペラ、演劇）、ファッションなどの芸術（アート）作品と社会との関わりについて研究しています。

コンテンツ系では作品内容の分析を通してそこに反映される社会意識や世界観を考えます。環境系では、創作の自由やアートへ容易にアクセスできる権利の保障、文化施設運営の実際などについて、国際比較を踏まえて考察し、文化政策のグランドデザインや、その具体的実践としての芸術と社会をつなぐアートマネジメントに取り組んでいます。

本コースでは、学部時代の専門に関わらず、芸術とそれを支える環境に関心を持ち、専門的に学ぼうとする意欲にあふれた学生の受験を歓迎します。

進路実績（前期課程）神戸大学連携創造本部助教、兵庫県立芸術文化センター職員、公益財団法人びわ湖ホール職員、神戸市民文化振興財団職員、神戸市灘区民センター指定管理者、関西フィルハーモニー管弦楽団、同志社大学職員、大阪大学職員、安芸市役所、NPO法人コミュニティアートセンターブラッツ、カフェ・カンパニー、他
（後期課程）同志社大学教授、福井大学准教授、京都橋大学准教授、東北工業大学准教授、大阪府商工労働部主任研究員、サントリーホールディングス、神戸大学非常勤講師、大阪市立大学非常勤講師、関西学院大学非常勤講師、大手前大学非常勤講師、流通科学大学非常勤講師。

在籍学生数（前期課程）13名
（後期課程）5名

論文テーマ例（前期課程）地域コミュニティ、パブリックシアターの組織運営、民間非営利組織間のネットワーク形成、持続可能なコミュニティアート、ベルリンの「社会文化センター」、スウェーデンの文化政策と市民活動、シンガポールの文化政策、文化遺産の保護と活用：フランスと中国の旧市街地、パリ市の都市空間整備、ロシア帝政期の教会建築、ジャポニスム、林忠正、印象派画家カイユボット、フランスの女性作家、前衛書と抽象表現主義絵画、コレットの表象、日本のストリートファッション、他
（後期課程）文化政策と社会的包摂、日本の近代広告、ドーミエと近代都市パリ、戦前の日本における近代フランス音楽の受容、ジャポニスム期の日本陶磁器コレクションと日仏の交易、宮沢賢治と光学、他

所属教員の紹介

朝倉 三枝 准教授 現代芸術社会論特殊講義ほか

専門は西洋服飾史で、ファッションという切り口からフランスを中心とする近現代ヨーロッパの芸術文化について研究をしています。特に19世紀後半から20世紀初頭の芸術とファッションの関わりについて考察を進めています。身体論、日仏交流史、ブランド文化論等にも関心があります。

池上 裕子 准教授 現代芸術動態論特殊講義ほか

第二次世界大戦後の美術と国際美術シーンのグローバル化。専門はアメリカ美術ですが、戦後の国際政治における文化外交にも関心があり、日米交渉史や戦後日本美術の研究に取り組んでいます。綿密な作品研究から芸術を比較文化的・社会政治的に論じることを目指しています。

岩本 和子 教授 芸術文化共生論特殊講義ほか

研究テーマはフランス語圏文化、特に19世紀のフランス文学と、隣の多言語国家ベルギーにおける文化的アイデンティティの問題や文化政策です。また、マグリブ、クレオールなどのフランス語圏ポストコロニアル文化、マイノリティ文化にも関心があります。

藤野 一夫 教授 文化環境形成論特殊講義ほか

音楽文化論、文化政策、アートマネジメントについて、理論と実践の両輪で取り組んでいます。近年アートが創造都市や地域活性化の道具として注目されていますが、芸術文化の公共的価値性をもっと多様であることを明らかにしたいと考えています。

吉田 典子 教授 表象文化相関論特殊講義ほか

フランス近代の文学と美術が専門で、特にゾラとマネや印象派の絵画を研究しています。一般に、文学作品や絵画・写真・ファッションなどの表象文化を、時代の歴史的・社会的な文脈の中で分析することが課題です。ジャポニスムなど比較文化や日仏交渉史、ジェンダー論にも関心があります。

所属学生からのメッセージ



スンプルフー（森布尔夫）さん

（博士前期課程 1 年）

内モンゴル師範大学外国語学部英語学科卒業

研究テーマは「中国内モンゴル自治区におけるモンゴル族若者文化の実態—モンゴルロックミュージックの展開と受容を中心に」。

私は幼いころから日本文化の影響をうけてきており、その中でもアニメソングが好きでした。学部時代の日本への短期旅行を通して、私は日本の若者たちの文化に惹かれ、それも欧米文化の影響を受けながら、なおかつ日本の伝統文化が保たれた、個性あふれる若者文化が日本において生み出されていることに大変関心を持つようになりました。

そこで私が考えたのは、草原から都市に移住した中国におけるモンゴル族の若者たちにも同様に伝統文化と異文化との狭間で、民族文化が保たれた若者文化が形成されて行くのだろうかという問題です。しかしこれまでの研究では、都市部モンゴル族の若者たちの文化が注目されることはほとんどありませんでした。したがって私は、モンゴルロックミュージックの展開と受容の実態調査を通して、この問題を考えていきたいと思います。

私にとっては、本コースが持つグローバルな研究視座やオープンな研究環境が大変魅力的です。本コースは、日頃各専門分野の先生方の指導の下で研究の輪を広げ、世界各地から来た学生たちとの交流を通じて、グローバルな視点を持って研究に取り組むことが望める場であると思います。



小林 瑠音さん

（博士後期課程 3 年）

学習院大学法学部卒業、大阪大学大学院国際公共政策研究科博士前期課程修了。英ウォリック大学文化政策研究センター博士前期課程修了。研究テーマは「英国コミュニティ・アートとアーツカウンシルの政策方針」。

私は、地域コミュニティが抱える社会的課題に対して、積極的に介入していくアートと文化政策の関係性について研究しています。特に、その先駆例の一つとされる 1960 年代から 1980 年代の英国コミュニティ・アートと、それに対するアーツカウンシル（芸術評議会）の政策方針の変遷に注目しています。現在は社会人学生として、民間劇場に勤めながら、現場での今日的課題の収集にも努めています。文化政策研究のためには、理論と実践双方の視点から事象をとらえ、それぞれの言語を操るバランス能力と洞察力が必要です。そのような学際的研究に際しては、本コースの先生方は、つねに新しい視座と貴重なご指導を与えて下さいます。他の学生の皆さんも、ご自身が表現者である方や、アートマネジメントの現場で実務を重ねている方々が多く、大変刺激的な環境です。大学院での高い専門性の習得に研鑽を積むとともに、多角的な視点と柔軟な応用力を養うことができるのが本コースの魅力のひとつだと思います。

修了学生からのメッセージ



橋本 麻希さん

神戸大学発達科学部卒業、同大学院国際文化学研究科博士前期課程修了。

研究テーマはアートマネジメント、コミュニティアート。現在、城崎国際アートセンターにアートコーディネーターとして勤務。

大学院在学中も、地域に根差した活動とともにコンテンツボラリダンを発信する NPO 法人 DANCE BOX（神戸新長田）での劇場インターンや、別府現代芸術フェスティバルでのボランティアをはじめ、様々なアートプロジェクトの現場に関わりました。修了レポートでは、イギリス発祥のコミュニティアートの歴史を振り返り、日本において“地域に根差し持続可能な”アートプロジェクトとはどのようなものか、現場での経験とフィールドワークをもとにまとめました。

現在は、国内でも珍しい舞台芸術に特化したアーティスト・イン・レジデンスの拠点「城崎国際アートセンター」に勤務し、アーティストの受け入れや地域の方々とアーティストとの交流プログラムのコーディネートを担当しています。専門性の高い授業を受けることができ一方で、現場にも積極的に出ていける研究科の雰囲気のおかげで、舞台芸術制作者としてのスタートを切ることができ先生方や学友たちに変な感謝しています。



寺田 卓矢さん

立命館大学政策科学部卒業、同大学院政策科学研究科博士前期課程修了、神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程修了。

研究テーマは近代日本音楽文化史。現在、兵庫県立芸術文化センター勤務。

国際文化学研究科在籍中は、アジア・太平洋戦争期の音楽運動に焦点を当て、激動の時代に山田耕筰や清水脩ら指導的音楽家が音楽によって何を訴えようとしたのか、そして時代の制約の中で成し遂げたこと、できなかったことを探求し、博士論文にまとめました。他方で多数のコンサートやシンポジウムの運営にも関わり、アーティストや研究者らの現代文化に関する刺激的な見識と情熱に触れることができました。常に研究と実践の両輪で進む大学院生時代でしたが、両者は絶えず交差しており、先人の功罪を知ることが「より良い未来」を具体的に構築していくための足場になっていったように思います。現在は公共劇場で施設管理と貸館業務を担当しており、日々、国内外の第一線で活躍するアーティストから地域の市民団体まで、多様な芸術の担い手と交流し、芸術の過去と未来を考えるたくさんのヒントを頂いています。

Q&A

学部時代の専門は芸術がテーマではないのですが？

芸術文化の研究もまた歴史や現代社会のさまざまな事象につながるものですから、学部時代の勉強を生かしてテーマ設定をすることは可能です。また博士前期課程では、自分の関心あるテーマだけではなく、いろいろな作品にできるだけ幅広く触れてほしいと考えています。

語学力は必要でしょうか。

研究する際に必要になる考え方の多くが欧米の研究を基礎としていることもあり、英語を知っていることは研究の大きな助けになります。また、芸術文化は言語と密接な関係にありますので、すくなくとも入学後には研究対象と関係する語学を学習してほしいと思います。

言語コミュニケーションコース



「ことば」は概念やメッセージを相手に伝える単なるコミュニケーションの手段であるだけでなく、人間の認知・思考・習慣とも密接に関わる文化そのものともいえます。本コースでは言語構造や言語慣用に関する比較・対照分析を基に、外国人に対する有効な日本語教授法の探求、第二言語習得や翻訳・通訳における言語的・文化的分析と方法論の開発、多種多様なレトリックの比較分析などを進め、グローバル化の進展の中で今や不可欠になりつつある異文化間コミュニケーション上の諸問題の解決に積極的に取り組んでいます。基礎から応用に至る、言語コミュニケーションに関わる様々な講義・演習を通して、実践的応用能力あるいは教育・研究能力を持つ人材の養成を目指しています。

進路実績 (前期課程) 東京都立高等学校(英語教員)、大阪府立高等学校(英語教員)、兵庫県公立中学校(英語教員)、(株)資生堂、(株)シャープ、アップ教育企画、JR西日本関連会社、特許事務所。
(後期課程) 天津外国語大学准教授、中国電子科技大学准教授、関西学院大学准教授、東京大学特任講師、他

在籍学生数 (前期課程) 14名
(後期課程) 4名

論文テーマ例 (前期課程) バイリンガリズム、タイ語のモダリティ、日・仏語のフィラー、カタカナ表記の社会言語学的研究、レトリック、説得、マンガのオノマトペ翻訳、日本語教育の社会的側面、日本語学習とオノマトペ、他
(後期課程) 第二言語の形態統語の習得、複合動詞、日中同形漢語、フィクションのレトリック、物語論、ベトナムにおける日本文学翻訳、イデオロギーと翻訳、字幕翻訳、日本語教育の歴史、他

所属教員の紹介

川上 尚恵 講師 日本語教育応用論特殊講義ほか

中国や日本国内を対象とした日本語教育史研究を主に行っています。学習／教育に関わる人々の実践や日本語教育の枠組みを史的な観点から分析することで、日本語教育の社会的意義や役割、あり方を問いたいと思っています。日本語教育の実践分野に関する研究も視野に入れており、特にノンネイティブの日本語教師養成について関心があります。

齊藤 美穂 准教授 日本語教育方法論特殊講義ほか

方言を含む現代日本語の文法を中心に研究をしています。また、外国人に対する日本語教育に携わってきたこともあり、日本語教育分野全般、特に外国人児童生徒に対する教育に関心を持っています。今後は、文法の研究を中心しつつ、その成果を活かした日本語教材の開発や教授法の研究にも力を入れていきたいと思っています。

田中 順子 教授 第二言語習得論特殊講義ほか

第二言語習得 (SLA) プロセスにおけるアウトプットとフィードバックの役割や、個人差 (言語学習適性など) が SLA に及ぼす影響について研究をしています。また、第一言語 (L1) には存在しない第二言語 (L2) 概念が、どのような過程で正しく (あるいは誤って) 区分されて L2 形態にマッピングされるのかに関心があります。教室内での外国語学習のみならず、SLA やマルチリンガル環境下での言語習得とその問題点も扱います。

朴 秀娟 講師 日本語教育内容論特殊講義ほか

記述的研究の立場から、現代日本語を対象とした文法研究を行っています。その中でも、副詞を中心に研究をしています。留学生に対する日本語教育に携わっていることから、日本語教育の視点を取り入れた文法研究も行っています。また、移民社会における継承語にも関心があります。

藤濤 文子 教授 翻訳行為論特殊講義ほか

翻訳行為を異文化間コミュニケーションとして捉える機能主義的一般理論と、それを具体的な翻訳行為と翻訳事例 (主に日独英語間) にどう応用するかがテーマです。翻訳において文化の差異をどう乗り越えて伝えるか、また受容者・メディア・目的などの要因が翻訳行為にどのような影響を及ぼすかに興味があります。

湯浅 英男 教授 言語慣用類型論特殊講義ほか

日本語や英語、ドイツ語などの言語でどのような構文が好んで用いられているのか、それが母語話者のどのような事態の認知に基づくものなのか、またどのようなコミュニケーション上の機能を果たしているのかに関心があります。そして類型論的視点から言語相互の関係性を追求することも目標にしています。

米本 弘一 教授 レトリカル・コミュニケーション論特殊講義ほか

ことばを使って自分の考えや気持ちを効果的に伝えるための表現技法 (レトリック) の研究をしています。日常会話や新聞・雑誌・広告の文章など、ことばを使って表現されるものなら何でも扱いますが、特に小説などの文学作品に使われている表現技法に関心があります。

所属学生からのメッセージ



中嶋 直人さん

(博士前期課程2年・キャリアアップ型プログラム)
神戸大学国際文化学部卒業。研究テーマは「相互学習型活動が日本語学習者の日本語使用にもたらす効果」。

「なんとなく」で入学した国際文化学部で留学生と第二言語習得論に出会い、このコースへは「ボランティアで行われる外国人への日本語学習支援について研究し、知識を深め、その後のキャリアやボランティア活動に役立てる」という目的を持って進むことができました。慣れた環境で見通しが立てやすかったため、このようにビジョンを持って進学できたのだと思います。進学後は、日本語教育方法論、第二言語習得論、地域日本語教育を中心に学び、少しずつ前進しています。

学部の時と同じキャンパスで過ごしていますが、大学院生になって感じる学部との違いはというと、能動的に考える場面が増えたことと、軸を持って学べることです。授業で、ゼミで、院生研究室で、自分で考えて意見を発信し、議論を交わす機会が日常的にあります。先生方のご指導はもちろんのこと、遠慮のないコースの院生からの質問や指摘も有益で、同じ関心を持つ同志がいることは、楽しく、張り合いがあり、また心強くもあります。議論で得られた考えは研究に反映させていきます。研究という2年間で共通の軸とのつながりを意識することで、学びに強く意義を感じられるのが研究科の特徴です。自分に合ったいい進路選択だったと感じています。



袁 妹さん

(博士前期課程2年・研究者養成型プログラム)
北京郵電大学日本語学部卒業。研究テーマは「中国人日本語学習者の自然談話における「フィラー」の使用実態とその要因」。

私は学部時代から日本語教師を目指し、大学院でより深く学びたいと考えようになりました。そこで、半年間の研究生生活を経て、言語コミュニケーションコースに入りました。現在、中国人日本語学習者の「フィラー」の使用実態について研究しています。

言語コミュニケーションコースでは、日本語教育学・第二言語習得論などのさまざまな授業が開設され、母語話者の方と交流すると同時に、基礎知識を身につけることができます。その中、自分の学習歴を振り返りながら、理論を積み重ねていくということには、大きな楽しみがあると感じました。そして、サポーターとして日本語教育の現場を体験する機会もあり、コース・デザインの授業で学習者と向き合い、模擬授業を行うこともできます。このような「学ぶ側」から「教える側」への転換ということも、私にとっては新しい挑戦であり、大いに勉強になりました。

日本語教育サブコースのおかげで、前期課程1年目では、数多くのコースから来た方と一緒にブレインストーミングのようなディスカッションができ、掛替えのない経験になりました。この1年は、時間に追われる毎日でしたが、悩みや喜びを共有し合える友達ができて、充実した1年間だったと信じています。今後の1年間でも、自信をもって助け合いながら努力していこうと思います。

所属学生からのメッセージ



内田 さつきさん

(博士前期課程1年・研究者養成型プログラム)
京都外国語大学外国語学部卒業。研究テーマは「中国人学習者の非対格動詞習得における気づきの効果」

私は大学を卒業後民間の学校で日本語教師をしてきました。実践現場では様々な課題にぶつかり、その都度問題の所在を探り対応してきました。そんな私が大学院を目指そうと思ったのは、現場で起こったことを理論的に語れる「言葉」を身につけたいと思ったからです。目の前にある現象を第二言語習得理論の観点から分析し、その現象が起こる要因や過程を追究してみたいという思いからでした。私の専門は日本語教育ですが、言語習得という点で考えると本研究科で行われている英語やその他の外国語教育研究から得られる知見も多くあると思います。また、言語コミュニケーションコースには留学経験、外国語学習経験が多い方がたくさんいます。彼らと意見を交わすことで、第二言語習得の普遍性、その中での日本語の特異性などに気づき、実践を振り返る際の大きなヒントをもらっています。また留学生からは、日本語を外国語として習得した人ならではの視点から意見をもらえるので、研究を進める上で非常に参考になります。この経験は教師として現場に立っているだけでは決して得られなかったものです。授業で学んだ理論、研究で身につけた分析力、院生仲間との議論から得た多角的な視点を現場に持ち帰り、新たな課題を見つけ実践に結び付けていくことが今後の目標です。

修了学生からのメッセージ



藤原 優美さん

(2013年度博士後期課程修了)
四川外国語大学日本語学部卒業。神戸大学大学院国際文化研究科博士前期課程・博士後期課程修了。
研究テーマは「日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語の対照研究：語構成の異同と文法的振る舞いを中心に」
現在、東京大学教養学部付属グローバルコミュニケーション研究センター特任講師。

外国語を学習する際、母語の知識が活用できれば、習得を促進することがあります。これは日本語や中国語においても同じです。日本語と中国語の中には、同形漢語が多数存在しているため、中国語母語話者が日本語に接した際にも日本語母語話者が中国語に接した際にも、漢語に親しみを感じると思います。在学中、私は日本語と中国語の対照研究、特に2字同形漢語について研究を進めました。ゼミでは、研究指導や報告などを通した議論が行われ、国内外の研究調査や学会報告なども先生方がフォローしてくださいました。私も指導の先生をはじめ、コース内の先生方からきめ細かなご指導をいただき、また生活面でも親切に相談に乗っていただきました。院生室では、毎日異文化コミュニケーションが体験できます。先輩方も同級生の仲間たちも仲がよく、助け合いながら一緒に歩んできました。

このように、私は実りある豊かな大学院生活を送ることができました。国言コミで過ごした5年間は私にとって、大切な思い出です。皆さんもぜひここで自らの夢に向かって頑張ってください。皆さんが充実した楽しい学生生活が送れることを願っています。

Q&A

言語コミュニケーションコースの授業の特徴としてどのようなことが挙げられますか？

本コースの教員は、留学生に対する日本語教育や日本人に対する外国語教育について豊富な経験をもっています。したがって、教育経験に基づく疑問点・問題点が絶えず授業の中心にあり、問題解決を念頭においた授業を行なっています。

本コースではどのようにして修士論文や博士論文のテーマが決められているのでしょうか？

本コースでは、入学してきた学生の問題意識や関心・興味を第一に考えています。したがって院生は、指導教員と相談しながら自らテーマを決めることになります。

指導教員にしか論文指導をしてもらえないのでしょうか？

例えば前期課程では1年次後期から2年次後期にかけて、計3回程度コースの教員・院生の前で修士論文・修了研究レポートの中間発表をする機会を設けています。つまり、修士論文・修了研究レポートの作成をコース全体でサポートする体制をとっています。

感性コミュニケーションコース



人とひとの間のコミュニケーションにおいて要求されることの一つは、気持ちを通じあうことでしょう。しかし実際のコミュニケーション場面においては、たとえば「言葉は通じているのに気持ちが通じていない」と思える場合があります。この場合、「気持ちは通じていないか」「言葉（音声）は本当に通じているか」といったベーシックな問題について検討する必要があります。感性コミュニケーションコースは、コミュニケーションの過程を音声生成など身体的なプロセス、心理学・脳科学など認知的なプロセスの水準から探求します。またネイティブの発音に近い発音を可能にする方策、対人関係を改善する技法といったプラクティカルな問題についても学生諸君と一緒に研究を行っています。

所属教員の紹介

定延 利之 教授 コミュニケーション文法論特殊講義ほか

これまでのコミュニケーション観・発話観・言語観の検討を通して、人間のコミュニケーション行動や文法を、内的な情報処理の観点と、社会的な対人行動の観点から統合的に考えることに興味を持っています。

林 良子 教授 言語行動科学論特殊講義ほか

音声科学・心理言語学。日本語や諸外国語における音声の特徴や、外国語を学ぶときの発音の困難点などについて実験的手法を用いて研究しています。言語障害や言語発達、各国における音声コミュニケーションの教育方法の比較についても興味があります。

米谷 淳 教授 対人行動論特殊講義ほか

対人コミュニケーション・実験心理学。対人相互作用はジレンマとパンドックスの宝庫であり、誤解、誤情報、意思不通、不信・不審がキーワードです。とじれやすく、扱いにくく、かといって軽視できない対人コミュニケーションの世界を主に行動科学的アプローチにより探ってみませんか。対人技能訓練、表情と感情の文化比較の研究に取り組んでいます。

進路実績 (前期課程) ユニクロ、アステラス製薬、イーオン、ATR Learning Technology、(中国の国立) 中国銀行、神戸市(上級行政職)
(後期課程) 神奈川県科学捜査研究所、大阪大学言語文化研究科、国立障害者リハビリテーションセンター研究所、日本学術振興会特別研究員(PD)

在籍学生数 (前期課程) 9名
(後期課程) 8名

論文テーマ例 (前期課程) 注意、ワーキングメモリ、情動、視覚認知、表情、日本語音声コミュニケーション、外国語発音における母語干渉、エラーニング、社会的知性、社会学習
(後期課程) 数表象、プライミング、視覚的注意、外国語音声習得のメカニズム、音声の産出と知覚

松本 絵理子 教授 コミュニケーション認知論特殊講義ほか

認知心理学、神経心理学。人間がどのようにしてものを見たり、感じたり、記憶したりしているのかについて関心があり、それを心理行動実験や脳活動の計測によって明らかにしていきたいと考えています。近年では特に、人間がどのような対象に注意を向けるのか、不安や緊張などの個人特性が認知過程に及ぼす影響はどのようなものか等について取り組んでいます。

水口 志乃扶 教授 言語インターフェース論特殊講義ほか

意味論、プロソディ研究。意味論の研究では、特に「数の概念」の対照研究に興味があり、方法論としては形式意味論を用いて言語の普遍性をとらえようとしています。また、英語と日本語のプロソディの音声と認知をインターフェースの観点から研究をしています。

山本 真也 准教授 非言語コミュニケーション論特殊講義ほか

比較認知科学・進化心理学。究極のテーマは「人間とは何か」を知ることです。そのためのアプローチとして、ヒトが発達させてきた社会的知性、特に協力と文化の進化について調べています。主なキーワードは、共感・他者理解・利他・社会規範。ヒト・チンパンジー・ボノボ・ウマ・イヌをはじめとする種間比較を中心に、実験心理学とフィールドワークを組み合わせ研究しています。

所属学生からのメッセージ



羅 希さん

(博士後期課程 3 年)
立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部卒業。
立命館大学言語教育情報研究科修士課程修了。
研究テーマは「状況に埋め込まれた相づちをめぐる研究」

私は対人コミュニケーションに大変興味を持っており、この分野では従来「周延的」といわれる相づちなどの言語現象を研究対象としています。日本人は「世界で最も相づちを打つ人たち」だと言われている一方、私たち中国人は「世界で最も相づちを打たない人たち」だと言われています。この相づちを打つ頻度の違いは日本人と中国人がコミュニケーションをする際の誤解の要因の一つとなっています。これを少しでも減らすために、日本人の相づちを研究したいと思い、感性コミュニケーションコースに進学しました。本コースでは、言語学、音声学、心理学など様々な分野の先生がいらっしゃるの、コミュニケーションを研究するのに多分野の知識を身に付けることができます。また、学生の年齢、国籍、経歴が多様で、研究だけではなく自分の人間性も磨け、毎日新たな刺激を受けています。このコースであれば、きっと深みのある研究ができると思います。



山中 隆史さん

(博士後期課程 1 年)
京都大学法学部卒業。
研究テーマは「非対称的情報場面における交渉に関する実験的研究」

現在、私はビジネススクールで教員をしています。対人コミュニケーションにおいて、表情やしぐさといった非言語も大きな影響がありますが、法則や適切な方法の訓練の機会は殆どなく、何らかの教育訓練プログラムにつなげたいとの思いから入学を決意しました。本コースでは、研究分野に関する高度な専門知識を学ぶことに加え、様々な専門分野の先生から学べる機会があり、多面的に考察しながら研究を深めることができます。自らの研究に関しては、指導教官の先生が、初歩的なことから熱心に親身になって丁寧に指導くださいますので、段階的に無理なく研究を進めていくことができます。また、院生室もあり、心地よい雰囲気の下、国籍や年齢も様々な学生同士の交流を通じて切磋琢磨しながら研究できる環境が整っています。こうした恵まれた環境の下、一緒に研究をしてみませんか。

修了学生からのメッセージ



ポティスィットティポーン・ティッパヤーラット (Pothisitthiporn Tippayarat) さん

(2014 年度博士前期課程修了)
タイ Chulalongkorn 大学文学部卒業。
神戸大学国際文化学研究所博士前期課程修了。研究テーマは、
"Comparative Study on Facial Expressions and Display Rules between the Thai and the Japanese with a Focus on Smiles"。現在、タイにおける日本企業に勤務。

微笑みの国・タイからの留学生です。私は、タイ人と日本人の表情、中でも「微笑み」についての比較研究を行いました。タイ人と日本人大学生を対象に微笑みを中心に表情についてインタビュー実施し、表情を表出してもらい、それを動画に撮りました。その後、インタビュー内容と表情を分析し、タイ人と日本人の微笑みの使い方と微笑む時の文化的要因を検討しました。研究科では、心理学・言語学・統計学など様々な分野の講座に出席することができたため、自分の視野を広げながら研究を進めることができました。

院生室は、いつも明るい雰囲気でした。様々な国から来た先輩と友達が相談に乗ってくれたり、勉強や日本での生活を励ましてくれたりしました。研究面では大変な時もありましたが、私にとってとても貴重で素敵な 3 年間で、思い出たびに、つい微笑んでしまいます。皆さんも少しでも興味がありましたら、いつでも院生室を訪れてみてください。



阿栄娜さん

(2012 年度博士後期課程修了)
内蒙古大学・関西国際大学卒業。神戸大学国際文化学研究所博士前期課程修了。神戸大学国際文化学研究所博士後期課程修了。研究テーマは、「日本語発音習得におけるシャドーイング訓練の効果」。現在、国立障害者リハビリテーションセンター研究所流動研究員。

私が 11 年前に初めて日本に来たとき、留学生 5 人でルームシェアしていました。全員の母語がばらばら（韓国語、朝鮮語、中国語、モンゴル語）なので、共通のコミュニケーション手段は日本語でした。その日本語の発音にそれぞれの母語特有のクセがでます。なぜ同じ日本語を話しているのに、こんなに違って聞こえるのだろう。それを知りたくて、大学院に進学することにしました。

大学院では音声学を専門的に勉強し、先生方のサポートを受けながら音声を客観的に分析する技術を身につけることができました。博士前期課程に入学当初は、後期課程へ進学することは考えていませんでした。しかし、勉強しているうちに研究の面白さに魅了され、博士課程に進むことを決めました。そして、今では研究員として吃音の研究に携わっています。

神戸大学は留学生対象の奨学金が充実しているので、研究に専念することができる大学だと思います。感性コミュニケーションコースの大きな魅力・特徴は、他・多分野の研究が身近で学際的な雰囲気に溢れていることです。多分野の知識や研究方法を頭に入れておくと、いつかきっと大いに役に立つ時が来ます。研究はなかなか地味で孤独な道です。しかし、努力すれば、きっと報われる時が来ると信じ、今も日々がんばっております。

Q&A

感性コミュニケーションに入るには、心理学や脳科学と、言語学、コミュニケーション論などを全部勉強していないと、ダメなのでしょうか。

そんなことはありません。とりあえず、どれか、で結構です。

言語について研究したいと思っているのですが、このコースと言語コミュニケーションコースはどう違うのですか？

感性コミュニケーションでの言語研究は、自然に発話されたデータや、様々な機器を使って実験的に計測を行ったデータを主に扱います。またバラ言語と言われるいわゆる伝統的な言語学ではあまり扱われてこなかった分野（例えばため息、沈黙、声の

音色など）や視覚情報（目線、表情、口の形、ジェスチャーなど）も含めて研究したいという方、実験して色々測ってみようという方には当コースをお勧めします。

脳の研究をやりたいのですが、どんなことが可能ですか？

感性コースでは、脳波計、光トポグラフィーを使って脳機能計測実験を行うことができます。もちろん、精密に計画して組んだ心理学実験によって、認知情報処理が脳内でどのように行われているかを検討することも可能です。チャレンジをお待ちしています！

情報コミュニケーションコース



情報コミュニケーションコースは、コンピュータやインターネットに代表される、情報通信技術を用いたコミュニケーションについての教育・研究を行うコースです。当コースでは、インターネットにおける最新の情報発信技術、コンピュータを用いたコミュニケーション情報の収集・分析・整理方法といった、すぐに活用できる高度な情報処理技能の習得や、将来におけるより効果的なコミュニケーションの実現を目的とした情報通信技術の研究・開発を行なっています。

就職実績 (前期課程) チームラボ株式会社、日本電気株式会社、西日本電信電話株式会社、滋賀県立成人病センター職員、コベルコシステム株式会社、スミセイ情報システム株式会社、富士通FIP、東京農工大学職員、神戸情報大学院大学准教授、富士通ビー・エス・シー、神戸情報大学院大学職員、グッドスカイ(株)、中国電信北京支社、中国広発銀行、野村総研

(後期課程) 立命館大学情報理工学部講師、神戸情報大学院大学助手、神戸女子大学助教、大阪産業大学講師、北九州市立大学准教授、大妻女子大学短期大学部准教授、中国国家核電エンジニア

在籍学生数 (前期課程) 8名
(後期課程) 4名

論文テーマ例 情報科目学習形態分析、文書の自動分類、XML検索法、IT技術者向け学習システム、外国語学習システムにおける誤りレベル判定機能、記憶の仕組みを活用した学習システム、質問支援システム、コミュニケーション指向の都市評価、逆引オノマトベ辞典、ユーザインタフェース、コミュニケーション支援

所属教員の紹介

大月 一弘 教授 コンピューター・コミュニケーション・システム論特殊講義ほか

情報通信システムに関する研究をしています。阪神・淡路大震災において情報を持ち使う側の視点と情報伝達システムを構築する側の視点との間に、ある種のギャップがあることを痛感し、「使う側の人の目・現場の目」を重視するようになりました。

康 敏 教授 コンピューター・シミュレーション論特殊講義ほか

情報通信技術の情報教育及び外国語教育への応用に関してコミュニケーションの視点から研究・開発を行っています。特に統計的アプローチを用いてユーザのニーズにあった情報を提供することとユーザの特徴を抽出することに焦点を当てています。

清光 英成 准教授 情報ベース論特殊講義ほか

データベースシステムやWeb情報システムを用いてデータを高次利用することを目的としています。アクセス履歴などの利用者プロフィールや場所・時間などの状況を参考に「いつもの」という入力に利用者個別の答えを出力することをテーマにしています。

西田 健志 准教授 計算科学応用論特殊講義ほか

情報システムの操作性を向上するユーザインタフェースの研究、人どうしのやり取りを円滑にするコミュニケーションシステムの研究をしています。特に、意見がまとまらない、批判的な意見が言い出せない、外国語が流暢でないなど、コミュニケーションがうまくいかない状況を情報と心理の両面から見つめ直すこと、開発したシステムを実際に運用して知見を得ることを重視しています。

村尾 元 教授 認知情報システム論特殊講義ほか

生物に倣った「柔らかな情報処理」の技術とマルチエージェントシステムの手法を用いて、人間をはじめとする生物の集団に現れる知的な振る舞いの分析と応用について研究をしています。対象となるのは、人間などの個体が構成する小さな集団から、社会、経済、インターネットまで様々です。

森下 淳也 教授 メディア統合論特殊講義ほか

研究対象は情報を蓄え、活用するためのデータベースシステムです。しかし、「堅牢な、正しい、シンプル、完全な」といったデータベースの持つ大きな特性に逆らい、「曖昧、複雑、柔らかな、不完全(成長する余地がある)」といったデータを扱う「やわらかな」データベースシステムを模索しています。

所属学生からのメッセージ



邵 帥さん

(博士前期課程 2 年・研究者養成型プログラム
中国山東大学外国語学部卒業。
香港中文大学大学院人文研究科修士課程修了。
研究テーマは「機械翻訳技術を用いた学習支援システムの構築に関する研究」。

私は大学で日本語を専攻し、香港中文大学大学院で Computer-aided Translation 修士コースを修了しました。いつも言語の魅力に感心しているが、それとともに身にしみて感じたのは言語習得の難しさです。香港で幾つかの翻訳プロジェクトに参加しまして、そこで人手翻訳の効率の低さを深く感じ、機械翻訳のポテンシャルを実感しました。Google 翻訳をはじめとする機械翻訳システムはすでに市販のソフトウェアやフリーの Web アプリとして多くの分野で使われているが、品質の不足がよく指摘され、語学学習に利用されるケースはまだ稀です。従って、外国語学習における機械翻訳システムの利用について興味を抱くようになり、本コースに進学し、現在翻訳エンジンを利用した学習支援システムの構築に関する研究を行っています。

本コースでは、先生方や学生たちの研究分野は様々であり、講義と演習を履修することで視野を広げられ、自分の研究に有益な知識を数多く学べます。また、論文の輪読や発表、それにグループワークで課題を解決することを通して、先生方から貴重なご意見をいただくことができ、同級生とのディスカッションで自分の思いつかないアイデアも貰えます。情報コミュニケーションコースの一番の魅力は文理融合であるのと思い、文系と理系の知識をここで生かし、幅広い領域の研究をすることができます。



桑野 徹也さん

(博士後期課程 2 年)
神戸大学国際文化学部卒業。
大学院国際文化研究科博士前期課程修了。

現在は、グループワークにおけるコミュニケーションの観察・分析から得られる定量的な情報を用いて、グループにおける“人間関係”を考察し、グループ編成に役立つ提案ができるか、という研究を行っています。

学部生の頃に、ネット上での人間関係や、情報推薦といったことに興味を持つようになり、数理的な観点から社会に関する研究がしたいと考え、大学院に進学し、現在の研究に至ります。コースに所属する学生や先生方の研究分野は、様々です。私の研究もそうですが、分野としては非常に学際的なことが多く、ただ単純に工学や社会学の知識を持ち合わせていればよいというものではないです。アイデアや目的を大切に、そこから必要なプロセスとして、様々な分野の知識を学ぶ、というスタイルの人が多いと思います。ゼミでは自由な気風が大切にされ、ブレインストーミングで様々なアイデアが創発されます。情報技術が、社会の問題を解決するという目的を持つようになると、楽しさは無限大です。

修了学生からのメッセージ



王 宇さん

(2014 年度博士前期課程修了)
中国黒龍江大学ジャーナリスト&コミュニケーション学部卒業。
神戸大学大学院国際文化研究科博士前期課程修了。
現在、日産自動車グローバル情報システム本部マーケティング&セールシステム部ビジネスアナリスト。

中国の黒龍江大学で広報学を学び、神戸大学国際文化研究科情報コミュニケーションコース博士前期課程修了後、2015 年 4 月から日産自動車に入社しました。

もともとパソコンが苦手でしたが、研究科の先生の方々の論文を読んで、コンピューターの世界に興味を持つことになりました。神戸大学の博士前期課程では、コミュニケーションがうまくいけない時の作戦を提案しました。研究科に入った時はプログラミングの素人でしたが、研究科の先生の手厚い指導で、提案した作戦のアンドロイドアプリまで作りました。そこからモノづくりの楽しさが分かりました。

現在、自動車メーカーの IT 部門で働き、学生時代身につけた知識を生かし、ユーザーの使いやすいシステムを続いで提供したいと考えています。



マルチュケ モリツさん

(2013 年度博士後期課程修了)
立命館大学情報理工学研究科修士課程修了。
神戸大学大学院国際文化研究科情報コミュニケーション専攻博士後期課程修了。
現在、立命館大学情報理工学部講師。

ドイツのミュンヘン工科大学で電気工学を、ミュンヘン単科大学とアウグスブルグ単科大学で電気情報工学を学び、立命館大学情報理工学研究科人間情報科学コースで修士課程修了、そして神戸大学国際文化研究科情報コミュニケーション専攻博士後期課程修了。2014 年 4 月から立命館大学情報理工学部情報コミュニケーション学科の講師になりました。

もともとは、電気工学における自動化の分野が専門でしたが、様々な大学での勉強と研究に加え、ドイツでの HOESCH と SONY、日本に来てからのオムロンでのインターンシップを経験し、今行っている教育学に興味を持ちました。神戸大学の博士課程では、工学分野における研究トピック拡散の数値モデルについて研究していました。現在は、この神戸大学の博士課程における研究と、情報コミュニケーションコースで学んだ様々な事を生かして、立命館大学で学部生向けに、英語で、情報科学とソフトウェア工学、データマイニングについて教えています。

これからも研究と授業を通して、教育に貢献できる事がとても幸せです。

Q&A

大学では情報や通信の専門的な勉強はしてきていないのですが、大丈夫でしょうか？

当コースを選ぶにあたっては、必ずしも、理工系の情報通信を専門とする必要はありません。高度な情報通信技術を学び、それらを自分の専門分野に生かそうという意欲をもった院生を歓迎します。

数学が苦手なのですが、ついていけるでしょうか？

当コースでは、最先端技術をより高めていくような技術革新といった研究ではなく、既存の技術がどのように使われるのか、また、より良い使い方はないのかといった応用面での研究を行なっています。仕組みを理解しその仕組みを工夫する事でどのような新しい活用ができるかを模索するには、より広い意味での理解力は求められますが、高度な数学を駆使することはほとんどありません。

外国語教育システム論コース



外国語教育システム論では、外国語教育の基礎を担う言語学、心理学、言語表象作品分析など様々な領域の学際的知見を援用して研究を行い、それらを有機的・総合的に関連させることで、外国語教育のシステムの研究・実践にあたることのできる有為の人材養成を行います。本教育研究分野では、特に、

- (Ⅰ) 言語学、心理学など関連諸分野の知見に基づく学際的な言語教育研究
 - (Ⅱ) 幅広い言語文化・表象作品の言語教授法への応用と方法論研究
 - (Ⅲ) IT 教育システムなど言語教育環境整備に関わる実践的研究
 - (Ⅳ) 言語教育を取り巻く文化的・社会的環境基盤要因に関わる研究
 - (Ⅴ) 教育現場における教育指導実習等の活動支援
- の5点を重視して研究指導を行います。

所属教員の紹介

加藤 雅之 教授 言語教育環境論特殊講義ほか

英語教育。WEB やコンピュータを使った効果的な授業展開の方法、および社会文化的な文脈における外国語教授、World Englishes の状況を研究しています。

島津 厚久 教授 言語文化表象論特殊講義ほか

アメリカ現代文学。中でもユダヤ系アメリカ文学で、特に小説家バーナード・マラマッドの長・短編小説を「表現」の観点から読み解こうと試んでいます。

高橋 康德 講師 言語対照基礎論特殊講義ほか

中国語学、音声学、音韻論。中国語諸方言の声調に関する現象を音声学・音韻論の観点から研究しています。

廣田 大地 准教授 言語文化環境論特殊講義Ⅰほか

フランス文学。ボードレールを中心とした近代フランス詩を研究対象とし、その詩学を言語学的観点から記述することを目標としています。他にも WEB やコンピュータを用いた文学研究・語学教育に関心があります。

進路実績 (前期課程) 千葉県市立高等学校、大阪府立高等学校、神奈川県立高等学校、他
(後期課程) 兵庫教育大学、神戸学院大学、近畿大学、自然科学研究機構、神戸市工業高等専門学校、他

在籍学生数 (前期課程) 1名
(後期課程) 3名

論文テーマ例 (前期課程) Time-course effects of vowel epenthesis on novel word learning and the establishment of lexical representation
The effects of retelling on Japanese EFL's text comprehension: Through the analysis of retelling protocol
Variability of the parsing process in relative clause sentence comprehension for Japanese EFL learners: A maze task study
(後期課程) An investigation of the automaticity in parsing for Japanese EFL learners: Examining from psycholinguistic and neurophysiological perspectives
The automatization of grammatical encoding process during oral sentence production by Japanese EFL learners: A syntactic priming study

福岡 麻子 准教授 言語文化環境論特殊講義Ⅱほか

作家エルフリーデ・イエリネクを中心に、オーストリア現代文学・演劇を主な研究領域とし、文学における災厄の記憶と想起、視覚芸術と書字芸術とのかわり、テキストの身体性などを主題としています。言語芸術が社会に対して持ちうる(動的な)関係、(外国語)文学を研究することの意義や必然性について、長い目で考えてみたいという方を歓迎します。

横川 博一 教授 言語教育科学論特殊講義ほか

英語教育学・心理言語学。第一言語および第二言語のリーディング、リスニング、ライティング、スピーキングおよび語彙の認知処理メカニズムとその授業実践への応用可能性を探ることが主な研究テーマです。

新任教員 (2016年10月着任予定)

所属学生からのメッセージ



星野 美穂さん
(前期課程 2年生)

私が外国語教育の分野に興味を持ったのは、学部時代に教職課程を通して小・中・高校生と触れ合い、彼らに外国語を通して異文化などを体験し、人生を豊かにして欲しいという思いがあったからです。また、厳しい選考を勝ち抜き、高校生の時から目標であった交換留学もできました。留学先のアメリカでは、言語学・心理学・教育学などの幅広い分野に触れ、日本の大学では学べなような興味深い授業も履修しました。学業以外にも積極的に交流の場に参加し、文化の違いの面白さを知ったり理解の難しさに涙したりしました。交換留学での経験は私の大きな財産となり、そこで磨かれたコミュニケーション能力は今でも活かされています。

したがって、大学院では「コミュニケーション能力養成のための動機付け」について研究しようと決めました。具体的に、日本語母語話者の中学生を対象に、英語学習者が英語学習を通してどのような段階を経て異文化コミュニケーションに興味を持ち、学び続ける意欲を維持していくのかを追求しています。実施したアンケート結果の分析や考察をコース集団指導で発表し、先生方が多くの意見や解決策をくださいます。そのおかげで、結果を鵜呑みにせず疑いを持ったり、新たな視点で考えることができたりして、心強いサポートを受けながら日々研究に取り組んでいます。

履修科目に関しては、教職課程の専修免許取得と日本語教員養成サブコースのみの授業を主に履修しています。ほとんどの授業において、先生方は個人の研究に関連付けられるように工夫してくれています。私の研究がいつか外国語教育界で広まって活かされる日を夢見て、頑張っていこうと思います。



濱田 真由さん
(後期課程 2年：コースワーク型)

私は、日本人英語学習者の第二言語産出における認知プロセスを明らかにするため、相互的同調機能の発現が、産出プロセスにおける文法符号化の自動化にどのような影響を及ぼすのかについて研究しています。日本人英語学習者に限らず話者は、インタラクションを行う際に、対話者と相互理解に至るために相手と同じ語や統語構造などを繰り返し使用する傾向があるとされており、この機能が日本人英語学習者の産出プロセスにどのような影響を及ぼすのか、心理言語学的実験を通して明らかにすることができればと考えています。

私が現在の研究を志すようになったきっかけは、学部時代に一年間オーストラリアの大学へ留学したことでした。それまでは英語に対して苦手意識を持ち、勉強法などにも悩んでいたのですが、留学後に理解の面だけでなく産出面でも英語能力の向上を感じ、なにが要因となり、またどのようなプロセスでこれらの能力は向上したのか、また、日本にいても効果的に英語能力、特にスピーキングやライティング能力を向上させるにはどうすればよいのかについて疑問を持つようになり、本研究科に入学しました。

大学院入学後は、外国語習得に関する専門的な理論から実践演習を含むものまで多種多様な講義を履修し、多くのことを学ばせていただきました。集団指導などで、様々な分野がご専門の先生方から研究に関してご意見をいただく機会も多く、自分の研究に関し幅広い視野から考えることができます。また、熱心に指導してくださる先生や、志を同じくする院生仲間とともに考え、意見を交換することにより、自分一人では見えなかった知見を得ることができる論文輪読やゼミも、研究をより発展させてくれる大変素晴らしい時間です。現在は、私が行っている研究が少しでも外国語教育に貢献できるよう、日々邁進しています。

修了学生からのメッセージ



松田 美咲さん
(2013年度博士前期課程修了)

大学で中国語に興味を持ち、学部3年生の一年間、中国南京大学へ留学しました。中国では、日本語を勉強する学生に数多く出会い、お互いの母語を教え合う機会もありました。しかし、自分の母語とする日本語をうまく伝えることができないもどかしさを感じ、「もっと日本語を知りたい」、さらに「教えられるようになりたい」という想いから大学院へ進学しました。

大学院では、言語学や教育学に関する基礎的な知識を学ぶことができる授業とともに、教育現場に直結する実践的な内容に取り組む授業をも受講しました。各国から神戸を訪れた留学生とグループで調べ学習をしたり、留学生の日本語の授業に入ってサポーターをしたりしました。その結果、基礎から実践まで幅広い内容を身につけることができました。

また、自身の研究については、参考となる論文に目を通し、それを踏まえて調査の計画を立て、実行に移していきました。その時々で、指導教員の先生をはじめ、コース、または研究科の先生から多くのアドバイスをいただき、改善していきながら、研究に専念することができました。研究のやり方、資料の探し方、論文の書き方などについても細かいところまで改めて学び直し、研究の深さを認識しました。調査では、中国人の留学生や日本語を母語とする方々に協力していただき、実際に話されている日本語を対象として考察を進めていきました。論文を書き終え、自分の研究したことが形になったときは本当に嬉しかったです。この二年間で、一つのことに深く向き合い、新しい視点で物事を考えることができるようになりました。この成果は私にとって大きな自信となり、今の生活にも繋がっています。

現在は、高校で国語の教師として教育に携わり、そこで生徒との関わりや授業の組み立てに日々奮闘しています。教育についての研究は尽きることはないと思います。大学院で学んだこと、研究したことを、あらゆる形で教育現場へ生かせることができればと思います。



鳴海 智之さん
(2013年度博士後期課程修了)

私は大学で学んだ英語学の知見を日本人の英語の理解・習得や、日本の英語教育の改善により効果的に活かしたいと考え、外国語教育を学際的な視点から研究できる外国語教育システム論コースへ進学しました。大学院では、日本人英語学習者が英文を読む際の処理メカニズムや、学習者の熟達化に伴う処理の自動化プロセスについて、心理言語学的行動実験(眼球運動測定実験)や、神経科学的脳科学実験(事象関連電位測定実験)などを通して研究を行いました。

このコースは、専門的な知識や理論を踏まえた授業実践や授業改善、また、外国語教育の問題点やその解決策などについて、確かな理論に基づいて考えることのできる、数少ない大学院です。外国語教育を少しでも良くするにはどうしたら良いのかを考える上で、外国語教育の基盤となっている学術的知識を学び、それに基づいて深く真剣に考察することが、外国語教育に携わる私たちにとって、必要不可欠なことだと思います。

現在、私は兵庫教育大学の専任講師として、現職教員の大学院生や教員志望の学部生を対象とした英語科教育の授業やゼミを担当しています。教えられる側から教える側になり、試行錯誤の日々が続いているのですが、学生の皆さんと一緒に外国語教育について学び考える楽しさや喜びも感じています。この大学院で学んだことを学生の皆さんに伝えることで、日本の外国語教育の発展に貢献できるように、これからも教育・研究活動に取り組んでいきたいです。

Q&A

外国語教育システム論コースとは、どのようなことを研究するコースでしょうか？

外国語教育システム論とは、外国語教育の基盤となる基礎研究の知見について理解を深め、学際的な立場から新しい時代の外国語教育のあり方を探求しようとするコースです。

外国語教育システム論コースでは、どのようなことが学べるのでしょうか？

このコースでは、外国語教育のシステムを支える、言語学・心理言語学、外国文学、文化学について広く学びながら、外国語教育の研究を行ったり、実践力を身につけることができます。また、英語のみならず、ドイツ語、フランス語、日本語などの言語を専攻する院生にも対応しています。

中学校・高等学校の英語教員志望ではないのですが、このコースには不向きでしょうか？

このコースは、英語の教員養成のみを目的としたものではありません。たとえば、外国語教育への応用を考えながら、心理言語学やカルチュラル・スタディーズの研究を行ったり、外国語習得を意識しながら、アメリカ文学、ドイツ・オーストリア大学、フランス文学を専門とするなど、幅広くかつ深く学ぶことができます。

入学後は、コースが開講する授業しか履修できないのでしょうか？

外国語教育システム論コースに所属していても、他コースの授業を履修することが可能です。外国語教育システム論コースに開設されている授業科目を中心に、たとえば、外国語教育コンテンツ論コースが開講する授業科目を履修することができます。

外国語教育コンテンツ論コース



外国語教育コンテンツ論コースでは、新時代の外国語教育の創造に主体的に参画できる人材育成を目指し、外国語教育の内容・方法・展開に関わる研究を総合的に行っています。本コースでは、言語学（コーパス言語学・認知言語学・語用論・音声学・文法記述）と教育学（授業論・指導法・教育工学）の学問的基盤をふまえつつ、特に、教育現場での実践的展開を見据えた研究に精力的に取り組んでいます。本コースにおいて、外国語教育を取り巻く諸問題に多面的にアプローチする能力を付けた修了生は、国内外の教育機関等で活躍しています。本コースでは、学部時代の専門にかかわらず、外国語教育を通して社会のグローバル化に貢献しようとする意気込みにあふれた学生の受験を歓迎します。

進路実績（前期課程）兵庫県立高校教諭（2）、滋賀県立高校教諭、私立西大和学園中学校・高等学校講師、私立神戸女学院高等学校教諭、尼崎市立中学校教諭、神戸市立中学校教諭、（株）矢崎産業、（株）Sony Computer Entertainment、神戸大学附属中等教育学校、（株）日立ソリューション、他
（後期課程）近畿大学准教授、環太平洋大学教授、大阪大学専任講師、広島国際大学専任講師、関西外国語大学非常勤講師、関西大学非常勤講師、流通科学大学非常勤講師、中南財経政法大学講師、山東科技大学講師、神戸大学国際文化学研究科学術研究員、他

在籍学生数（前期課程）11名
（後期課程）3名

論文テーマ例（前期課程）英語強意詞、英語コロケーション、英語使役動詞、英語起動表現、ドイツ語自他動詞、日本語カタカナ語、シャドーイング指導、フォニックス指導、Focus-on-form発音指導、バイリンガル者会話分析、英語前置詞用法、他
（後期課程）会話における修復行為、中日同形方位成分、会話インタラクション分析、日本語複合動詞、英語基本動詞用法、第2言語使用アイデンティティ、小学校英語指導者資質診断テスト開発、他

所属教員の紹介

石川 慎一郎 教授 外国語教育内容論特殊講義Ⅱほか

応用言語学の観点から、コーパス（大規模テキストデータベース）を使った英語・日本語の言語分析・教材分析・教材開発・語彙習得などを主として研究しています。あわせて、語彙処理の心理的機制や、小中高での言語教育のカリキュラム設計、教授法などにも関心を持っています。科学的な視点から言語や教育の問題を考えてみたい学生を歓迎します。

柏木 治美 教授 外国語教育工学論特殊講義ほか

情報通信技術の学習環境への応用に関する研究を行っています。最近、3DのCGキャラクターを取り入れ、ユーザとCGキャラクターとの双方向性・対話性を実現するシステムの検討を行い、学習や学習意欲の継続との関係を探りたいと考えています。新しい技術を取り入れた学習環境の開発研究に興味を持つ学生を歓迎します。

木原 恵美子 准教授 外国語教授学習論特殊講義ほか

認知文法の観点から英語の文法現象の記述を行いながら、文法の学習メカニズムの分析や教授法の開発に関する研究も行っています。特に、「構文」という概念を用いて、英語母語話者や英語学習者が使用する構文を分析することによって、認知文法や構文文法の実用性と限界を検証しています。文法の分析や記述に興味がある学生を歓迎します。

Tim Greer 教授 第二言語運用論特殊講義ほか

言語表現とそれを用いる人との関係に関心を持っています。会話分析を始めとし、質的調査方法を使用し、第二言語語用論（L2 Pragmatics）を専門にしています。二ヶ国語で行う会話、オーラル英語能力試験での会話、日常会話など様々な場面で「言葉を使った社会的行為」を研究しています。また、言語教育、教材分析、アイデンティティ構成、バイリンガリズム、などの研究も行っています。

朱 春暉 教授 言語対照応用論特殊講義Ⅱほか

音声学、外国語教育。言語音声は生理学的、物理的、心理的諸側面から研究し、外国語の発音をいかに効率よく教えるかを検討しています。言語音声や外国語の発音・発音指導に興味を持つ学生を歓迎します。

西出 佳代 講師 言語対象応用論特殊講義Ⅰほか

1984年にドイツ語の一方言からルクセンブルク大公国の「国語」へと昇格を果たしたルクセンブルク語の体系記述を目指し、研究を進めています。ゲルマン語圏の西端でロマンス語圏と接するルクセンブルクは、人口55万人ほどの小国ですが、だからこそ言語接触や多言語併用、言語とアイデンティティや多言語教育の問題など、様々な研究の可能性を示唆してくれる興味深い国の一つと言えます。

大和 知史 教授 外国語教育内容論特殊講義Ⅰほか

英語教育の中でも、英語発音指導（特にイントネーションなどのプロソディ）を主な研究テーマとし、学習者の英語音声の使用実態の把握、指導への応用などを主に研究しています。また、語用論的能力育成のための指導に関連した理論的背景の精緻化や指導法にも関心があります。

所属学生からのメッセージ



澁谷 恵美さん

(博士前期課程2年・キャリアアッププログラム)
神戸松蔭女子学院大学英米文学科情報言語コース卒業
ベルギールーヴァン・カトリック大学マルチンガルビジネスコミュニケーション科 Postgraduate Degree
研究テーマは「3DCGを取り入れたコンテンツ作成支援に関する研究」

私は、日本とベルギーでの社会人の経験を通して外国語教育への関心が強くなり、専門的に大学院で学びたいと考えようになりました。そこで、まず科目等履修生となり、大学院がどのような場所であるのかを知ると同時に、様々な視点から外国語教育に携わるコースの先生方の専門分野について理解することができました。その後、研究生を経て、先生の専門のテーマと自身の研究テーマが明確になりました。現在、大学院生となり、ITやコンピュータなどの新しい技術の教育への応用に関わるコンテンツの作成支援の研究を進めながら、様々な角度から外国語教育について学び、時代に適応した外国語教育に対して考え続けたいと考えています。自身の研究テーマを事前に深めておけば、充実した研究ができるコースだと思います。



渡邊 綾さん

(博士課程後期2年)
上智大学外国語学部英語学科卒業。ハワイ大学マノア校第二言語研究科博士前期課程修了。
研究テーマは第二言語教室会話分析。

学部時代に応用言語学や第二言語習得といった分野の基礎を学び、修士課程では質的研究法である会話分析を用いて研究を行いました。修士課程修了後日本に戻り英語教育に携わるうちに、働きながら研究活動が続けたいと考え、会話分析が専門のグリア先生の指導を受けるべく本コースに入学しました。現在、教室会話における日本人英語学習者の第二言語使用の発達をテーマに研究を進めています。第二言語学習者の教室における言語・非言語行動を縦断的に観察し分析することで、どのようにして相互行為能力が変化していくのかを明らかにすることが目的です。本コースでは、自身の研究テーマをより専門的に深め、外国語教育に関する幅広い分野の研究者をオーディエンスとして想定した研究を続けることが可能です。集団指導演習では、指導教員だけでなくコース内の様々な専門を持つ先生方にご指導いただけることも魅力の一つです。広い視点を持ちつつ専門性を深めたい方に最適なコースだと思います。

修了学生からのメッセージ



緒方 高士さん

(2014年度博士前期課程修了)
神戸学院大学人文学部卒業。神戸大学国際文化学研究所博士前期課程修了。研究テーマは「コーパスを用いた英語前置詞の用法説明と教育システムの開発：英語教育への新しいアプローチ」。現在、神戸大学附属中等教育学校英語科教諭。

私はすでに英語科教諭として教壇に立っていたのですが、日々の授業をどのように効果的にわかりやすく展開するか、これまでの経験に頼らずに、いかに真正性の高い旬の教材を用いて生徒に生きた英語に触れてもらうか、ということを探求する日々を送っていました。このまま平穏無事にすごしては、質の高い教育を提供することができないのではないか、と思っていたところに、本学外国語教育コンテンツ論への進学を頂きました。本コースでは、コーパス言語学・音声学・統計学・ICT教育等、さまざまな分野の学びを深めることができました。国際コーパス学会等、全国各地で行われる学会で発表させて頂き、ご指導頂いたことも、大きな財産となっています。コースの院生同士の協力、また、先生方の優しく、時に厳しい丁寧なご指導を頂くことにより、納得のいく修士論文をまとめることができ、幸せな時間を過ごせたと心から思います。現在、私は神戸大学附属中等教育学校に勤務しています。本学で学んだことを糧に、英語教育に携わっていきたいと思います。



岡田 悠佑さん

(2011年度博士後期課程修了)
立命館大学文学部卒業。立命館大学言語教育情報研究科修士課程、ハワイ大学マノア校第二言語研究科修士課程修了、神戸大学国際文化学研究所博士後期課程修了。研究テーマは第二言語会話分析。現在、大阪大学大学院言語文化研究科准教授。

私はハワイ大学マノア校の修士課程を修了後、立命館大学で嘱託講師をしていましたが、会話分析による第二言語会話の研究を続けたいと思い、当該分野で国際的に著名なTim Greer先生の指導を仰ぐべく、神戸大学国際文化学研究所に入学しました。英語の授業、英語会話能力テスト、国際会議といった第二言語会話における定式化の研究で博士号を取得し、現在は大阪大学大学院言語文化研究科に勤務しています。院生時代の思い出としては何と言っても集団指導演習です。コースに所属する全ての先生、院生の前で研究の進捗具合を発表する演習で様々な意見をいただき、博士論文により広い視野をもたせることができました。また、この1年に5回開催される集団指導演習を目指して研究を進めることで、博士論文を3年で完成させることができました。この集団指導演習に見られるように、神戸大学国際文化学研究所外国語教育コンテンツ論コースの特徴は、先生方そして留学生を含む院生の持つ多様性が「機能的に」融合されているところです。外国語教育への高い意欲と分析に着手できるデータを持って入学すれば、実りの多い研究ができる博士課程だと思います。

Q&A

英語以外の外国語教育を学ぶことはできますか？

本コースでは、英語・日本語・中国語・ドイツ語の研究指導も行っており、所属学生にもこれらの諸言語を専攻している方がいます。多言語の視点から外国語教育を考えるのが本コースの特徴です。

英語教員免許を取得できますか？

学部時代に一種免許状を取得している場合は、博士前期課程で指定された科目の単位を取得することによって専修免許状を取得することができます。また、一種免許状を取得していない場合は、大学院に在籍しながら学部科目を並行履修して、教員免許（一種免許状）取得に必要な科目の単位を一定数の範囲で補うことが可能です。

学部時代の専門が語学や教育学ではないのですが、本コースで研究していけるのでしょうか？

これまでに在籍していた院生の学部時代の専門は、言語学・言語教育学のみならず、文学・法学・経済学などさまざまです。語学力と語学教育への熱意があれば、大学院において新たに外国語教育の研究を始めることも十分に可能です。本コースでは、

導入的な講義を体系的に開講しているので、これらの履修により、2年間で修士レベルの知識や分析スキルを身につけ、さらに、後期課程で研究を深めることができます。

留学経験者は多いのでしょうか？

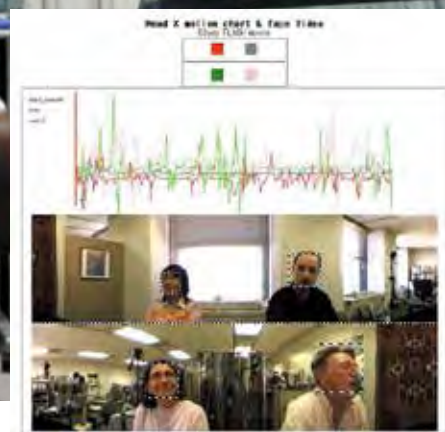
これまでの在籍者は、米国、ドイツ、豪州などで留学を経験していました。韓国で実地調査を行った学生もいました。院生が留学しても、指導教員とメールなどで頻りに連絡をとりあうため、きめ細やかな指導とサポート体制が整っています。在籍者のなかには留学生もあり、国際色豊かなコースです。

修了後の進路状況はどうですか？

教育職への就職が多くなっています。前期課程修了者は、全国の公私立の高校・中学校の英語教諭として活躍しており、後期課程修了者は国公立大学講師などに就職しています。この他にも、民間企業の海外部門で活躍する修了生もいます。また、高校や大学で教員として勤務しながら本コースで研究活動に取り組んでいる学生もいます。

連携講座（博士後期課程に設置）

先端コミュニケーション論コース



ますます増大する文化摩擦問題や、近い将来われわれが直面することになるであろうロボットとの共存問題は、コミュニケーションの問題に他なりません。人間のコミュニケーションとはどういうもので、そこにどのような文化差があるのか。言語・パラ言語・非言語行動そして身体は、コミュニケーションの中でそれぞれどのような役割を果たすのか。それはわれわれの外国語学習にどのように活かせるか。先端コミュニケーション論コースは、最新の機器等を駆使してこのような問題を解明し、新しいコミュニケーションの可能性を切り開こうとするコースです。

連携先：株式会社国際電気通信基礎技術研究所（ATR）



進路実績 甲南大学教授、他

在籍学生数（後期課程） 5名

論文テーマ例

- 外国語学習における発音学習、音読の役割
- 英語音声学習における調音器官画像情報提示の役割

所属教員の紹介

内海 章 客員教授 先端コミュニケーション論特別演習

画像認識・視線検出・マンマシンインタフェースなどの分野を主として研究しています。

住岡 英信 客員准教授 先端コミュニケーション構造論特別演習

人とロボットのコミュニケーションの分野を主として研究しています。

山田 玲子 客員教授 先端コミュニケーション学習論特別演習

第二言語の音声知覚、音声言語学習、eラーニングなどの分野を主として研究しています。

日本語教師養成サブコース

SUB-COURSE ON TEACHING THE JAPANESE LANGUAGE

現在、日本には日本語教師を認定する公的機関や資格試験はなく、日本語教育能力試験（財団法人日本国際教育支援協会主催）に合格していることや、大学等の日本語教師養成講座を修了していることが、日本語教師としての専門的な知識・技術を持っていることの証明となります。

本研究科では、文化庁報告『日本語教育のための教員養成について』（平成12年）にある内容を含む多くの授業が提供されており、これまでも多くの修了生が、本研究科在学中に受講した日本語教育関連科目の知識を生かして、国内外の機関で日本語教育に従事しています。

2015年度に、博士前期課程の学生が各自の専門の勉強をしながら、日本語教師になるために必要とされる科目も受講できる「日本語教師養成サブコース」が新設されました。所定の単位を取得した場合には、国際文化学研究所の発行する修了書が授与されます。2016年度からは、博士後期課程の学生もサブコースを履修することが可能になりました。



研究生制度

RESEARCH STUDENT SYSTEM



名前 張昆
出身地 中国
所属コース グローバル文化専攻外国語教育系外国語教育コンテンツ論コース博士後期課程
研究テーマ 第1音節にストレスを置く中国語非轻声2音節語の音響的特徴
指導教官 朱春躍

研究生になったきっかけ

好きな分野の専門知識を勉強したいことをきっかけに研究生になりました。

研究生になって、良かった点

研究生になってから、先生方の授業を受ける機会があったので、日本語能力がだんだん上がりました。それに、専門知識もいっぱい学んで、指導教官からも指導を受けることができて、視野が広くなり、自分の研究テーマについてより深く考えるようになりました。最後に、研究生になってから、研究仲間と交流のチャンスがたくさんあったこともよかったと思います。

将来の夢

外国で中国語を教えること、もしくは、中国の大学で働くこと

研究生になりたい人への一言

準備は万全に！研究生のうちに専門知識をちゃんと勉強しよう！

特定の事項について、特定の教員の指導を受けて研究しようと思っている方には、研究生として入学することもできます。事前に指導を受けようとする教員に出願の了解を得て、入学願書を出してください。出間期間は年に2回（4月入学は2月中旬、10月入学は7月下旬）です。詳しくは、研究科ホームページをご覧ください。

留学案内

STUDY-ABROAD INFORMATION



海外の大学と交換留学協定を結んでいます。

国際文化学研究科は海外の大学と協定を結び、学生の交換を行っています。協定による留学は、私費留学とは異なり、以下のようなメリットがあります。

- (1) 授業料：留学先大学の授業料が免除されます（ただし、神戸大学に規定の授業料を支払わなければなりません）。
- (2) 単位互換：留学先で取得した授業の単位が所定の手続きを経て、本研究科の単位として認定されます。
- (3) 修業年限：留学中も神戸大学に在籍中と見なされるので、前期課程の場合は1年間（または半年）の留学期間を合わせて2年で、後期課程の場合は3年で修了することができます。

(1) の留学先の授業料免除は、当該国の大学制度や物価によりさまざまで、大きなメリットになる場合とならない場合がありますが、一般に欧米の大学は留学生から高額授業料を徴収しており、授業料が免除されることは大きなメリットといえます。(2) 及び (3) は協定による留学ならではの利点です。奨学金は現在のところ日本学生支援機構、環太平洋地域限定の HUMAP、さらに神戸大学独自の渡航費と滞在費の一部を補助する奨学金の3種類があります。

派遣学生の選考は、次の4点を基準に国際交流委員会が筆記試験及び面接で行っています。(1) 語学力 (2) 応募の動機 (3) 人物（外国、異文化での長期生活に耐えられるか）(4) 専門性（留学計画が明確であるか）。なお、英語圏に留学する場合は要求されている TOEFL 又は IELTS のスコアをクリアしなければなりません。



DD プログラムとは

ダブルディグリー・プログラム（DD プログラム）は、本研究科に在学中の大学院生が留学先研究科（現在のところルーヴン大学、ナポリ東洋大学、パリ第7大学）に最低1年間留学し、所定の単位を修得して修士論文を提出することによって、最短2年間で修士の学位を本研究科及び留学先研究科において取得できるプログラムです。

それぞれの研究科で取得した単位の一部は互換され、カリキュラムも連携しています。さらに授業料等についても、本研究科の学生は神戸大学に支払うだけで、留学先研究科では免除されます。





研究科協定校一覧		
ロンドン (SOAS)	イギリス	全学協定
バーミンガム		
マンチェスター		
ケント		
テネシー	アメリカ	全学協定
ピッツバーグ		
ユタ州立		
メリーランド		
ニューヨーク市立大学クイーンズカレッジ	カナダ	全学協定
ヒューロン・ユニバーシティ・カレッジ		
オタワ		
ハンブルク	ドイツ	DD プログラムあり
ベルリン自由		
ライプツィヒ		
ハレ・ヴィッテンベルク		
トゥリーア		全学協定
グラーツ	オーストリア	全学協定
ライデン	オランダ	全学協定
ルーヴェン	ベルギー	DD プログラムあり
サンルイ		
グルノーブル第 3	フランス	
レンヌ第 1		
パリ第 2		全学協定
パリ第 7		全学協定 DD プログラムあり
パリ第 10		全学協定
リール第3		
ニューカレドニア		
ボローニャ	イタリア	全学協定
ボローニャ (フォルリ)		
ヴェネツィア		全学協定
ナポリ東洋		DD プログラムあり
バルセロナ自治	スペイン	
ベルゲン	ノルウェー	
ヘルシンキ	フィンランド	
カレル	チェコ	全学協定
ワルシャワ	ポーランド	
ヤゲヴォ		全学協定
バベシュ・ポヨイ	ルーマニア	
ソフィア	ブルガリア	全学協定
モスクワ教育	ロシア	
西オーストラリア	オーストラリア	全学協定
クイーンズランド		全学協定
カーティン		
武漢	中国	全学協定
上海交通		全学協定
清華		全学協定
華東師範		
中国人民		
浙江		
北京外国語		
香港		
北京師範		
中央民族		
国立台湾	台湾	全学協定
国立政治		
国立ソウル	大韓民国	全学協定
国立釜山		
ベトナム国家 (ホーチミン)	ベトナム	
アテネオ・デ・マニラ	フィリピン	
タマサート	タイ	
ガジャ・マダ	インドネシア	

国際文化学研究推進センター

RESEARCH CENTER FOR PROMOTING INTERCULTURAL STUDIES



本センターは、それまであった異文化研究交流センターとメディア文化研究センターを統合して2014年に設立されたものです。両センターのこれまでの成果と経験を踏まえつつ、時代の要請である地域連携・国際交流及び人文科学・社会科学・自然科学が融合した研究の促進に一層迅速に対応することが、その統合の目的です。

本センターは、研究開発部門、連携事業部門、国際交流部門、重点研究部門の四つの部門から成ります。研究開発部門では、国際文化学にかかわる研究開発、共同研究プロジェクト等の推進に関する業務、ならびに研究プロジェクトの研究成果の発信のための大型シンポジウムの企画・開催に関する業務を行い、連携事業部門では、各種連携協力活動の企画、ならびに自治体および地域団体、外部機関との連携の維持に関する業務を行っています。国際交流部門では、外国の研究機関との連携に伴う研究者の招聘と派遣、協定校からの招聘教員の講演会・特別講義などの企画と開催、外国人研究者の受け入れに関する業務を行っています。そして重点研究部門では、国際文化学研究科が行う研究拠点形成事業に関する業務を行っています。

四部門の総力を挙げて、とりわけ国の内外の研究者と連携した様々な研究プロジェクトの開発と促進、ならびに若手研究員の研究支援に力を入れていきます。そのことにより、時代の求めるより高いレベルのグローバル連携を実現することを目指しています。

活動

研究開発部門 「センター研究プロジェクト」(2015年度)

センター研究プロジェクトは、複数研究者による共同研究として行われる、国際文化学研究の推進に寄与する萌芽的研究を支援することを目的としています。2015年度のプロジェクトは以下の通りです。

- 日本研究の文化資源学
- 日本における社会的排除の分野横断的研究
- 新学術領域「調音意味論」提案のための準備的研究
- リゾーム型コミュニティにおける「文化活動」の機能 -- 日韓仏における事例研究
- 近代「神話学」の発展と「神話」概念拡大の思想的背景の解明
- 女性のアクティベーションとケイパビリティに関する研究 -- 生活困窮予備軍の若年女性の社会的包摂のあり方とその課題
- 「異文化誤解」のメディア表象論
- 環大西洋の思想交流における社会的なものとの葛藤と変容
- 20世紀前半に於ける芸術文化・思想の異文化間の横断に関する日独共同研究
- 災害・環境問題への支援とその課題に関する実践的研究

連携事業部

センターの連携事業部門では、兵庫県国際交流協会のほか、神戸市の外国人支援諸団体、南あわじ人形浄瑠璃座、神戸映画資料館、神戸芸術文化センターと地方自治体、各種団体と地域連携協定を結んでいます。その一環として、ボランティア派遣、インターンシップ、フィールドワークのサポートなど、各種の連携事業を実施しています。



Oxbridge English Summer Camp
(英国 Oxford 大学、Cambridge 大学の海外英語教育実習)

国際交流部門

国際交流部門では、海外との学術交流を推進し、学術協定校から講師を迎えての講演会などを開催しています。2015年度には、下の写真のほか、10回の主催講演会および4回の主催・共催ワークショップを開催しました。



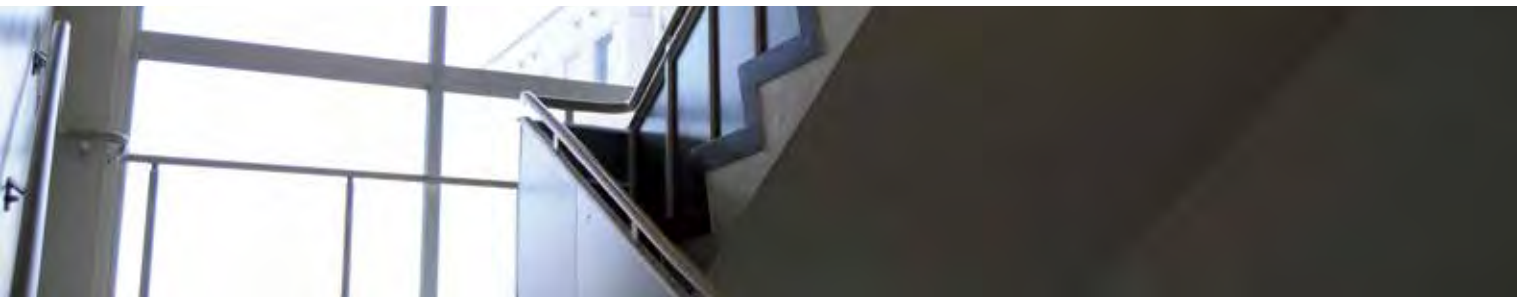
2015年12月のセンター主催講演会「ヨーロッパにおけるジャーナリズムとデジタル・メディア教育の動向」(講師：バベシュ・ボヨイ大学 アンドレア・モゴシュ准教授とラードウ・メーザ講師)。

重点研究部門

重点研究部門では、2016年度から5年間の予定で、「日欧亜におけるコミュニティ再生を目指す移住・多文化・福祉政策の研究拠点形成」にとり組めます。これは、日本学術振興会の研究拠点形成事業に採択され助成を受けた、大型の事業です。

研究サポート

RESEARCH SUPPORT



キャンパス内での院生の生活・研究を強力にサポートします。

空き時間は、ここでくつろぎ、勉強する — 院生研究室 —

国際文化学研究科には、院生専用の研究室が設置され、各研究室にはデスクのほか、書架やロッカーも配置されています。また、院生研究室には数多くのパソコンが配置され、インターネットや電子メールを自由に利用することができます。

自分のペースで研究を進めたい方に — 長期履修学生制度 —

この制度は、職業を有している等の事情により、2年間で博士前期課程修了に必要な単位を修得し修了することが困難な者が、入学時に計画的に2年を超えて単位を修得し修了することを申請し、大学がこれを認めた場合、2年間の授業料で2年を超えて在学できる制度です。

2年間の授業料の合計額を長期履修学生として認められた年数で除した額が年額授業料となります。ただし、在学中に授業料が改定された場合には、改定時から新授業料が適用されます。職業を有している等の事情とは、次のいずれかに該当する者で、標準修業年限内での修学が困難な者です。

- (1) 職業を有し就業している者（自営業および臨時雇用〔単発的なアルバイトを除く。〕を含む。）
- (2) 家事、育児、介護等の事情を有する者
- (3) その他研究科長が相当と認めた者

なお、この制度の利用には、上記の職業を有している等の事情以外に一定の条件があります。申請希望者はあらかじめ担当係に相談してください。



ハラスメントのないキャンパスをめざして — ハラスメント防止委員会 —

大学では、自由で充実したキャンパス・ライフを送ってほしいと思っています。性別、年齢に関係なく、互いを尊重する人間関係を築くことが大切です。とはいえ、人間関係が広がれば、望んでいないような不愉快な言動をされたり、気づかぬうちに相手を傷つけたり、相手から傷つけられたり、ということが起こります。ハラスメントとは、「嫌がらせ」を意味し、就労、就学上の優位な立場を利用して、相手が望まない言動により、精神的、肉体的苦痛を与えることです。性的なことに関連するセクシャル・ハラスメント、教育上のことがらに関連するアカデミック・ハラスメント等々、さまざまな種類があります。

国際文化学研究科には、男性、女性両方の教員からなるハラスメント防止委員会が設置されています。不幸にしてハラスメントを受けてしまった場合、ひとりで悩まないで、早めに委員の教員に相談してください。ひとりで不安であれば、誰かに一緒に行ってもらいましょう。匿名での相談も受け付けています。委員会では、相談者のプライバシー保護に十分配慮していますので、安心して相談に来てください。

コピーカードの支給

授業や研究のために必要なレジュメや資料をコピーできるように、毎年、定額のコピーカードが無料で支給されます。



就職と進学

EMPLOYMENT AND CAREERS

国際文化科学研究科は、創設以来、学界・教育界・ビジネス界に有為な人材を多数輩出しています。修了生はグローバル社会を切り拓くフロントランナーとして多面的に活躍しています。

1. 前期課程修了生の進路概況

2015年度の前期課程修了生 49名のうち 26名が、前期課程修了後研究成果を活かして就職し、社会の第一線で活躍しています。就職者の内訳では、3名が公務員、1名が中学校・高等学校教員、残りが各種団体・企業等で働いています。また、7名が博士後期課程に進学しています。一部帰国後に本国で職につく留学生もいます。



平成27年度(49名修了)

2. 前期課程修了生（旧研究科を含む）の近年の主な就職先実績

高度な語学力と情報処理能力をベースに国際文化学の幅広い専門知識をつけた修了生は、さまざまな業種で活躍しています。公務員としては韓国法務省、パラオ政府芸術文化省、ベトナム政府関連など、海外からの留学生の活躍も目を引きます。教員としては英語、日本語、韓国語など、修了コースの特性を活かした分野で活躍する修了生もいます。

主要就職先

公務員他	【国際機関】
	パラオ政府芸術文化省、韓国法務省、タイ大使館、国連ハピタット（アジア・太平洋地域事務所）、ベトナム政府投資企画庁など
	【国家公務員】
	防衛省・語学職（英語）、大蔵省（現財務省）、国立民族学博物館、京都大学原子炉実験所（技官）、神戸大学職員など
	【地方公務員】
教員	兵庫県人と防災センター、兵庫県警、大阪市役所、西宮市役所、新潟市役所、神戸市芸術センター、兵庫県立芸術文化センター、神奈川県葉山町生活環境部、神戸市役所など
	【その他】
	JICA（国際協力専門員）、青年海外協力隊（エルサルバドル派遣）、関西経済連合会、日本原子力研究開発機構など
運輸	【中学校・高等学校その他】
広告	大阪府、兵庫県、東京都、岡山県、山口県、鹿児島県、福井県、神戸市など
情報	全日空、JTB、川崎汽船、阪急交通社、NEXCO 中日本など
食品	電通、リクルートメディアコミュニケーションズなど
製造	三混紡研 DCS、NEC ソフト、NTT データ、ソフトバンク、日本 IBM インダストリアルソリューション、野村総合研究所、ヤマトシステム開発、住生コンピューターサービス、日立システムエンジニア、メディアフュージョン、ゴールドマン・サックス、NTT 西日本、NEC システムテクノロジー、富士通 FIP、富士通ビー・エス・シー、フジクラなど
マスコミ	JR 西日本フードサービス、カネテツデリカフーズなど
その他	三菱重工業、住友ゴム工業、富士通、ダイハツ工業、NEC、YAMAHA、日本 HP、日立電線、川副機械製作所、シャープ、帝国電気、コスモ石油、バンダイ、コベルコシステム、ニチダイフィルタ、明和、矢崎創業、台湾日立化成工業、博瀬電機貿易（上海）有限会社、帝国電機、中国電信北京支社、JNC など
その他	共同通信、神戸新聞社、産経新聞社、中日新聞社、北日本新聞社、京都新聞社、高知新聞社、MBS ラジオ、高知ケーブルテレビなど
その他	関西フィルハーモニー管弦楽団、関西電力、イオン、横浜銀行、阪急阪神百貨店、三菱東京 UFJ 銀行、ニトリなど



3. 前期課程修了生（旧研究科を含む）の近年の主な進学先実績

本学の大学院博士後期課程をはじめ、他大学の大学院にも多数が進学しています。2015年度の例では、修了生49人中、7名が博士後期課程に進学しています。

主要進学先

神戸大学 国際文化学研究科、人文学研究科、人間発達環境学研究科など

その他国公立大学 京都大学大学院、九州大学大学院、総合研究大学院大学、東京都立大学大学院、神戸市外国語大学大学院など

海外大学・私立大学 シェフィールド大学、ハンプルク大学など

4. 後期課程修了生（旧研究科を含む）の進路概況

大学教員や学芸員などの職についています。2015年度修了生の進路は、実践大学（台湾）専任講師、兵庫県立美術館職員、神戸大学大学院国際文化学研究科学術推進研究員などです。

5. 後期課程修了生（旧研究科を含む）の近年の主な就職実績

海外・国内の大学において、多くの修了者が研究者・教育者として活躍しています。また近年、学位取得後、大学だけではなく企業や研究所に就職する人も増えてきています。

主要就職先

海外大学 天津外国語大学、青島大学日本語学部、浙江大学人文学院、ヤンゴン大学人類学科、中国人民大学外国語学部、台湾国家科学委員会・人文学研究中心研究員、大連外国語学院日本語学院、湖南工業大学外国語学院、中国国立広州中医薬大学、中国内蒙古大学など

国公立大学等 【国立】大阪大学、神戸大学留学生センター、神戸大学百年史編集室、静岡大学、京都大学留学生センター、福井大学教育地域科学部、国立沼津工業高等専門学校教養科など
【公立】島根県立大学看護学部、神戸市外国語大学、兵庫県立総合衛生学院、北九州市立大学基盤教育センターなど

私立大学 大阪工業大学、近畿大学、同志社大学、プール学院大学国際文化学部、広島国際大学、大妻女子短期大学、甲南女子大学、四條畷学園短期大学、花園大学文学部、神戸学院大学経営学部、関西学院大学言語教育研究センター、甲南大学人間科学研究研究所研究員、神戸情報大学院大学、武庫川女子大学、武蔵大学社会学部、環太平洋大学など

学芸員 呉市海事歴史科学館学芸員など

行政・企業 神奈川県警察科学捜査研究所、兵庫留学生会館、イオン、教育開発出版、メディキット、カナフレックスコーポレーション、財団法人安全保障貿易情報センター、国際交流基金、愛知県西尾市教育委員会、アステラス製薬、ファーストリテイリング、三菱銀行（中国・広州）、中国航空工業集団など

充実したキャリア・サポート

国際文化学研究科はキャリア・サポートのコアに教育を据え、それを補強する就職支援活動を強力に、きめこまやかに推進するユニークな研究科を目指しています。

就職支援を担当するキャリアデザインセンター（CDC）は、就職、留学、資格試験、人生設計などに関するキャリア関連図書が閲覧できる独自の部屋を備え、就職ガイダンスや就職活動体験発表会等の就職行事を、学部・研究科単独で開催し、また面接対策、インターンシップなど各種の情報提供をしています。院生一人ひとりの進路選択の相談に応じるなど、全学の就職支援活動と常に連携しながら、充実したサポート体制をとっています。博士後期課程の就職は、今後研究者職から企業・団体等の就職へ拡大していくことが予測され、それへの対応も進めていきます。

全学の研究支援施設・学生寮・奨学金

RESEARCH FACILITIES, DORMITORIES, SCHOLARSHIPS



CALL 室 / ランゲージ・ハブ室

研究科のキャンパスには、国際コミュニケーションセンターが運営する2種類の外国語学習支援施設があります。「CALL (Computer Assisted Language Learning) 室」には、コンピュータを使用した最新の外国語学習システムが整備されており、自分のペースで段階的に学習を進めることが可能です。

「ランゲージ・ハブ室」には、英・独・仏・中・露・韓の各国語を話す留学生が常駐しており、気軽に外国語による会話体験を持つことができます。また、「ランゲージ・ハブ室」では、英語プレゼンテーション・セミナーなど、さまざまな外国語教育プログラムが提供されており、学んだ外国語を実際に使う場が用意されています。これらの充実した施設を活用することで、外国語の実践的運用力の向上が期待できます。英語をはじめとした既修外国語のブラッシュアップはもちろん、ぜひ、新しい外国語の習得にもチャレンジしていただきたいと思います。



学生寮

大学の寮として、男子学生用に「住吉寮」「住吉国際学生宿舎」「国維寮」「白鷗寮」、女子学生用に「女子寮」「住吉国際学生宿舎」「国維寮」「白鷗寮」があります。学生寮の寄宿料は月額4,700円～18,000円(光熱費などは別)です。格安であること、研究科を超えた友人を作りやすいことなどが寮のメリットです。また、「女子寮」を除き、日本人学生と留学生の混住型となっており、国際的な交流が期待できます。

国際文化学図書館

神戸大学には各キャンパスに図書館があります。中央図書館というものはありません。国際文化学部図書館の入口には「総合図書館」と「国際文化学図書館」という2つの看板が掛けられています。総合図書館というのは全学共通教育の学習支援を行うことを目的としており、全学問分野の資料の充実に努めています。国際文化学図書館は、国際文化学部・本研究科の学生・院生向けに、文化交流や各国の文化事情など国際文化学に関わる資料を中心に収集しています。

本図書館では、「学生希望図書」という予算費目があり、本研究科の大学院生は、学術的な図書の購入希望を申請することができます。図書館では、蔵書の貸し出しに加えて以下のサービスが提供されます。複写申し込み、学内の他の図書館からの取寄せ、他大学からの図書貸与やコピーの申し込み、購入希望の受付などです。またこれらのサービスは、図書館まで行かずに、学内のパソコンの画面から依頼することができ、さらに文献やコピーの到着をEメールで案内してくれるので大変便利です。また図書館のホームページで電子ジャーナル検索、データベース検索、新聞記事検索を利用できます。平日は8:45から21:30まで、土曜日は10:00から18:00まで開館しています。



奨学金

日本学生支援機構奨学金と神戸大学独自の奨学金、財団や企業、地方自治体などが支給する奨学金があります。日本学生支援機構の場合、第一種奨学金(無利貸与)と第二種奨学金(有利貸与)があり金額も異なります。

研究会・研究誌の紹介

RESEARCH GROUPS AND JOURNALS



国際文化学研究科には多くの研究会・プロジェクトが組織され、研究科の教育と研究の重要な一翼を担っています。

神戸大学大学院生紀要『国際文化学』

神戸大学国際文化学研究科は、研究科に所属する大学院生の研究を促進することを目的とし、研究成果を広く公開するために、『国際文化学』（大学院生紀要）を刊行しています。

『国際文化学』の前身は、2011年度まで年2回（通算25号）、神戸大学国際文化学会（学術組織）が発行してきた学術雑誌です。この雑誌は、研究科の教育・研究の一翼を担ってきましたが、2012年度より、大学院生の学術研究をサポートし、大学院教育の効果を強化するために、オンラインの大学院生紀要としてリニューアルいたしました。年1回の発行で、投稿資格者は国際文化学研究科の大学院生および編集委員会が認めた者です。

『国際文化学』の編集方針は、前身誌の方針を引き継ぎ、さらに大学院教育の一環としての特徴を備えています。大学院生が論文を投稿すると、指導教員以外から複数の査読委員が選ばれ、その論文の審査にあたります。専門的なコメントが必要な場合は外部の研究者に査読を依頼する事もあります。査読教員は、論文掲載の可否を決定するだけでなく、論文に問題がある場合には、それをどう修正すべきかについて懇切丁寧なコメントを投稿者に返します。論文の修正期間が十分に確保されているので、投稿者は指導教員とも相談しつつ、じっくり論文を書き直すことができます。このような査読―修正―再投稿のプロセスを経て、大学院生は全国学会などに投稿するための学問上の基本的な作法、必要とされる学術水準について学びます。

ホームページ

<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/kernel/seika/cover/ISSN=21872802.html>

『神戸文化人類学研究』

『神戸文化人類学研究』は、2007年に創刊された文化人類学コースが発行する学術雑誌です。これは、2002年に創刊された旧神戸大学社会人類学研究会が発行した学術雑誌『ほぶるす』を前身としたものです。『神戸文化人類学研究』は、学内外2名の研究者による厳正な査読によって学術的水準を維持しています。本誌では、文化人類学を専攻する本研究科所属大学院生の研究成果が主に公表されていますが、近年では他大学の大学院生、研究者も投稿するようになっています。

なお、文化人類学コースでは、本コース所属大学院生を中心とした神戸人類学研究会が組織されています。定期的に行われる本研究会では、学内のみならず学外の研究者も招いて活発な議論が交わされ、その開催数は、2015年9月の段階で71回を数えています。

ホームページ

<http://web.cla.kobe-u.ac.jp/group/kobe-anthro/>

『日本文化論年報』

『日本文化論年報』は、1998年3月、学部および大学院の日本文化論講座（現在は日本学コース）を母体に創刊、年1冊の刊行を続けています。

講座・コースの研究・教育活動の牽引を目的に、教員および大学院生の研究成果、また優れた学部卒業論文などを掲載しています。その他教育活動に関する彙報、卒業生情報などもあります。刊行に際しては、神戸大学山口誓子学術振興基金の補助金を得ています。

ホームページ

<http://web.cla.kobe-u.ac.jp/staff/gakunone/home/nenpou.html>



論文題目

THESIS TITLES



国際文化学研究科 論文題目（平成 26 年度提出分）

※（D）博士論文 （M）修士論文 （MC）修了研究レポート

【日本学コース】

- (M) 日本社会と銭湯文化 ～近世・近現代を中心に～
- (MC) 三島流兵法書から見る村上水軍の「軍案」
- (MC) 「今昔物語」の楊貴妃説話の典拠をめぐって

【アジア・太平洋文化論コース】

- (D) 中国の農村学校教育政策の展開と農村学校教員
―教育現場における知恵と葛藤―
- (D) 清代外モンゴルにおける牧地紛争の研究
―中部二盟の境界画定の経緯からみた盟旗制度―
- (M) 民国期の山西省における地方自治と日本の影響
―閻錫山による村治の再検討―
- (M) 1930 年代のインドネシアにおける「文化論争」の研究
―歴史の連続性と西洋化の討論をめぐって―
- (M) 脱北者に見る韓国の「シビック・ナショナリズム」
―「同胞」から「外国人」へ―

【ヨーロッパ・アメリカ文化論コース】

- (M) 世紀転換期における米国の門戸開放とモルガンの金融帝国主義
―粵漢鉄道敷設権を巡る動向から考える―
- (M) ヴィクトリア朝初期イングランドにおける「現実」の形成と遊びの戦略
―唯一例としてのパンチ&ジュディ―
- (M) 終わりのなき物語から生まれた6つの伝説が創造する世界
―エンデ作『はてしない物語』と『ファンタジーの伝説』シリーズにおけるファンタジー世界の様相―
- (MC) イヴ・サンローランの La Vilaine Lulu について
- (MC) ふたりの蝶々さん
―小説『蝶々夫人』とオペラ『蝶々夫人』にみられる蝶々さんのパーソナリティー―
- (MC) ベックフォードとジーキルの庭園にみるイギリスの庭園の変遷

【文化人類学コース】

- (M) 在日コリアンの国籍の認識変化
―1990 年代以降―
- (M) 日韓社会における在日コリアンのイメージ
―戦後イメージ原型の形成過程を中心に―
- (M) 在日華僑華人社会の同業団体についての考察
―神戸地域の華僑華人料理同業団体の事例を中心に―

【比較文明・比較文化論コース】

- (D) 生野銀山お雇い外国人ジャン・フランソワ・コワニエと日仏交流

【国際関係・比較政治論コース】

- (MC) 大イスラエル主義の視点から見たイスラエルの占領地域政策の変遷
―第3次中東戦争からオスロ・プロセスまで―
- (MC) EUにおけるフレキシビリティ概念の確立
―欧州憲法条約否決以後の「社会的ヨーロッパ」への刷新―
- (MC) 台湾独立問題の社会構成主義的分析：
自由主義的分析および現実主義的分析との比較から

【モダニティ論コース】

- (M) 理解社会学の展開
―ウェーバー・シュッツ・エスノメソドロジー―
- (MC) H・アーレントの「赦し」と「赦されざるもの」

【先端社会論コース】

- (M) ドゥーリアのチェーンをつなぐために
―「ケア」／労働の分断再考―
- (M) 日本における外国人技能実習制度の現在
―中国人技能実習生の調査を踏まえて―
- (M) 代理出産の「資格」
―現存するモデルを比較しながら―
- (M) 家族が関与するインフォームド・コンセント
―中国型 IC と日本型 IC からみる―
- (MC) ケイバビリティ・アプローチは格差原理を超えるか？

【芸術文化論コース】

- (D) 厚生音楽運動の研究
―アジア・太平洋戦争期における音楽文化の一側面―
- (M) 日本のバラエティ番組の構造と機能について
- (MC) ナチズムとマイセン磁器―忘れられた12年の活動と記録―
- (MC) 地域主導型アートプロジェクトをめぐる意義と課題
―西宮船坂ビエルナーレの事例をもとに―

- (MC) フランスにおける香水文化とその発展について
―ブランドイメージの形成と香水の果たす象徴的役割についての一考察―
- (MC) オーケストラの開発途上国派遣を通じた教育的効果について
- (MC) こどもの社会参画を育む仮想のまちづくり
―「こどものまち」の日独比較から―
- (MC) ソヴィエト・ロックの本質
―ソ連の若者は何を歌っていたのか？―

【言語コミュニケーション論コース】

- (M) 日本語における「相づち」と「うなずき」の語用論的役割について
―中国人日本語学習者への日本語教育との関連で―
- (M) 中国人日本語学習者の知覚表現に関わる日本語のオノマトペの使用について
- (M) 日中同形異義語の習得に関する考察
―『新編日語』の分析及び教え方を中心に―
- (MC) 格助詞とタイ語の前置詞に関する研究
―起点・場所・着点を中心に―

【感性コミュニケーション論コース】

- (M) ワーキングメモリが注意制御に及ぼす影響
―行動実験と脳機能計測による検討―
- (M) The Identification of Consonants in Coda Position by Japanese Speakers and Chinese Speakers
- (M) 面子に関する感情と対処の中日比較
- (M) The Comparative Study on Facial Expressions and Display Rules between the Thai and the Japanese, with a Focus on Smile

【情報コミュニケーション論コース】

- (M) ビート・トラッキングに基づく楽曲のリズムの検出システムの構築と分析に関する研究
- (M) バイオフィードバックによる学習効率を向上させる方法に関する研究
- (M) ゲームフィクションを用いた食事バランス支援システム
- (M) 車両混雑情報の有無による電車待ち乗客の行動変化に関する研究
- (M) 相手に不快感を与えないように会話を回避するアプリケーションの実装及び運用
- (M) Difference on Visual Related Programming Understanding between Designers and Programmers by Using a Programmed Contents Comparison Method
- (M) Kinect を用いた英単語リスニング学習支援システムの構築に関する研究

【外国語教育システム論コース】

- (M) The effects of retelling on Japanese EFL's text comprehension : Through the analysis of retelling protocol
- (M) Variability of the parsing process in relative clause sentence comprehension for Japanese EFL learners : A maze task study
- (MC) Time-course effects of vowel epenthesis on novel word learning and the establishment of lexical representation
- (MC) The Effects of Pre-Task Planning and Proficiency Level on Fluency, Accuracy, and Complexity of EFL Learners' Oral narrative Task Performance

【外国語教育コンテンツ論コース】

- (M) 学習者のナ・ラ行音混同のパターンと発音指導について
―中国重慶方言話者を対象として―
- (MC) コーパスを用いた英語前置詞の用法解明と教育システムの開発
―英語教育への新しいアプローチ―
- (MC) 中国人日本語学習者の「ーじゃない（か）」の表現意図とイントネーション



国際文化学研究科 論文題目（平成 27 年度提出分）

※ (D) 博士論文 (M) 修士論文 (MC) 修了研究レポート

【日本学コース】

- (D) 近世藩儒の研究
—18 世紀龍野藩の事例を中心として—
- (MC) 池坊専好（三代）『生花巻』相伝について
—池坊総務所蔵『生花之次第』（原本・翻刻）—

【アジア・太平洋文化論コース】

- (M) インドネシアにおけるコミュニティ学習センター（PKBM）の展開
—バンドン市の事例を中心として—
- (M) マオリであろうとする日常実践
- (M) 台湾原住民族と多文化主義政策
—宜蘭県「タイヤル族南湖大山部落学校」の民族教育を事例に—
- (M) ハルビンの都市景観保護運動
—曾一智を中心に—
- (MC) 雑居地と「喫茶店」 — 神戸「放香堂」の誕生とその意義についての考察
- (MC) 中国における民族教育政策とその現実
—街津口ホジェン族郷中心学校を事例として—
- (MC) 中国残留日本人の故郷アイデンティティについて
—「方正友好交流の会」を中心とする

【ヨーロッパ・アメリカ文化論コース】

- (D) 熟議民主主義的实践における知識人の役割とコミュニティ自治—「ウイスコンシン・アイディア」から総動員体制へいたるコミュニティ組織化の思想史（1901-1919）
- (D) シチュエーション・コメディにおけるギャグの生成と機能
—「I Love Lucy」のテキスト分析—
- (M) MuBe とは何か —意味の変遷を中心に—
- (MC) イラク戦争におけるトルコとアメリカの同盟関係
—トルコの政策決定を中心に—
- (MC) 対中外交政策の変容およびそれに影響をおよぼす要素に関する一考察
—クリントン政権下のアメリカ外交を中心に—
- (MC) 進化から見るカフカのアイデンティティ

【文化人類学コース】

- (D) 「難民」から「マイノリティ」へ
—神戸・長田のベトナム系移住者の労働をめぐる民族誌—
- (M) カミサマがオロソカになるとき：新潟県佐渡島の村落における信仰状況の変遷
- (MC) 現代社会における少数民族の標準語の窮状
—中国チワン語標準語の普及状況を事例として—
- (MC) 在日中国人留学生における異文化適応
—食を中心に—
- (MC) The Japanese identity through modernity and self-orientalism. The reflection of Italian postwar movies into the Japanese self-perception

【比較文明・比較文化論コース】

- (MC) 日本における『聊齋志異』の翻訳と翻案—「竹青」を中心に

【国際関係・比較政治論コース】

- (D) 現代インドのコミュニティ・ポリシング活動による暴動予防に関する研究
- (M) ボスニアの民族間における和解
—EU 加盟基準が及ぼす影響とその効果—
- (M) 地域間協力を通じた能力構築
—EU-AU 間の安全保障協力を事例に—
- (M) 日本における外国人受け入れ体制整備の政治過程
—政策形成の進行とその阻害要因の分析—
- (MC) 日本における外国人支援に関する考察—大分県での実践から—
- (MC) フランスにおける移民と共和的価値の排外性—公民教育再興に働く政治力学を焦点に—
- (MC) The Futenma Relocation problem in the U.S. - Japan military alliance

【モダニティ論コース】

- (M) H・アーレントの現象学的決断主義—複数性概念の再考
- (M) 自由とその制度化—ハンナ・アーレントの行為論
- (M) W・ベンヤミン『セントラルパーク』における神話理論
—永遠帰郷とアレゴリーとの関係について—

【先端社会論コース】

- (M) Can "Street Dance" Speak (by Dancing) ? :
A Study of the Policing of Street Dance Scenes in Taiwan

【芸術文化論コース】

- (M) 日独「複合文化施設」の多様性
—エルプフィルハーモニーのランドマーク性を発端として—
- (M) 市民吹奏楽団の持続可能な組織運営
- (M) 戦後美術においてマリリン・モンローが持つ意味とその広がりに
- (M) シャルル・フレデリック・ウォルトー パリ・モードの近代化 —
- (MC) ベルリンにおける公立劇場の研究—フォルクスビューネの特質を中心に
- (MC) 日本における精神障害者に対するスティグマ—日本文学・芸術作品を通じた文化史的観点からの研究—

【言語コミュニケーションコース】

- (D) 重訳の再評価の試み—ベトナムにおける日本文学の重訳を中心に—
- (D) 日本における中国新時期小説の翻訳とその展開
—形づくられた中国の文化的イメージ—
- (M) 日本におけるイラン映画の翻訳についての研究 — テキストとパラテキストの分析
- (M) ネイティブ教師と非ネイティブ教師の役割
—在日留学生のビリーフ調査—
- (M) 算数教科支援を通じた日本語指導の効果
—中国語を母語とする児童を対象とした事例研究—
- (M) 中国人日本語学習者に対する無助詞表現の指導法の検討—教科書分析を中心にして—
- (M) 翻訳作品に見られる中国語可能表現に対応する日本語表現
—中国人日本語学習者に対する可能表現の効果的な指導法を目的として—
- (MC) 外国人児童のためのオノマトヘ教材開発に向けて—国語を中心とした教科学習への橋渡しを目指して—
- (MC) 実態調査から見る外国人児童生徒に対する学習支援の現状と課題
- (MC) 日本語学校の学習者と教師が考える「優れた」日本語教師の行動特性

【感性コミュニケーションコース】

- (D) 「重複」の文法的研究
- (D) タイ人の怒り感情の文化的感情規則と表示規則
- (M) ロシア人の表情と表示規則への異文化経験の影響 —スマイルを中心に—
- (M) 電話ボタンとしてのつかえの認定と話し手の能力
- (MC) 非対称情報場面における交渉の実験的研究
—メディア効果の検討—

【情報コミュニケーションコース】

- (D) 日本語学習者の文法的誤用文検出に関する研究
- (D) 産学連携における ICT 利用の検討
- (M) 教育的に重要な -ly 副詞の特定
—コーパス準拠型アプローチ—
- (M) メンバーの性格タイプがチームのパフォーマンスに及ぼす影響に関する研究
- (M) 視線計測を利用した動画視聴支援システムの試作と評価実験
- (M) 同伴による情報推薦のための属性値推定手法の提案
- (M) 分類システムによる多目的問題の解法に関する検討
- (MC) 遺伝的アルゴリズムを用いたプロジェクトの幾何補正の検討

【外国語教育システム論コース】

- (D) The role of exposure to syntactic structures and discourse-driven syntactic processing in Japanese EFL learners' text comprehension
(日本人英語学習者の文章理解における統語構造への繰り返し接触とディスコース駆動型統語処理の役割)
- (M) A Study of English Loanwords in Korean and Japanese
- (MC) Assessment of Digital Game-based Learning for Grammatical Encoding and Linearization Process of Word Order

【外国語教育コンテンツ論コース】

- (D) 現代日本語漢語サ変動詞の構造と用法—コーパス研究の日本語教育への応用—
- (M) 中国人日本語学習者による日本語複合動詞使用の状況
—「合う」型複合動詞を中心に—
- (MC) 中国人日本語学習者の日本語フォーカス発話と中立発話の韻律的特徴

国際文化学研究科教員一覧

ACADEMIC STAFF



コース	氏名	職名	メールアドレス
日本学	板倉 史明	准教授	itakura ■ people.kobe-u.ac.jp
日本学	長 志珠絵	教授	s.osa ■ people.kobe-u.ac.jp
日本学	昆野 伸幸	准教授	nobuyuki ■ port.kobe-u.ac.jp
日本学	寺内 直子	教授	naokotk ■ kobe-u.ac.jp
アジア・太平洋文化論	伊藤 友美	准教授	itot ■ kobe-u.ac.jp
アジア・太平洋文化論	王 柯	教授	wkouka ■ silver.kobe-u.ac.jp
アジア・太平洋文化論	窪田 幸子	教授	kubotas ■ people.kobe-u.ac.jp
アジア・太平洋文化論	貞好 康志	教授	ysd ■ kobe-u.ac.jp
アジア・太平洋文化論	谷川 真一	准教授	tanigawa ■ port.kobe-u.ac.jp
アジア・太平洋文化論	萩原 守	教授	hagihara ■ kobe-u.ac.jp
ヨーロッパ・アメリカ文化論	青島 陽子	講師	yaoshima ■ dolphin.kobe-u.ac.jp
ヨーロッパ・アメリカ文化論	石塚 裕子	教授	ishizuka ■ kobe-u.ac.jp
ヨーロッパ・アメリカ文化論	井上 弘貴	准教授	hiro_inouye ■ port.kobe-u.ac.jp
ヨーロッパ・アメリカ文化論	小澤 卓也	准教授	ozataku ■ harbor.kobe-u.ac.jp
ヨーロッパ・アメリカ文化論	坂本 千代	教授	csakamot ■ kobe-u.ac.jp
ヨーロッパ・アメリカ文化論	西谷 拓哉	教授	takuyan ■ kobe-u.ac.jp
ヨーロッパ・アメリカ文化論	野谷 啓二	教授	notani ■ kobe-u.ac.jp
文化人類学	梅屋 潔	教授	umeya ■ people.kobe-u.ac.jp
文化人類学	岡田 浩樹	教授	hokada ■ kobe-u.ac.jp
文化人類学	齋藤 剛	准教授	t-saito ■ people.kobe-u.ac.jp
文化人類学	柴田 佳子	教授	yoshibat ■ kobe-u.ac.jp
比較文明・比較文化論	北村 結花	准教授	yuika ■ kobe-u.ac.jp
比較文明・比較文化論	塚原 東吾	教授	saltypenguin ■ whale.kobe-u.ac.jp
比較文明・比較文化論	遠田 勝	教授	mtoda ■ kobe-u.ac.jp
比較文明・比較文化論	山澤 孝至	准教授	yamasawa ■ kobe-u.ac.jp
国際関係・比較政治論	近藤 正基	准教授	kondo ■ port.kobe-u.ac.jp
国際関係・比較政治論	坂井 一成	教授	kazu ■ harbor.kobe-u.ac.jp
国際関係・比較政治論	阪野 智一	教授	sakano ■ kobe-u.ac.jp
国際関係・比較政治論	中村 覚	准教授	satnaka ■ kobe-u.ac.jp
国際関係・比較政治論	安岡 正晴	准教授	yasuoka ■ kobe-u.ac.jp
モダニティ論	石田 圭子	准教授	keikoishida ■ people.kobe-u.ac.jp
モダニティ論	市田 良彦	教授	ucml ■ kobe-u.ac.jp
モダニティ論	上野 成利	教授	ueno ■ people.kobe-u.ac.jp
モダニティ論	廳 茂	教授	skc ■ kobe-u.ac.jp
モダニティ論	松家 理恵	教授	janjur ■ kobe-u.ac.jp
先端社会論	青山 薫	教授	kaoru ■ tiger.kobe-u.ac.jp
先端社会論	小笠原博毅	教授	hiroki ■ kobe-u.ac.jp
先端社会論	桜井 徹	教授	sakurait ■ kobe-u.ac.jp
先端社会論	西澤 晃彦	教授	nishizawa ■ people.kobe-u.ac.jp
先端社会論	山崎 康仕	教授	yy ■ people.kobe-u.ac.jp



コース	氏名	職名	メールアドレス
芸術文化論	朝倉 三枝	准教授	asakura ■ port.kobe-u.ac.jp
芸術文化論	池上 裕子	准教授	ikegami ■ port.kobe-u.ac.jp
芸術文化論	岩本 和子	教授	iwamotok ■ kobe-u.ac.jp
芸術文化論	藤野 一夫	教授	fujino ■ kobe-u.ac.jp
芸術文化論	吉田 典子	教授	ynoriko ■ kobe-u.ac.jp
言語コミュニケーション	川上 尚恵	国際連携推進機構講師	kawakami ■ sapphire.kobe-u.ac.jp
言語コミュニケーション	齊藤 美穂	国際連携推進機構准教授	msaito ■ people.kobe-u.ac.jp
言語コミュニケーション	田中 順子	教授	jtanaka ■ kobe-u.ac.jp
言語コミュニケーション	朴 秀娟	国際連携推進機構講師	sypark ■ aquamarine.kobe-u.ac.jp
言語コミュニケーション	藤濤 文子	教授	fumiko ■ kobe-u.ac.jp
言語コミュニケーション	湯浅 英男	教授	yuasah ■ kobe-u.ac.jp
言語コミュニケーション	米本 弘一	教授	yonemoto ■ kobe-u.ac.jp
感性コミュニケーション	定延 利之	教授	sadanobu ■ kobe-u.ac.jp
感性コミュニケーション	林 良子	教授	rhayashi ■ kobe-u.ac.jp
感性コミュニケーション	米谷 淳	大学教育推進機構教授	maiya ■ kobe-u.ac.jp
感性コミュニケーション	松本絵理子	教授	ermatsu ■ kobe-u.ac.jp
感性コミュニケーション	水口志乃扶	教授	mizuguti ■ kobe-u.ac.jp
感性コミュニケーション	山本 真也	准教授	shinyayamamoto1981 ■ panda.kobe-u.ac.jp
情報コミュニケーション	大月 一弘	教授	ohtsuki ■ kobe-u.ac.jp
情報コミュニケーション	康 敏	教授	kang ■ kobe-u.ac.jp
情報コミュニケーション	清光 英成	准教授	kiyomitu ■ kobe-u.ac.jp
情報コミュニケーション	西田 健志	准教授	tnishida ■ people.kobe-u.ac.jp
情報コミュニケーション	村尾 元	教授	murao ■ i.cla.kobe-u.ac.jp
情報コミュニケーション	森下 淳也	教授	morishita ■ person.kobe-u.ac.jp
外国語教育システム論	加藤 雅之	大学教育推進機構教授	masakato ■ kobe-u.ac.jp
外国語教育システム論	高橋 康德	大学教育推進機構講師	ytakahashi ■ port.kobe-u.ac.jp
外国語教育システム論	島津 厚久	大学教育推進機構教授	shimazu ■ puppy.kobe-u.ac.jp
外国語教育システム論	廣田 大地	大学教育推進機構准教授	hirotadaichi ■ ruby.kobe-u.ac.jp
外国語教育システム論	福岡 麻子	大学教育推進機構准教授	asakofukuoka ■ silver.kobe-u.ac.jp
外国語教育システム論	横川 博一	大学教育推進機構教授	yokokawa ■ kobe-u.ac.jp
外国語教育コンテンツ論	石川慎一郎	大学教育推進機構教授	iskwshin ■ kobe-u.ac.jp
外国語教育コンテンツ論	柏木 治美	大学教育推進機構教授	kasiwagi ■ kobe-u.ac.jp
外国語教育コンテンツ論	木原恵美子	大学教育推進機構准教授	emiwamoto ■ aquamarine.kobe-u.ac.jp
外国語教育コンテンツ論	グリア・ティモシー	大学教育推進機構教授	tim ■ kobe-u.ac.jp
外国語教育コンテンツ論	朱 春躍	大学教育推進機構教授	shu_s_y ■ koala.kobe-u.ac.jp
外国語教育コンテンツ論	西出 佳代	大学教育推進機構講師	knishide ■ kobe-u.ac.jp
外国語教育コンテンツ論	大和 知史	大学教育推進機構教授	yamato ■ port.kobe-u.ac.jp
先端コミュニケーション論	内海 章	客員教授	utsumi ■ atr.jp
先端コミュニケーション論	住岡 英信	客員准教授	sumioka ■ atr.jp
先端コミュニケーション論	山田 玲子	客員教授	yamada ■ atr.jp

教員アドレスについては、■を@に置き換えてご利用ください。

INVITATION TO THE GRADUATE SCHOOL OF INTERCULTURAL STUDIES



About the Graduate School of Intercultural Studies

Dean's Message

The Graduate School of Intercultural Studies at Kobe University was established in 2007 from what was formerly the Graduate School of Cultural Studies and Human Science. Since the graduate school shares its name with the Faculty of Intercultural Studies, which was established in October 1992, it allows students to learn and research systematically from the undergraduate to the graduate level.

People and culture have continued to blend together as a result of the spread of globalization following the collapse of the Cold War system. We ask ourselves how we should understand changes in a globally developing society and what we should make of the significance of those changes. We want to know about changes in phenomena but at the same time ask broad questions about the frameworks through which we view those changes. Above all, there is a pressing need to reconsider thought patterns and recognition based on the nation-state paradigm. Put another way, we should strive to redefine the paradigms of the humanities and social sciences.

The education and research in our graduate school adopts a cultural perspective to explore transformations and continuities in the contemporary world. Intercultural Studies is not a single discipline. It is a new research area that approaches the common theme of how various cultures exist and relate to each other across a number of different disciplines. The 15 courses that make up our graduate school show that providing viewpoints from various disciplines subjectively promotes that very theme.

Our graduate school was the first national university in Japan to advocate intercultural studies. It focuses on cultural standpoints while critically examining the effectiveness of such frameworks and strives to break through to leading-edge research fields and analytical methods.

The door is open for you to develop new frameworks for knowledge. We sincerely hope to work together in this endeavor with intelligent, inquisitive young researchers like you.



Professor Kazuhiro OHTSUKI
Dean of the Graduate School
of Intercultural Studies

Our Goals and Principles

The philosophy of the Graduate School of Intercultural Studies is to cultivate advanced fields of cultural studies, with an eye towards intercultural coexistence, and to construct new paradigms for understanding human culture. To this end, we have formulated the following five research aims:

- (1) Pursuit of cultural research that understands culture as a complex entity and takes intercultural relations as its perspective.
- (2) Dynamic research into culture as a complex entity with attention to intercultural interaction in such forms as conflict, fusion, and interchange.
- (3) Multifaceted studies of cultural transformations amid the globalization of contemporary society.
- (4) Development of advanced communication research related to language and information.
- (5) Execution of a shift from monocular, single paradigms that apply over-simplistic dichotomies such as central / peripheral, civilized / uncivilized, and advanced / backward to pluralistic, multiplex paradigms, and the creation of research methodologies adapted to the cultural dynamics of contemporary society.

Admission Policy, Diploma Policy

	Admission Policy	Diploma Policy
Master's Program	<p>The objective of the Kobe University Graduate School of Intercultural Studies is to nurture individuals who have deep intercultural understanding and flexible communication skills, as well as profound scholarship and creative research skills.</p> <p>In view of this educational goal, the Graduate School seeks students who have the following characteristics.</p>	<p>The objective of the Kobe University Graduate School of Intercultural Studies is to nurture individuals who have deep intercultural understanding and flexible communication skills, as well as profound scholarship and creative research skills.</p> <p>In view of this human resource development goal and the four objectives prescribed in the university-wide degree conferral policy, the graduate school awards degrees to students who have successfully completed the curriculum in line with the following two policies.</p> <p>Students shall study at the Graduate School of Intercultural Studies for two years in principle, earn the credits required for completion, and pass a review of the master's thesis or research report.</p> <p>Students of the Graduate School of Intercultural Studies are encouraged to achieve the following learning goals by the completion of the program.</p>
	<ul style="list-style-type: none"> •Have a keen interest in understanding culture as a complex entity and pursuing multifaceted studies of intercultural correlation. Have the fundamental capabilities required to achieve this. 	<ul style="list-style-type: none"> •Understand culture as a complex entity and pursue multifaceted studies of intercultural correlation.
	<ul style="list-style-type: none"> •Have a keen interest in understanding the dynamics of language and information communication and addressing various problems confronting the contemporary global society. Have the fundamental capabilities required to achieve this. 	<ul style="list-style-type: none"> •Understand the dynamics of language and information communication and address various problems confronting the contemporary global society.
	<ul style="list-style-type: none"> •Have a keen interest in carrying out interdisciplinary research based on high standards of expertise. Have the fundamental capabilities required to achieve this. 	<ul style="list-style-type: none"> •Carry out interdisciplinary research based on high standards of expertise.
Doctoral Program	<p>The objective of the Kobe University Graduate School of Intercultural Studies is to nurture individuals who have deep intercultural understanding and flexible communication skills, as well as profound scholarship and creative research skills.</p> <p>In view of this educational goal, the Graduate School seeks students who have the following characteristics.</p>	<p>The objective of the Kobe University Graduate School of Intercultural Studies is to nurture individuals who have deep intercultural understanding and flexible communication skills, as well as profound scholarship and creative research skills.</p> <p>In view of this human resource development goal and the four objectives prescribed in the university-wide degree conferral policy, the graduate school awards degrees to students who have successfully completed the curriculum in line with the following two policies.</p> <p>Students shall study at the Graduate School of Intercultural Studies for three years in principle, earn the credits required for completion, and pass the doctoral degree review.</p> <p>Students of the Graduate School of Intercultural Studies are encouraged to achieve the following learning goals by the completion of the program.</p>
	<ul style="list-style-type: none"> •Have a keen interest in clarifying the structure and dynamics of culture as a complex entity and proactively exploring an advanced field of cultural research. Have the fundamental capabilities to achieve this. 	<ul style="list-style-type: none"> •Clarify the structure and dynamics of culture as a complex entity and proactively explore an advanced field of cultural research.
	<ul style="list-style-type: none"> •Have a keen interest in pursuing various language and information communication issues and conducting multifaceted studies on the increasingly globalized contemporary world. Have the fundamental capabilities to achieve this. 	<ul style="list-style-type: none"> •Pursue various language and information communication issues and conduct multifaceted studies on the increasingly globalized contemporary world.
	<ul style="list-style-type: none"> •Have a keen interest in carrying out cross-disciplinary research based on superior expertise. Have the fundamental capabilities to achieve this. 	<ul style="list-style-type: none"> •Carry out cross-disciplinary research based on superior expertise.

Organization of the Graduate School of Intercultural Studies

15 specialized courses for interacting with society and living in the world

Departments and Divisions

When comparing the nature of cultures in modern society to address modern issues such as cultural confrontation and conflicts, it is essential to develop the ability to examine cultural trends in an increasingly globalized world. To do this we have to examine both the cultures of different regions and cross-cultural interaction.

Accordingly, the Graduate School of Intercultural Studies has two departments – *Cultural Interaction*, for multifaceted commentary on the nature of intercultural interaction based on the results of cultural research in different regions, and *Culture and Globalization* to investigate the contemporary cultural phase generated by globalization.

Consisting of the Area Studies Division for interdisciplinary studies regarding region-specific cultural traits and cultural metamorphosis, and the Intercultural Communication Division for multifaceted research on the reality of cross-cultural contacts, conflicts and interactions, the Cultural-Interaction Department aims for (1) understanding of cultures of different regions, (2) understanding of cross-cultural relations and interactions, and (3)

development of cross-cultural communication abilities.

The Culture and Globalization Department consists of the Contemporary Culture and Society Division for comprehensive research into contemporary social and cultural circumstances amid the erosion of modern Western principles accompanying globalization, the Human Communication and Information Science Division for investigation of issues involving verbal and non-verbal communication and use of diverse information media, and the Second Language Education Division for advanced research concerning second language education and production of outstanding practitioners in this field. In addition, there is also a joint research group for Advanced Communication in the Doctoral Course in cooperation with the Advanced Telecommunications Research Institute International (ATR). With these divisions and courses, we aim to (1) investigate acculturation brought about by globalization and the establishment of new public culture, (2) develop advanced global communication, and (3) research foreign language education for the global era.

Department	Division	Course
Cultural Interaction Multifaceted elucidation of the nature and attributes of intercultural interaction based on the results of cultural research in different regions	Area Studies Interdisciplinary studies regarding region-specific cultural traits and cultural metamorphosis	Japanology Asia-Pacific Culture Studies European and American Culture Studies
	Intercultural Communication Diverse exploration of the actual status of intercultural contact, confrontation, and interchange	Cultural Anthropology Comparative Studies of Civilization and Culture International Relations and Comparative Politics
	Contemporary Culture and Society Comprehensive research into contemporary social and cultural circumstances amid the erosion of modern Western principles accompanying globalization	Modernity Studies Contemporary Social Issues Art, Culture and Society Studies
	Human Communication and Information Science Investigation of issues involving verbal and non-verbal communication and use of diverse information media	Linguistics and Communication Studies Human Communication Computers and Communication
Culture and Globalization Elucidation of the contemporary cultural phase generated by globalization	Second Language Education Advanced research concerning second language education and production of outstanding practitioners in this field	Systems of Second Language Education Contents in Second Language Education
	Joint Research Group (Doctoral Program)	Advanced Communication

Master's Program – Two Learning Tracks to Suit Your Aspirations

Develops people who can work in an international society and new researchers to lead the era

– Different styles for different goals from start to finish

	Career Enhancement Track	Researcher Track
Entrance Exam (General Admission, Special Selection for Adult Applicants, and Special Selection for Foreign Students)	1. Test of basic subjects You must choose one of the following subjects; a foreign language, classical Japanese literature, computer science, or (for non-Japanese applicants only) Japanese. However, the subjects you can choose from also depend on the course to which you are applying, so make sure to check the application guidebook for further details. 2. Test of major subject 3. Oral examination	
Curriculum	<ul style="list-style-type: none"> Seminars to develop high-level skills in foreign language, information handling and presentation Students mainly take Special Lectures, which are given to a small group in an interactive manner rather than a one-way lecture. Students who have earned the required credits and submitted a research report can obtain master's degree. 	<ul style="list-style-type: none"> Tutors provide quality individual guidance (tutorial). Students mainly take Advanced Expertise Seminars to build basic skills required for a researcher. Students may take Special Seminars in the doctoral program. Students shall submit a master's thesis or master's folio (a combination of achievements).
Future career	Students will obtain master's degree and work in international fields as specialists.	The Researcher Track is for students who intend to take the entrance exam to the doctoral program and proceed to the program. Students will become researchers or high-level specialists..

Two Educational Tracks

The program has a Career Enhancement Track and a Researcher Track. Applicants by General Admission and Special Selection for Adult Applicants should select one of these two tracks when applying for admission. Applicants by Special Selection for Foreign Students will have the opportunity to select one after enrollment.

Career Enhancement Track

This track caters to students who intend to enter the workforce after completing the master's program. By acquiring broad expertise and practical applied skills, students seek to develop their career to a higher level. Students can earn the master's degree by acquiring the requisite credits in courses centered on special lectures and by submitting a master's research report appropriate for their career design.

Researcher Track

This track caters to students who intend to continue on to and enter the doctoral program. The track offers a curriculum designed to develop researchers and high-level specialists. To complete the track, students are required to take requisite credits in courses centered on advanced expertise seminars and to submit a master's thesis or a master's folio.

Academic Skill Seminars

The objective of the seminars is to effectively learn methods and techniques and acquire other academic skills required for research in various fields.

- IT Skills Development
- Academic Communication (English)
- Academic Writing (English)
- Academic Writing (Japanese)
- Social Research Methods
- Field Research
- Statistics and Quantitative Analysis Methods

Master's Folio

The master's folio is comprised of multiple research products that are loosely tied to a single theme, and which can be submitted in place of a master's thesis. As a master's folio does not have to be in the form of a single thesis, many diverse research products that would previously not have been accepted as a master's thesis – compositions, research reports, – are accepted as part of a folio. This makes it easier to conduct applied research that is relevant to one's work or workplace, and because the work is divided up and presented on numerous occasions, it also allows for systematic writing and research.

Doctoral Program – Developing Independent Researchers

For deeper study in a research field

– flexible support to obtain a PhD in three years

	Coursework Program
Research theme	Theme suited for the research field of the course
Research style	Individual research
Research guidance	The whole teaching staff, especially the advisor, provides support.
Process to obtain PhD	<p><1st year> Present a concept in a joint seminar of the course, publish an academic article and submit a basic doctoral thesis.</p> <p><2nd year> Publish an academic article, make a presentation at a conference and submit a preliminary doctoral thesis.</p> <p><3rd year> Submit part of a thesis draft to a joint seminar of the course once a month and receive guidance and support from the whole teaching staff. Submit a doctoral thesis.</p>
Expected achievements	Achievements of academic research where free thinking and creativity of individuals are tapped to the maximum

Career and Professional Development

– Career Paths to the World

Master's Program

Cultural Interaction Department

- As a specialist

- Specialist at an international organization such as the United Nations or JICA
- Official of various public and private organizations that plan introductions to Japanese culture and exchanges
- Cultural planner at a museum
- Junior/senior high school teacher (English) with a high level of expertise
- Planner for the cultural exchange programs of a local government unit or company
- Person in charge of training in a foreign-affiliated company or joint venture
- Leader of a regional NPO taking the lead in cultural activities and cross-cultural understanding

- As business professional with the ability to take practical actions

- Employee at a foreign-affiliated company or joint venture
- Employee at a trading company or other type of company
- Personnel for overseas expansion of a Japanese company

Culture and Globalization Department

- As a specialist

- Cultural policy specialist or art manager with knowledge of music, fine arts and other types of arts
- Journalist or government employee who addresses the various issues of changing modern cultures such as gender and public nature
- Junior/senior high school teacher (English) with a high level of expertise
- Employee/teacher at a language education company
- Editor of language education materials
- Researcher/specialist/advisor at a foreign student center
- Japanese language teacher
- Interpreter/translator
- Employee of a language/IT corporate laboratory

- As a business professional with an ability to take practical actions

- Software engineer
- System engineer

Doctoral Program

Leading researchers who promote “international cultural studies” in the world

- Researcher at an international organization/research institute
- Researcher at a national/public/corporate laboratory
- Teacher at a college/junior college/specialized vocational high school

Degrees that can be obtained

- Master's Program
- Master's degree (Master of Arts)
- Doctoral Program
- Doctor's degree (PhD)

Qualifications that can be obtained (Master's Program)

- Junior High School Specialized Teacher's Certificate (English)
- Senior High School Specialized Teacher's Certificate (English)
- Curator (*Can also be obtained in the Doctoral Program)

15 SPECIALIZED COURSES



Japanology

In the Japanology Course, we explore human activities in Japan from a cultural point of view while positioning Japanese culture relative to various cultures in the world. We aim to address, jointly study and learn an extremely wide range of cultural and social issues from ancient to modern times concerning literature, arts, religion and philosophy. The course also provides opportunities to improve professional skills for reading ancient papers and reviewing documents, which are often required to deepen understanding of Japanese culture and society. Moreover, the course provides specialized training to foreign students so that they can discuss Japanese culture and society by an academic process without being captivated by popular views of Japan. Our objective is to nurture individuals who can discuss Japan with specialized skills and high-level academic capabilities.

Students' research themes

Master course: Research on gender equality program of Kobe city; A study on the source History of *Onsenji-temple* in Kinosaki; A research on the thoughts of the flower arrangement practice in the Edo period; Images of Japanese performing arts displayed in journals for national propaganda.

Doctoral course: Ethnographical study on the folk music and dance for rice-planting; A study of folk literature in connection with feudal lords in the early modern era; A study on cultural policy on radio broadcasting in the post-war Okinawa under US military occupation; A study on *iemoto* system in *cha-no-yu* (tea ceremony) since the modern era; Yamada Kousaku and film music; A study of the hygiene problems in East Asia in the 19th century: focusing on an open port Incheon, Korea.

Teaching staff

Nobuyuki KONNO, Associate Professor

Subjects: Japanese Language and Culture

Research fields: Japanese intellectual history. Associate Professor Konno conducts studies on the nationalism from the 1920s to the 1940s from viewpoints with an awareness of history and religion.

Fumiaki ITAKURA, Associate Professor

Subjects: Japanese Visual Arts

Research fields: Studies on Japanese films and films in general. Based on the methodology of film study, Associate Professor Itakura studies Japanese films from international and historical viewpoints.

Shizue OSA, Professor

Subjects: Japanese Modern history, Gender history

Research fields: Studies on Modern Japanese history. Professor Osa conducts studies on the War memory and Occupied Japan.

Naoko TERAUCHI, Professor

Subjects: Japanese Performing Arts

Research fields: Studies on Japanese traditional music and performing arts. Focusing on sounds made with the body, Professor Terauchi discusses cultures of the Japanese archipelago in relation to various cultures in Asia and other parts of the world.

Asia-Pacific Culture Studies

Going through major changes in economy and international exchanges, the Asia-Pacific region is rapidly growing. In this sense it is one of the most active regions in the world. However, just following the superficial flow of such development is not enough to understand the characteristics of the region. East Asia, Southeast Asia and the Pacific Area all have extremely complex and diverse old traditions, and have become what they are as such tradition has changed with the wave of globalization. Therefore, in order to have a deep understanding of the characteristics of the region, we need to conduct specialized in-depth studies on many aspects including social structure, religion, history and economic circumstances. This course has a well-established guidance system where professors with diverse specialties teach research methods in classes on a broad range of research fields.

Students' research themes

- Studies on Thai wives who have Japanese husbands
- Representations and practices of Ainu Culture today ---Case studies of cultural activities in Shiraoi town
- Historical studies on the influence on the Japanese image in Australia from the early development of Australian-Japan relationships
- Naxi native official surnamed Mu in Lijiang, Yunnan during the Ming Period 14-17 centuries
- College students' conflicts about love and sex in Indonesia
- Studies on secretaries and the training of secretaries in Outer Mongolia in the Qing period
- A study about the Ownership of Farmlands and its Contracts in Inner Mongolia during Manchu Qing Period: Cases in Guihuacheng Tümed Banner (12th Asia Pacific Research Prize Winner article)

Teaching staff

Tomomi ITO, Associate Professor

Subjects: Culture and Society in Southeast Asia

Research fields: Southeast Asian studies, Thai studies, studies on Buddhism and women

Ke WANG, Professor

Subjects: Culture and Society in China

Research fields: History of Chinese modern thought, Relation between China and Japan

Sachiko KUBOTA, Professor

Subjects: Culture and Society in Oceania

Research fields: Cultural anthropology on Oceania

Yasushi SADAYOSHI, Professor

Subjects: National Integration in Southeast Asia

Research fields: Modern history of Indonesia, studies on overseas Chinese

Shinichi TANIGAWA, Associate Professor

Subjects: Politics and Society in China

Research fields: Political and social movements in China, Changes in the state-society relations in China

Mamoru HAGIHARA, Professor

Subjects: Culture and Society in Mongolia

Research fields: Asian history, especially Mongolian and Chinese history from the Qing period to the present

European and American Culture Studies

In the European and American Culture Studies Course, we conduct multifaceted and comprehensive education and research on European and American societies and cultures, which have been playing a central role in world politics, economy, culture etc in modern times. Although the cultures developed in these regions spread worldwide, it is common knowledge that it is now critically reexamined. Moreover, there has recently been progress in studies on the societies and cultures in Europe and America that only played a peripheral role in establishing the modern era. Based on these past achievements, we reexamine the Western thoughts and values that seem deeply rooted in our modern lives and consciousness, and seek their meanings in the 21st century. We want to reveal the unknown depths of Europe and America through a course of concrete studies in a wide range of fields including history, language, religion, philosophy, literature, art and social system.

Students' research themes

The "German Legends" of the Grimm Brothers, A Study on William Morris, Acceptance of Victorian Culture in "Harry Potter", Modern French Fashion, Czech Romani Literature, Czech Baroque Studies, A Study on C. Bronte Establishment of the Mirandese language, Analysis of Visual Gags in I Love Lucy, Stereotype of the Japanese People in Hollywood Movies, Problems of Italian Immigration in America, Pacifism, Isolationism and Populism in the United States of America during Interwar Periods

Teaching staff

Yoko AOSHIMA, Lecturer

Subjects: Culture and Society in the Slavic World

Research fields: Professor Aoshima studies the modern history of Russia and Eastern European countries. She is specially interested in modernizing reforms, social transformation and emergence of nationalisms in the area.

Hiroko ISHIZUKA, Professor

Subjects: English Civic Culture

Research fields: Professor Ishizuka mainly studies the cultures, society and literature of Victorian England. She is interested in novels by Dickens, Gaskell, Gissing, etc. and looks from various angles into the cultural and social matters of general interest at the time, including social issues, the royal family, leisure, education, gender and fine arts.

Hirota INOUE, Associate Professor

Subjects: Formation of a Multiracial Society in the United States

Research fields: Based on politics, Professor Inoue conducts American studies with a focus on the history of intellectuals and democracy in the United States from the end of the 19th century to the 20th century.

Takuya OZAWA, Associate Professor

Subjects: Latin America and Global History

Research fields: Professor Ozawa specializes in Latin America, especially the modern history of Central America. He studies ethnic issues and culture concerning export crops that largely regulate the society of Central America.

Chiyo SAKAMOTO, Professor

Subjects: Representations of French Culture

Research fields: Professor Sakamoto specializes in French literature with special interest in French female writers and their works. She studies French female writers of the 19th century including George Sand and Marie d'Agout, romanticism, Jeanne d'Arc, etc. A wider range of issues will be addressed in her class, such as the history and representations of European women.

Takuya NISHITANI, Professor

Subjects: Literary and Visual Culture in North America

Research fields: American literature, especially Herman Melville, Nathaniel Hawthorne, and other writers of the American Renaissance; film studies, especially adaptation studies and comparative studies in the narrative representation in film and literature.

Keiji NOTANI, Professor

Subjects: Advanced Seminar in Religion and Culture in Britain

Research fields: Professor Notani conducts studies the relation between Christian religion and English and American culture/literature. He wants to see how religion is involved in the formation of culture and view religion as an identity component for individuals and culture.

Cultural Anthropology

In the Cultural Anthropology Course, teaching staff specialized in various themes and regions provide a high-quality education and research curriculum. Today's various cultural issues are characterized by the dynamism of the conflict, division, integration, reconciliation, generation and extinction of various cultures and values under the influence of globalization. In the course, we jointly consider methods of allowing dialogues among various cultures based on deep intercultural understanding, by viewing the world from down-to-earth research investigation field work with broad and flexible perspectives. We welcome students who wish to be internationally successful specialists and researchers and foreign students who wish to conduct high-level anthropological studies.

Students' research themes

Master's program: cargo cult, Kazakh identity, tourism, multicultural orientalism, post-Soviet period, postcolonial, status of women in China, Boze in Akuseki Island, local Hawaiian, Peruvian living in Japan, primitive art, kula trade, fare trade in Bangladesh, Education of Nation-State, Over Sea Korean, International marriage, Vietnamese in Japan, Cultural Heritage, World Heritage, Murti-culturalism in Japan, Nikkei in Argentine, Korean American, Hispanic, bilingualism, Chinese American, Caribbean in America, Brooklyn Carnival, Native Canadian, sustainable tourism, ethnic media, multiracial in America, ethnic identity, South Americans in Japan, Nikkei Brazilian, Nikkei Hawaiian, life history, diaspora, transnationalism, Dominican baseball migrants, Pentecostalism in Jamaica, Rastafarian, Christianity and contextualization, development and women in Mexico, participation and development
Doctoral program: cultural authenticity, Aneityum of Vanuatu, historical anthropology, refugee, Karenni, homestay, the Experiment in International Living Care and Family of Korea, Social Change of Korean Village in China, Feminization of Migration, Over-Sea Chinese in Vietnam, Anthropology of Tourism on Vietnam, masculinity, gender in the Caribbean, popular music, reggae, soca, dancehall, identity politics, mixed race, 'Hafu', representation

Teaching staff

Kiyoshi UMEYA, Professor

Subjects: Ethnology

Research fields: Social anthropology, East African ethnography, studies on witchcraft and sorcery, Japanese folk-religion, anthropology of development

Hiroki OKADA, Professor

Subjects: Ethnography

Research fields: Societies in East Asia okada and Vietnam, re-organization of families and religions in the process of colonization and modernization, minorities and multiculturalism, Space Anthropology.

Tsuyoshi SAITO, Associate Professor

Subjects: Cultural Anthropology

Research fields: Social anthropology, Middle Eastern ethnography, anthropological Islamic studies, Morocco

Yoshiko SHIBATA, Professor

Subjects: Modern Anthropology

Research fields: Cultural anthropology, Caribbean studies, diaspora, creole/ hybridity, race/ ethnicity, migration/ mobility, globalization, Christian studies, education

Comparative Studies of Civilization and Culture

In this course, we deal with various aspects of civilization and culture that transcend the boundaries of various matters such as geography and language, and conduct comparative studies from a historical point of view concerning the dynamism of the transformation brought about by the transmission and propagation of such aspects with a focus on scientific and technical civilization and linguistic culture. With the asymmetric nature of advantages and disadvantages in civilization and culture in mind, we focus on such aspects as resistance, prejudice and creation underlying the phenomena considered to be unilateral acceptance, and aim to deepen our understanding of the interactions of such aspects and the bidirectionality of transformation based on the latest studies.

Students' research themes

Master's program: Foreigners in Meiji Japan, Text-Image Relations in the Classics, Gardens in Myths, View of Nature, Environmental Issues, Food and Toxic Chemicals, Whitehead's Philosophy of Organism, Xu Guang-qi's View on Mathematics

Teaching staff

Yuika KITAMURA, Associate Professor

Subjects: Translating Classical Literature

Research fields: The reception of classical Japanese literature in modern times with a focus on the "Tale of Genji."

Togo TSUKAHARA, Professor

Subjects: Science, Technology and Society

Research fields: Professor Tsukahara studies science history and technological societies.

Masaru TOHDA, Professor

Subjects: Japan-US Cultural Exchange

Research fields: Professor Tohda specializes in the studies on comparative literature and comparative culture with a focus on Japan-US cultural exchange in the Meiji era. He has written research papers concerning Lafcadio Hearn, Soseki Natsume and Masuji Ibuse.

Takayuki YAMASAWA, Associate Professor

Subjects: Transcultural Studies in the Ancient World

Research fields: Ancient Greek and Roman Cultures. As it is not archeology, the class will not excavate ruins and receive a lot of media coverage. It is unspectacular philology, but Associate Professor Yamasawa believes there is still a lot we can learn from the documents left by ancient people.

International Relations and Comparative Politics

We welcome students who are looking for chances to study Japanese politics and foreign affairs. You would consult with one of five professors of this department who are specialists in international relations, international political economy, security studies, public policies and urban administration. The area of research fields of graduate students are varied covering such countries as Japan, China, India, Europe, America, Middle East, etc. The staff, along with graduate and undergraduate students will be actively engaged in research work in line with the international standard. Students can master a variety of methodologies and approaches through the team teaching method run by five academic staff. Please feel free to contact us if you have any questions. This department offers foreign students the opportunity to study the internal politics and diplomacy of their home country from a comparative perspective.

Students' research themes

Thematic approach: Regional integration, Preventive diplomacy, Conflict and Peace building, Security, Ethnopolitics, Party politics, Democratization, Welfare state, Educational policy, Transnational relations, Contemporary history of International relations

Regional approach: EU studies, French politics, British politics, German politics, Spanish politics, Italian politics, Politics in Northern Europe, American politics, Politics in the Middle East, Politics in ex-Yugoslavia, Indian politics, Sino-Japanese relations, Sino-American relations, Politics in the Mediterranean

Teaching staff

Kazunari SAKAI, Professor

Subjects: International Relations in Europe, EU-Japan Relations

Research fields: Development and issues of European integration, ethnic issues and conflict prevention, contemporary French politics and diplomacy

Masaki KONDO, Associate Professor

Subjects: Comparative Welfare Studies

Research fields: Contemporary German politics, politics of the Japanese welfare state, immigration and welfare state

Maraharu YASUOKA, Associate Professor

Subjects: Comparative Public Policy, American Politics

Research fields: Comparative Public Policy, American Politics and Government, Urban Politics Contemporary modern American politics (especially the federal system and urban issues)

Satoru NAKAMURA, Associate Professor

Subjects: Security Study in the Middle East, Middle Eastern Politics and History

Research fields: Preventive Diplomacy in the Middle East, Middle Eastern Political economy, Saudi Arabian History

Tomokazu SAKANO, Professor

Subjects: Comparative Politics

Research fields: European integration and domestic politics and economy, transformation of the re-organization process of a welfare state, contemporary modern British English politics, party politics



Modernity Studies

The basic framework of our contemporary society consists of three distinct realms, the techno-economic structure, the polity, and the culture. The ruling principles of these three realms, such as functionary rationality, the idea of equality, and expression & realization of "self," originated in Western Europe with the arrival of the modern period. Today, however, these principles are proved to be discordant and are being shaken to their roots along with the progress of globalization. This situation demands a re-examination of the meaning of "modernity" and an accurate reading of just where the world is (should be) heading in the ongoing upheaval. The Modernity Studies Group covers a wide range of disciplines from social thought, economic thought, and political thought to aesthetics, literature and visual arts. Through careful analysis of the prevailing principles of the three realms of the modern world, we aim to cultivate firmly grounded capabilities of cogitation that are required for tackling actual issues in our society.

Students' research themes

Master's program: M. Foucault and Hermine Barbin, Peter Berger's idea of "everyday" and religion, Alfred Schutz's idea of "relevance"

Doctoral program: Ernst Junger, "technology," Niklas Luhmann, social system theory, Herbert Spencer, modernization of Japanese society, D. H. Lawrence, eco-criticism

Teaching staff

Keiko ISHIDA, Associate Professor

Subjects: Cultural Discourse

Research fields: Aesthetics and history of art theory. Lecturer Ishida conducts her studies under such themes as the relations between art and politics in modern times and the artistic communication with others. Her research papers include "Gestalt and <Art – Political Community>" ("Theory of Criticism and Social Theory 1: Aisthesis," Ochanomizu Shobo), etc. Her books include "From Aesthetics to Politics: Modernist Poets and Fascism" (Sophia U. P.)

Yoshihiko ICHIDA, Professor

Subjects: Modern Economic Thought

Research fields: Social thought. Professor Ichida studies philosophical segments of politics, economy and culture, with a focus on the contemporary French thought of Althusser, Foucault and Deleuze. His books include "Althusser: Philosophy of a Connection."

Naritoshi UENO, Professor

Subjects: Modern Political Thought

Research fields: History of political and social thought. Professor Ueno analyses such key concepts as "violence," "liberty" and "public sphere" in the form of social philosophy, focusing on the history of thought concerning the philosophers of the Frankfurt School including Horkheimer and Adorno. His books include "Frontier of the Thought – Violence" (Iwanami Shoten).

Shigeru CHO, Professor

Subjects: Modern Social Thought

Research fields: History of sociology and social thought. Professor Cho analyzes the meanings of such complicated concepts as society, history, culture and life in modern thought, based on the studies on the history of social thought of the Frankfurt School philosophers including Simmel, Weber and Tönnies. His books include "Human Science of Simmel" (Bokutakusha).

Rie MATSUYA, Professor

Subjects: Cultural Representation

Research fields: English literature and philosophy. Professor Matsuya explores the contemporary meanings of Romanticism with a focus on the views of nature and sympathetic imagination. Her books include "Keats and Apollo: Ketas' Poems and Greco-Roman Mythology" (Eihosha).

Contemporary Social Issues

The interaction of humans with nature has been seriously undermined and is becoming increasingly complex in modern society. The objective of the "Contemporary Social Issues" course is gaining understanding of contemporary society through an interdisciplinary approach that bridges the humanities and social sciences in exploring leading issues in modern society. For example, we analyze the changes in thinking surrounding nation states, families and individuals from the perspective of gender theory to capture socially constructed human relations; explore the fluctuation of norms surrounding human life and death; envision an equitable solution to global challenges such as overpopulation, absolute poverty, human-rights violation, etc.; and seek to understand human nature and society in a multicultural world faced with informatization of the consumer society facilitated by innovation in media technology. The "Contemporary Social Issues" course disentangles these conflicting problems theoretically, and provides a means of tackling them realistically.

Students' research themes

- Gender division of labor in the home in urban China
- Euthanasia seen from the perspective of the right to self-determination
- Why is the sex selection of a child unacceptable?
- Racism in dance hall reggae
- A sociological study of "created communities"
- Urban youth subcultures in Japan: The changing perception of public space with reference to the case of parkour
- NPO/NGO network media: Is accessing the public sphere possible through the Internet?
- Occupation and sexuality: GHQ's policy-making on prostitution (Doctoral dissertation)
- Feminism as relation: From the perspective of interaction between images, individuals and methodology
- Changes of heart and the development of moral individualism (Doctoral dissertation)

Teaching staff

Kaoru AOYAMA, Professor

Subjects: Gender and Social Culture Theory

Research fields: Sociology, gender and sexuality. Professor Aoyama is also interested in issues such as globalization, multiculturalism, social exclusion and inclusion, the right to intimacy and representation. She is pursuing a combination of theoretical and empirical research methodologies to look into phenomena that cause changes across public and private life such as immigration, care / sex workers, same-sex marriage, and gender identity "disorder."

Hiroki OGASAWARA, Professor

Subjects: Media, Society and Culture

Research fields: Associate Professor Ogasawara is studying sociology and cultural studies. He discusses empirical, theoretical and historical thought regarding the relationship between multicultural capitalism and racism, especially in the fields of media and sport.

Tetsu SAKURAI, Professor

Subjects: Contemporary Jurisprudence

Research fields: Professor Sakurai's speciality is legal philosophy; he is particularly engaged in "global justice," i.e., how we should understand the meaning of national borders when we address global issues such as absolute deprivation, economic disparities, human rights violations and environmental pollution. He is now working on the problem of whether the establishment of national identity is a necessary prerequisite for the stability of democracy.

Yasuji YAMAZAKI, Professor

Subjects: Life Norm Formation Theory

Research fields: Professor Yamazaki has been studying problems at the boundary between laws and ethics/morals with a focus on the issues that occur when morality and ethics are institutionalized in law in bioethics-related areas and questions over human embryos, surrogacy and brain death, death.

Akihiko NISHIZAWA, Professor

Subjects: Contemporary Social Theory

Research fields: Professor Nishizawa is studying sociology and urban studies. He has been dealing with contemporary social problems, focusing on the life-world and the identity of the urban poor confronted with social exclusion. His recent books include *The Sphere of Poverty: Who is excluded?*, *Kawadeshobo Shinsha*, etc.

Art, Culture and Society Studies

Art and Culture Theory Courses are configured from an arts and culture environment system and content-based arts and culture. Research is conducted on fine art (painting), literature, performing arts (music, opera, theater), and fashion art and how they are related to society.

In content-based arts and culture, social awareness and the worldview reflected through analysis of artwork are considered. In the arts and culture environment system, art management connecting the arts and society is examined and the grand design of cultural policies, considering factors such as the guarantee of the right of easy access to art and actual cultural facility management are compared internationally.

In this course, we welcome candidate students, regardless of their undergraduate major, who are interested in art and supporting its environment as well as those who are keen to undertake specialist learning.

Students' research themes

Master's program: Local community, Public theater organizational management, Network formation between non-profit organizations, Community art, Social and Cultural Center in Berlin, Civic activities and cultural policy in Sweden, Cultural policy in Singapore, Protection and application of cultural heritages: historic sites of France and China, City space improvement in Paris, Church building during the Russian Imperial Period, Japonism, Tadamasa Hayashi, French Impressionist painter Gustave Caillebotte, French Women Writer, Japanese avant-garde calligraphy and abstract expressionism painting, Women and modes in France, Japanese Street Fashion.

Doctoral program: Cultural Policy and social inclusion, Modern advertising in Japan, Daumier and the modern city of Paris, Acceptance of modern French music in prewar Japan, Formation of Japanese ceramics collections in France and the trade between Japan and France, Kenji Miyazawa and the optics.

Teaching staff

Mie ASAKURA, Associate Professor

Subjects: Special Lectures on Contemporary Art Social Theory

Research fields: She specializes in the history of western clothing and is conducting research on the art and culture of modern Europe with a focus on cuts of fashion from France. She is promoting discussion about the relation of art and fashion especially from the second half of the 19th century to the early 20th century. She also has interests in body theory, brand culture theory and the history of Franco-Japanese exchanges.

Hiroko IKEGAMI, Associate Professor

Subjects: Special Lectures on Modern and Contemporary Art

Research fields: She specializes in post-1945 American art and its global impact, but she also conducts research and writes about postwar Japanese art. She is currently working on post-WWII cultural exchange between the United States and Japan and its relationship to cultural diplomacy in the Cold War period.

Kazuko IWAMOTO, Professor

Subjects: Special Lectures on Intercultural Art Theory

Research fields: Her research interests are French-speaking culture, particularly 19th century French literature and the problems of cultural identity and cultural policy in neighboring multilingual Belgium.

Kazuo FUJINO, Professor

Subjects: Special Lectures on Cultural Environment Formation Theory

Research fields: He is working on both theory and practice in music culture, cultural policy and art management. In recent years art has been noted as a tool for community revitalization and the realization of creative cities, but he wants to make clear that the public value of the arts is more diverse.

Noriko YOSHIDA, Professor

Subjects: Special Lectures on Cultural Representation Correlation Theory

Research fields: Her specialty is modern French literature and art, but she is also interested in visual culture and sociocultural history of the West and Japan. She is also interested in comparative culture, the history of Franco-Japanese exchanges and gender studies.

Linguistics and Communication Studies

Rather than a mere means of communication to convey concepts and messages to another party, "language" is also closely related to culture and human cognition, thinking and customs. This course seeks for an effective method of teaching Japanese as a second language based on comparative and contrastive analysis related to language structure and language usage. Language and cultural analysis and methodologies are developed for second language acquisition and translation/interpretation, and we are working on solving the problems of cross-cultural communication, which is becoming essential with the progress of globalization. This course aims to train human resources who have education and research abilities through various lectures and exercises related to verbal communication leading from basic to advanced levels.

Students' research themes

Master's program: Modality in Thai, Fillers in Japanese and French, Rhetoric, Persuasion, Words written in Katakana, Translation of onomatopoeia in comics, Bilingualism, Social aspect of Japanese language education, etc.

Doctoral program: Compound verbs, Rhetoric of fiction, Translation of Japanese literature in Vietnam, Contrastive study of verbs in Japanese and Chinese, Acquisition of L2 morphosyntax, Historical study of Japanese language education.

Teaching staff

Naoe KAWAKAMI, Lecturer

Subjects: Special lecture on applied teaching Japanese

Research fields: My research field is the historical study of Japanese language education. In particular, I am interested in the historical progress of Japanese language education in China. I currently analyze educational materials and curriculum, etc., based on the history and social systems in China from the 1930s to 60s. I am also concerned with the practice research on Japanese language education.

Miho SAITO, Associate Professor

Subjects: Special lecture on means of teaching Japanese

Research fields: I am currently researching modern Japanese grammar, including regional dialects. In addition, I have a strong interest in the field of teaching/learning Japanese as a foreign/second language. I am planning to carry out researches on teaching methods and coursework of Japanese based on the result of the research on Japanese grammar and my own practice of teaching Japanese.

Junko TANAKA, Professor

Subjects: Special lecture on second language acquisition (SLA) theory

Research fields: Her research interests include the role of feedback and output in SLA processes and the role of individual differences in SLA such as age, language aptitude, and motivation. Her current research project deals with how a concept in a second language (L2) that does not exist in the learners' first language (L1) can be correctly or incorrectly segmented and mapped onto L2 morphology. She is also interested in classroom SLA as well as SLA in naturalistic or multilingual contexts.

Sooyun PARK, Lecturer

Subjects: Teaching Japanese as a Second Language (Content)

Research fields: Her research interests focus on modern Japanese language, especially the adverbs. Currently, her research also deals with grammatical studies for Japanese education. She is also interested in the heritage language in immigrant societies.

Fumiko FUJINAMI, Professor

Subjects: Special lecture on translation studies

Research fields: The main themes are general practical theories on using translation for intercultural communication, and how to adapt it in detail to actual translation (especially between Japanese, German and English). I also have a keen interest in how to realize translations across cultural differences, and what effect the audience, media and goal have on translation work.

Hideo YUASA, Professor

Subjects: Special lecture on forms of commonly used words

Research fields: I am interested in what sort of syntax is preferred in Japanese and English, German etc. What effect it has on a native speaker's thought process, and what purpose it serves in communication. Another goal is a typology-based look at the similarities and shared points between languages.

Koichi YONEMOTO, Professor

Subjects: Special lecture on Rhetorical Communication Theory

Research fields: I am interested in the uses of figures of speech (rhetoric) to convey thoughts and emotions effectively. I deal with anything that uses words to express something, such as daily conversation, newspapers, magazines, advertisements and so forth. I particularly have an interest in the rhetoric used in literature, especially fictional works.

Human Communication

Human Communication Program presents a wide range of opportunities for research about communication based on human sciences and cognitive sciences. Students can learn advanced knowledge of communication by studying phonetics, semantics, interface studies, psycholinguistics, psychology, and neurology.

A PhD candidate must learn basic skills of statistics and will be advised to master an advanced level of statistics. Research should be performed through evidence-based studies. You have to gather enough data in both quality and quantity before you come to a conclusion.

Our M.A. program is divided into two tracks; the career enhancement track and the researcher track.

Career enhancement track is aimed at students who want to develop skills for a career outside of academic societies. Students will acquire up-to-date knowledge and research skills. Students, with guidance from professors and senior students will submit an MA report.

The researcher track is more aimed at students who want to go on to do a Ph.D. with more focus on research skills than the Career enhancement track. The other main difference is that students submit a M.A. thesis to complete the course.

Students' research themes

- The influence of working memory contents on visual search.
- Cueing effects of target location probability and repetition.
- A Japanese-Chinese comparison on syntax and sentence delivery
- The traits of tandem learning, seen from scenes of language output difficulties
- Changes in prosody caused by shadowing training of Japanese
- Recognition and acoustic features of attitudes realized in Chinese

Teaching staff

Toshiyuki SADANOBU, Professor

Subjects: Special lecture on Communicative Grammar Theory

Research fields: My main interest is through examination of the views on languages, communication and speech by considering human communicative grammar collectively, from the standpoints of both processing information, and social interpersonal interaction.

Ryoko HAYASHI, Professor

Subjects: Special lecture on linguistic behavioral science

Research fields: Speech science, psycholinguistics. I am researching phonetics in Japanese and other languages as well as experimental solutions to the difficulties in pronunciation for foreign languages. Also, I am interested in speech disabilities, linguistic development and the difference in teaching speech communication between countries.

Kiyoshi MAIYA, Professor

Subjects: Special lecture on interpersonal behavioral science

Research fields: Interpersonal communication, experimental psychology. Interpersonal interaction is a treasure trove of dilemmas and paradoxes. Misunderstandings, misinformation, mistrust and confusion are the key words. Interpersonal communication is important, but difficult to handle. I research it further through behavioral science. I currently research training for interpersonal skills and cultural differences in facial expression and emotion.

Eriko MATSUMOTO, Professor

Subjects: Special lecture on Neuropsychology and Communication

Research fields: Cognitive psychology, neuropsychology, and cognitive neuroscience. I am interested in how human brain represents the higher-cognitive functions such as the visual perception, attention, and social interactions. I would like to make it clearer through brain imaging techniques and experimental psychological methods. I am also interested in the effects of emotional stimuli on cognitive process.

Shinobu MIZUGUCHI, Professor

Subjects: Special lecture on Linguistic Interface Theory

Research fields: Semantics, and semantics/prosody interface. Semantics, especially, the numeral systems of classifier languages in Asia, is my field. Semantics/prosody interface and L2 prosody learning are also of my interest. Interface study is one of the most effective methods to investigate the complex system of human cognition.

Shinya YAMAMOTO, Associate Professor

Subjects: Special lecture on the evolution and culture of social intelligence

Research fields: Comparative cognitive science, and evolutionary social psychology. My ultimate goal is to understand what humans are. For this purpose, I am investigating the evolution and culture of human social intelligence. Empathy, understanding of others, cooperation, and social norm are the keywords. Through psychological experiments and fieldwork, I compare humans, chimpanzees, bonobos, and other animals.

Computers and Communication

The Computer Communication course is a course on using information technology, such as computers and the Internet, for teaching and research. This course teaches the latest online information skills, collection, analysis and sorting of communicative information on computers, and other such immediately useful high-level information processing skills, which will also allow more effective communication in future.

Students' research themes

Analysis of the forms of study in branches of information, Automated classification of literature XML searching method Learning system for IT specialists Error-checker in foreign language learning systems, Utilization of memory mechanism in learning systems, Bottom-up question support system, Communication-based city rating, Reverse onomatopoeia dictionary, User interface, Communication assistance

Teaching staff

Kazuhiro OHTSUKI, Professor

Subjects: Special lecture on Computer Communication System Theory

Research fields: Research relating to info-communication systems. The Great Hanshin-Awaji Earthquake made it painfully clear that there is a gap between the viewpoint of those using the information, and those building information distribution systems. As such, I've come to place a heavy emphasis on the position of those on the scene.

Min KANG, Professor

Subjects: Special lecture on Computer Simulation Theory

Research fields: The adaptation of information communication technology to computer education and foreign language education. In particular, I am focusing on using statistics-based approaches to extract the user's preferences and give them the information that suits their needs.

Hidehiko KIYOMITSU, Associate Professor

Subjects: Special lecture on information base theory

Research fields: I aim to use data at a higher level, through web information systems and databases. The theme is being able to personalize output for each user based on time, place, user profile, access history and so forth.

Takeshi NISHIDA, Associate Professor

Subjects: Special lecture on computational science adaptation theory

Research fields: I am researching human-human interaction using info-communication technology, as well as human-computer interaction. In particular, I put focus on (1) developing systems based on reflection of common communication problems such as the difficulty of reaching consensus, giving criticism, or talking in foreign languages, and (2) learning from testing systems developed in actual situations.

Hajime MURAO, Professor

Subjects: Special lecture on Cognitive Information System theory

Research fields: Using "soft information processing" technology and multi-agent systems to research the intelligent actions of humans and other groups of living things, analyzing and adapting the results. The targets include small groups of individuals, society, the economy, and the Internet.

Junya MORISHITA, Professor

Subjects: Special lecture on Overall Media Theory

Research fields: I focus on database systems that store and make use of information. However, I am looking into a "soft" database system. In other words, instead of the typical database dealing with correct, rigid, complete and simple data, I aim for one that works with vague, complex, soft, incomplete data, with room for growth.

Systems of Second Language Education

In Foreign Language Education Systems, we research the fields of linguistics, psychology, expression and media analysis as they relate to foreign language education, developing students' ability to link them together and employ them in teaching foreign languages. In particular, in the field of educational research, we focus on:

- (1) researching linguistic education by applying knowledge of linguistics, psychology and related fields
- (2) researching broad methods of teaching literary culture and the works that reflect them, as well as adapting this to teaching languages
- (3) demonstrating research relating to preparing an environment for linguistic education, such as IT education systems
- (4) researching the environmental, cultural and societal bases of linguistic education
- (5) assisting research on support in the teaching scene, such as demonstrations of educational guidance

Students' research themes

Master's program: Use of Lexical Stress Information in Silent Reading and Speech Production by Japanese Learners of English: Evidence from Eye Movements and Naming Tasks, The Effects of Short-Term Overseas Training and Corrective Feedback on Second Language Writing of Japanese Learners of English

Doctoral program: The automatization of grammatical encoding process during oral sentence production by Japanese EFL learners: A syntactic priming, An investigation of the automaticity in parsing for Japanese EFL learners: Examining from psycholinguistic and neurophysiological perspectives

Teaching staff

Masayuki KATO, Professor

Subjects: Special Lecture on Linguistic Teaching Environments

Research themes: English education. I am researching methods of effective class arrangements using the web and computers, and the state of foreign language professors and World Englishes on a cultural and societal level.

Atsuhisa SHIMAZU, Professor

Subjects: Special Lecture on Cultural-linguistic Expression

Research fields: Modern American literature. I am particularly interested in Jewish American literature, and am attempting to decipher Bernard Malamud's novels and short stories from the perspective of expression.

Yasunori TAKAHASHI, Lecturer

Subjects: Special Lecture on Basic Linguistic Comparisons

Research fields: Chinese linguistics, phonetics and phonology. I have researched tonal phenomena in Chinese dialects from both phonetic and phonological viewpoints.

Daichi HIROTA, Associate Professor

Subjects: Special Lecture on Lingua-cultural Environment I

Research fields: French literature. My object of study is modern French poetry represented by Baudelaire, and I am trying to describe his poetics from a linguistic viewpoint. In addition, I am interested in literary criticism and language teaching through the use of computers and the Internet.

Asako FUKUOKA, Associate Professor

Subjects: Special Lecture on Lingua-cultural Environment II

Research fields: My object of study is modern Austrian literature and drama, especially the novelist Elfriede Jelinek. I deal with the themes of memory and evocation of calamity in literature, the relationship of visionary art to written art, and the physicality of text. I welcome students who want to speculate from a long-term perspective on the possible (dynamic) relationship between language art and society, and on the significance and necessity of studying foreign literature.

Hirokazu YOKOKAWA, Professor

Subjects: Special Lecture on Second Language Cognition

Research fields: English education studies and psycholinguistics. My main research themes are L2 reading, writing, speaking and listening as well as the cognitive mechanisms for vocabulary, and how all of this might be adapted for practical applications in classes.

Contents in Second Language Education

The Contents in Second Language Education course is aimed at training people who can take an active role in innovating language education by conducting research into the content and method of Applied Linguistics. In this course, we work with an academic base of linguistics (corpus linguistics, cognitive linguistics, pragmatics, conversation analysis, speech science, grammar, education, educational science and class theory) and emphasize research with a focus on practical use in the field of education. Through a multifaceted approach to the challenges of teaching other languages, students in this course will be sought after by education agencies all over the world. Even if you haven't specialized in linguistics in your undergraduate studies, this course welcomes any student with a desire to contribute to the globalization of society through second language education.

Students' research themes

Master's program: English intensifiers, English collocation, English causative verbs, English activating expressions, First and third person German verbs, Japanese katakana, shadowing, phonics rules, Focus-on-form pronunciation aids, English/Japanese code-switching

Doctoral program: Identity and second language use, Developing tests for elementary school English teacher suitability, Formulation in interaction, Japanese compound verbs, Similar forms in Chinese and Japanese

Teaching staff

Shin'ichiro ISHIKAWA, Professor

Subjects: Special Lecture 2 on Contents in Second Language Education

Research fields: My research fields cover applied linguistics, corpus linguistics, psycho-linguistics, and TESOL (especially vocabulary learning, development and analysis of teaching materials, and language teaching methodologies). I welcome any students who want to consider languages and language educations from a scientific perspective.

Harumi KASHIWAGI, Professor

Subjects: Special lecture on second language educational technology

Research fields: Recently, I have been interested in developing a learning system by using the position information of learners and objects in real space. I am also interested in developing a listening-based learning system and a system with an interactive whiteboard. I welcome any students who are interested in developing a learning system with new technology. If you have any questions, e-mail me.

Emiko KIHARA, Associate Professor

Subjects: Special lecture on second language teaching theory

Research fields: My research relates to Cognitive Linguistics, especially to constructions in English. I have focused on the correlation between form and meaning in English (written by the native speaker), and currently I am studying constructions written by L2 learners (Japanese college students).

Tim GREER, Professor

Subjects: Special lecture on second language operations

Research fields: I am interested in the relation between linguistic expressions and the people that use them. I specialize in L2 pragmatics, using qualitative investigation methods and detailed, empirical analysis of conversations. I research social activities involving words that come up in ordinary and bilingual conversation, as well as conversation in oral English ability tests. Additionally, I also research conversation analysis, identity construction and bilingualism.

Shunyaku SHU, Professor

Subjects: Special lecture on adaptive linguistic comparisons

Research fields: My research interests are situated at the intersection between speech science and second language education. I research speech from psychological, biological and physical standpoints, and consider ways to more effectively teach second language pronunciation. I would like to supervise students with an interest in second language pronunciation and its pedagogy.

Kayo NISHIDE, Lecturer

Subjects: Special lecture on adaptive linguistic comparisons

Research fields: My research aims to undertake a systematic description of the West Germanic language, Luxembourgish, which is the national language of the Grand-Duchy of Luxembourg, where German and French are also spoken as official languages. In studying the language of a multilingual country, I'm also interested in various sociolinguistic topics such as language contact, code-switching and multilingual education.

Kazuhiro YAMATO, Professor

Subjects: Special lecture on second language teaching content

Research fields: I am interested in teaching English pronunciation, particularly English prosody (i.e. rhythm and intonation) and currently working on analyzing and describing the use of intonation by Japanese EFL learners. Additionally, I am also interested in the methods and theoretical backgrounds involved in developing pragmatic competence.

Advanced Communication (Joint Research Course in Doctoral Program)

The increasing problem of cultural friction as well as the matter of coexistence with robots, which is a concern we will face in the near future, is nothing if not a communication issue. What is human communication and what cultural differences does it reflect? What roles do languages, nonlinguistic actions, body language and paralanguage play in communication? How can we make use of these in studying foreign languages? The Advanced Communication course is dedicated to using the latest technology to examine these issues, opening new possibilities for communication.

Joint Research with: Advanced Telecommunications Research Institute International (ATR)

Students' research themes

Doctoral program:

- Effects of pronunciation training on foreign language learning
- The role of presenting visualized articulatory gesture in English education

Teaching staff

Akira UTSUMI, Invited Professor

Subjects: Special lecture on Advanced Communication
Research fields: Computer vision, gaze tracking, human-computer interaction

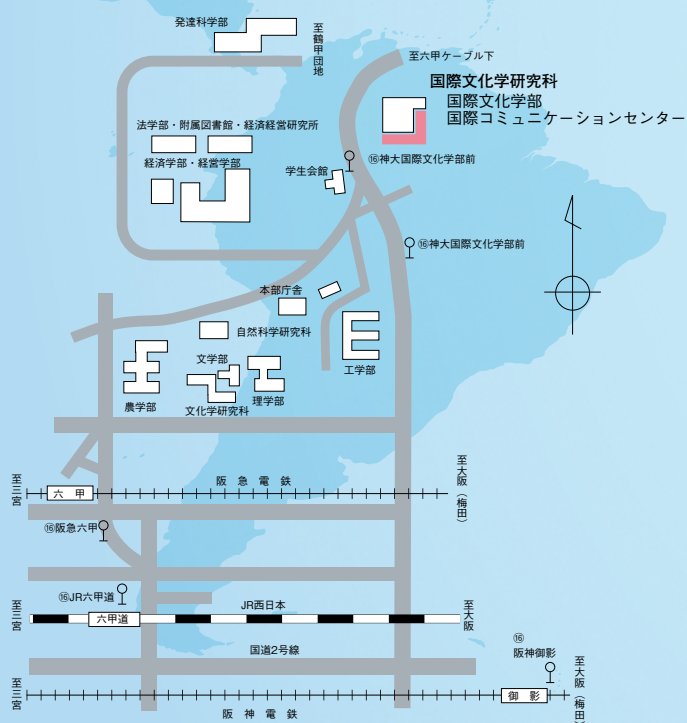
Hidehiko Sumioka, Invited Associate Professor

Subjects: Special lecture on Advanced Communication composition
Research fields: Communication between humans and robots

Reiko YAMADA, Invited Professor

Subjects: Special lecture on Advanced Communication learning
Research fields: Speech perception, production and learning of second language, and development of language learning systems.





■交通機関

阪神「御影」・JR「六甲道」・阪急「六甲」から
神戸市営バス16系統「六甲ケーブル下」行き
「神大国際文化学部前」下車



神戸大学大学院国際文化化学研究科

〒657-8501 神戸市灘区鶴甲1-2-1
TEL(078)803-7530 FAX(078)803-7509
<http://web.cla.kobe-u.ac.jp>